

三条岡山遺跡

発掘調査報告書

(第十九地点)

―片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群―

二〇〇九年九月

芦屋市教育委員会

三条岡山遺跡

発掘調査報告書

(第十九地点)

―片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群―

二〇〇九年九月

芦屋市教育委員会



I 区SX04掘削状況（南から）



I 区周濠1検出状況（西から）



I 区完掘状況（南東から）



Ⅱ区上段掘削状況（東から）



Ⅱ区下段掘削状況（東から）



西畦における周濠3の土層断面（東から）



Ⅲ区周濠3掘削状況（南から）



Ⅲ区周濠3出土朝顔形埴輪



Ⅳ区堀掘削状況（東から）



調査地遠景（南から）（撮影 梅原章一氏）

序

三条岡山遺跡は、芦屋市と神戸市の市境に近い丘陵地にある遺跡です。昭和35（1960）年の工事中に、古墳時代の須恵器・埴輪・陶棺片や、中世の土器・陶器がたくさん採取されたことから、その存在が明らかになりました。それから半世紀近い間、幾たびかの発掘調査が行われ、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、飛鳥時代の祭祀遺構、中世の造作が確認されましたが、埴輪や中世の遺物に直接結びつく遺構はなかなか見つかりませんでした。

昨年（平成20年）、三条岡山遺跡で性格の判る遺構が姿を現しているという報告を受けて、4月21日に、文化財保護審議会の村川行弘委員（故人）と発掘現場を訪れました。そこには、見晴らしの良い高台に築かれ、千数百年の間眠っていた古墳の周濠や、数百年前の中世の堀などが姿を現していました。そして、たった今掘り出されたばかりの遺構によって、長年にわたる三条岡山遺跡の謎が解け始めたことがわかりました。

遺跡は、過去の人々から私たちに時間の壁を超えて残された宝箱です。その蓋を開けたとき、私たちは多くの先住者の生き様を知るとともに、過去の人々からのメッセージを受け取ることができます。この三条岡山遺跡の発掘調査報告書もその一つです。本書によって、大昔の芦屋の姿を垣間見ることができますし、後世の人々にも語り伝えることが可能となりました。

刊行にご協力頂いた多くの方々に感謝の意を表するとともに、本書が市民の皆様の遺跡への理解を助ける一助となることを願います。さらに、今後とも、遺跡の保存・活用に市民の皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成21年9月30日

芦屋市教育長

藤 原 周 三

例 言

1. 本書は、兵庫県芦屋市三条町240番地3・240番地7（敷地面積1,499.78㎡）に所在する三条岡山遺跡（第19地点）の埋蔵文化財発掘調査の正報告書である。発掘調査は、芦屋市教育委員会が、宅地造成工事に伴い、本発掘調査を平成20年4月7日～平成20年7月2日の期間に実施した。遺跡は、兵庫県教育委員会が平成16年3月に公開している『兵庫県遺跡地図—第1分冊—（発掘調査の手引き・遺跡地名表）』の地名表編P125に、「地図番号P96、遺跡番号070031三条岡山遺跡」（種類：集落・墓ほか、時代：弥生・古墳・奈良・中世・近世）として掲げられている。また、その位置や範囲については、同『兵庫県遺跡地図—第2分冊—（遺跡分布地図）』の図版96（国土地理院発行2万5千分の1地形図複製「西宮」）に周知の埋蔵文化財埋蔵地として記載されている。同遺跡は、『芦屋市教育委員会1980・1993・2001・2009a』でも一貫して周知されている。
2. 本書は、芦屋市文化財調査報告第82集とする。報告書の作成、編集は、平成20・21年度事業として芦屋市教育委員会の責任の下に実施し、事業者新光商事有限会社との事業協定に基づいて、平成21年9月末を期限に公開するものである。なお、発掘調査ならびに整理作業費や報告書印刷費は、すべて事業者が負担した。記してその社会的な協力に感謝したい。また、現場の発掘作業は、株式会社朽矢組に委託した。
3. 発掘調査は、芦屋市教育委員会が調査主体となり、社会教育部生涯学習課文化財担当主査森岡秀人（学芸員）と同担当嘱託白谷明世（学芸員）が担当し、同担当学芸員竹村忠洋・同担当嘱託坂田典彦（学芸員）の助言と協力を得た。なお、調査体制については、第1章第2節に記したとおりである。
4. 遺物・資料整理作業および報告書作成作業は、森岡・白谷が担当し、竹村・坂田・同担当嘱託平山裕之（学芸員）の支援を得た。整理補助員として、生涯学習課臨時的任用職員 桑原晋世・近藤奈保子・須田佑子・山本麻理が従事した。また、芦屋市内の中学2年生が、発掘作業や遺物・資料整理作業、報告書作成作業にトライヤルウィーク活動で参加した。平成20年度の参加者は、植山海生・小林智可子・松崎幸（潮見中学校）、澤田杏菜・濱西舞・前田順子・松本賢樹（精道中学校）、井上恭輔・大熊真樹・橋本優太郎（山手中学校）、平成21年度の参加者は、須山稜太・中尾真由・渡邊賢也（潮見中学校）、石坂弘樹・時信勇軌（精道中学校）、尼子結斗・山田湧（山手中学校）である。なお、遺物の復元には、文化財ボランティアの相澤敦子・梅本素子・久保ふく子・小島静子・中井みどり・仲谷由利子諸氏にご支援いただいた。
5. 本書の編集は、森岡の協力を得て白谷が担当した。本書の執筆は、森岡・白谷が担当した。執筆分担の責は目次に掲げたとおりである。
6. 本書で使用した方位は、磁北である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。
7. 本発掘調査状況のビデオ撮影は、山本徹男氏（市内在住・映像作家）に依頼した。
8. 本報告に関わる遺物・写真・図面等の調査記録等は、芦屋市役所分室三条整理事務所（平成22年4月1日以降は、芦屋浜取蔵庫）において保管している。学校教育や社会教育に広く活用されることを希望する。
9. 本報告では、主たる遺物の年代は、下記の文献に拠ったが、本文中ではその出典について示していない。
弥生土器…寺沢 薫・森岡秀人 編 1989・1990『弥生土器の様式と編年 近畿編』Ⅰ・Ⅱ 木耳社
古式土器…森岡秀人・西村 歩 編 2006『古式土器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター
須恵器…大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものとさし—陶器の須恵器—』（大阪府立近つ飛鳥博物館図録40）
土師質土器（土壺）…長谷川 真 2006『瀬戸内東部—播磨』第25回 中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相
〈第25回中世土器研究会シンポジウム資料〉日本中世土器研究会、長谷川 真 2007『播磨における土製煮炊具の様相』『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
土師質土器・瓦質土器（羽釜）…森島康雄 1990『中河内の羽釜』『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 日本中世土器研究会
備前焼（播鉢）…桑岡 実 2000『備前焼播鉢の編年について』第3回中近世備前焼研究会資料 中近世備前焼研究会
10. 本書題字は春木和子氏の揮毫によるものである。
11. 現地調査および調査前後の検討、報告書の作成において、下記の方々に専門的な立場や地元の経験的な視野から献身的なご教示、ご協力、ご支援を賜った。ご芳名を記し、深く感謝の意を表する。
伊井孝雄、勇 正廣、金澤雄太、河内一浩、高橋克壽、寺前直人、中澤康則、桑岡 実、東影 悠、藤川祐作、松尾信裕、松田和義、村川行弘、守田めぐみ、森村健一、山上雅弘、渡辺 昇（順不同、敬称略）

本文目次

序	芦屋市教育長 藤原周三	i
例言		ii
第1章 序章		
第1節	本発掘調査に至る経緯と経過	(白谷朋世) 1
第2節	調査組織	(白谷) 1
第3節	調査の経過	(白谷) 2
第2章 三条岡山遺跡をめぐる古環境と既往の調査		
第1節	三条岡山遺跡周辺の地理・地質と歴史・伝承	(森岡秀人) 3
第2節	既往調査の概要	(森岡) 3
第3節	三条岡山遺跡第17地点の調査概要	(白谷) 6
第3章 発掘調査の概要		
第1節	本発掘調査の方法	(白谷) 9
第2節	層 序	(白谷) 10
第3節	遺 構	(白谷) 11
1.	I区・V区	
(1)	第1遺構面	
(2)	第2遺構面	
(3)	第3遺構面	
(4)	第4遺構面	
2.	II区	
(1)	上段第1遺構面	
(2)	上段第2遺構面	
(3)	上段第3遺構面	
(4)	下段第1遺構面	
(5)	上段第4遺構面	
3.	III区・IV区	
(1)	III区の中世遺構	
(2)	III区の前中世時代の遺構	
(3)	III区の前中世時代の遺構	
(4)	IV区の前中世遺構	
(5)	IV区の中世遺構	
第4節	遺物	(白谷・森岡) 42
1.	I区・V区	
2.	II区	
3.	III区・IV区	
第4章 まとめ		
第1節	時代毎の概要	(白谷) 62
第2節	準高地性集落としての三条岡山遺跡	(森岡) 63
第3節	三条岡山古墳群の墳形・規模・年代・立地	(白谷・森岡) 64
第4節	三条岡山遺跡の中世居館	(白谷・森岡) 65
引用・参考文献目録		67

挿 図 目 次

第1図	報告書作成のための室内作業風景	第26図	Ⅱ区上段第4遺構面平面図
第2図	Ⅰ区調査風景	第27図	Ⅱ区西壁土層断面図
第3図	文化財保護審議会村川行弘委員の視察	第28図	Ⅱ区東壁・北壁土層断面図
第4図	Ⅱ区調査風景	第29図	Ⅲ区平面図
第5図	Ⅲ区調査風景	第30図	Ⅲ区堀平面図・土層断面図
第6図	三条岡山遺跡の既往調査地点分布図および主要遺物	第31図	Ⅲ区周濠3平面図・立面図・土層断面図
第7図	第6トレンチの調査風景	第32図	Ⅲ区土層断面図
第8図	第9トレンチの調査風景	第33図	Ⅳ区平面図
第9図	調査地地形図および確認調査トレンチ配置図	第34図	Ⅳ区堀土層断面図
第10図	確認調査出土の特殊遺物	第35図	Ⅳ区堀の土構平面図・土層断面図
第11図	調査区配置図	第36図	Ⅰ区SK02、SX01・02出土遺物実測図
第12図	Ⅰ・Ⅴ区第1遺構面平面図	第37図	Ⅰ区SX03出土遺物実測図
第13図	Ⅰ区第2遺構面平面図	第38図	Ⅰ区SX04・05出土遺物実測図
第14図	SX02平面図および見通し断面図	第39図	Ⅰ区SX04・06出土遺物実測図
第15図	Ⅰ区第3遺構面平面図	第40図	Ⅰ区周濠1出土遺物実測図(1)
第16図	SX03平面図および見通し断面図	第41図	Ⅰ区周濠1出土遺物実測図(2)
第17図	SX04・06平面図および見通し断面図・土層断面図	第42図	Ⅰ区包含層出土遺物実測図
第18図	Ⅰ区第4遺構面平面図	第43図	Ⅱ区池出土遺物実測図
第19図	SX05・周濠1平面図および見通し断面図・土層断面図	第44図	Ⅱ区中世遺構出土遺物実測図(1)
第20図	Ⅰ区西壁土層断面図	第45図	Ⅱ区中世遺構出土遺物実測図(2)
第21図	Ⅰ区東壁土層断面図	第46図	Ⅱ区周濠2および包含層出土遺物実測図
第22図	Ⅱ区上段第2遺構面平面図	第47図	Ⅲ区堀出土遺物実測図
第23図	Ⅱ区上段第3遺構面・下段第1遺構面平面図	第48図	Ⅲ区周濠3出土遺物実測図
第24図	Ⅱ区中世遺構平面図	第49図	Ⅲ区周濠3および包含層出土遺物実測図
第25図	Ⅱ区中世遺構見通し断面図および土層断面図	第50図	Ⅲ区SK08出土遺物実測図
		第51図	調査区遺構配置概念図
		第52図	三条岡山遺跡第2・3・19地点中世居館復元模式図

表 目 次

第1表	三条岡山遺跡既往調査一覧表
-----	---------------

写真図版目次

巻頭図版1 I区

- I区SX04掘削状況(南から)
- I区周濠1検出状況(西から)
- I区完掘状況(南東から)

巻頭図版2 II区

- II区上段掘削状況(東から)
- II区下段掘削状況(東から)

巻頭図版3 III区

- 西畦における周濠3の土層断面(東から)
- III区周濠3掘削状況(南から)

巻頭図版4 III・IV区、調査地遠景

- III区周濠3出土朝顔形埴輪
- IV区堀掘削状況(東から)
- 調査地遠景(南から)

図版表紙

- 調査地からの眺望
- 調査地周辺の石仏

図版1 調査地遠景

- 調査地遠景(南から)
- 調査地遠景(南東から)

図版2 確認調査時の調査地現況

- 調査地現況(南東から)
- 調査地現況(南西から)
- 調査地現況(西から)

図版3 確認調査(1)

- 第2トレンチ掘削状況(南から)
- 第3トレンチ掘削状況(南東から)
- 第4トレンチ掘削状況(東から)
- 第5トレンチ掘削状況(東から)
- 第7トレンチ東壁(西から)
- 第8トレンチ東壁(西から)
- 第9トレンチ掘削状況(南から)
- 第9トレンチ西壁(東から)

図版4 確認調査(2)

- 第6トレンチ全景(南から)
- 第6トレンチ西壁(東から)
- 第6トレンチ東拉張区埴輪出土状況(北から)
- 第6トレンチ東拉張区埴輪出土状況(西から)

図版5 本発掘調査時の調査地現況

- 調査地現況(南から)
- 調査地現況(北西から)
- 調査地現況(北東から)

図版6 I区第1遺構面・V区第1遺構面(1)

- I区第1遺構面検出状況(北から)
- I区第1遺構面掘削状況(北から)
- V区第1遺構面掘削状況(北から)

図版7 I区第1遺構面・V区第1遺構面(2)

- I区第1遺構面検出状況(南東から)
- I区第1遺構面掘削状況(南西から)
- I区SK01半截状況(西から)
- V区南部攪乱状況(南西から)
- V区第1遺構面検出状況(南西から)
- V区完掘状況(北から)

図版8 I区第2遺構面

- I区第2遺構面検出状況(北から)
- I区第2遺構面掘削状況(北から)
- I区SX01掘削状況(東から)
- I区SX02掘削状況(北から)

図版9 I区第3遺構面

- I区第3遺構面検出状況(北から)
- I区第3遺構面掘削状況(南から)
- I区第3遺構面掘削状況(南東から)

図版10 I区SX03(1)

- I区SX03掘削状況(南から)
- I区SX03およびP2半截状況(南から)
- I区SX03中央部掘削状況(東から)
- I区SX03掘削状況(北から)
- I区SX03土層観察用土手土層断面(南から)

図版11 I区SX03(2)

- I区SX03遺物出土状況(南から)
- I区SX03瓦当出土状況(北西から)
- I区SX03-P1掘削状況(南から)
- I区SX03-P2掘削状況(南から)
- I区SX03-P3掘削状況(南から)
- I区SX03-P1~3完掘状況(南から)
- I区SX03完掘状況(南から)
- I区SX03完掘状況および東壁土層断面(西から)

図版12 I区SX04

- I区SX04遺物出土状況(南から)
- I区SX04掘削状況(東から)
- I区SX04掘削状況(南から)
- I区SX04完掘状況(東から)
- I区SX04完掘状況(南から)

図版13 I区SX06、SK02・04・05

- I区SX06検出状況（南東から）
- I区SX06北部掘削状況（南東から）
- I区SX06掘削状況（北東から）
- I区SX06完掘状況（北東から）
- I区SX04・06掘削状況（南東から）
- I区SK04・05掘削状況（北東から）
- I区SK02掘削状況（東から）

図版14 I区第4遺構面

- I区第4遺構面完掘状況（北から）
- I区第4遺構面南部完掘状況（北東から）
- I区第4遺構面周濠1・SX05掘削状況（南東から）
- I区第4遺構面周濠1・SX05掘削状況（東から）

図版15 I区SX05

- I区SX05掘削状況（東から）
- I区SX05掘削状況（南から）
- I区SX05北部埴輪出土状況（北から）
- I区SX05南部礫出土状況（南から）
- I区SX05北部下位土層断面（西から）
- I区SX05南部床面検出状況（西から）

図版16 I区周濠1（1）

- I区周濠1検出状況（東から）
- I区周濠1掘削状況（東から）
- I区周濠1完掘状況（東から）
- I区周濠1土器出土状況（東から）
- I区周濠1土器出土状況（南から）
- I区周濠1土器出土状況（南から）
- I区周濠1土器出土状況（西から）

図版17 I区周濠1（2）

- I区周濠1検出状況（西から）
- I区周濠1掘削状況（西から）
- I区周濠1東側土手土層（西から）
- I区周濠1西側土手土層（西から）
- I区周濠1東部掘削状況（南から）
- I区周濠1東部遺物出土状況（南から）
- I区周濠1南東部遺物出土状況（東から）
- I区周濠1と東壁土層（西から）

図版18 I区土層断面

- I区西壁土層断面（北東から）
- I区南部西壁土層断面（東から）
- I区中央部西壁土層断面（東から）
- I区北部西壁土層断面（東から）
- I区南部東壁土層断面（南西から）
- I区断割トレンチ土層（西から）

図版19 II区全景・上段第1遺構面

- II区全景（南西から）
 - II区上段第1遺構面検出状況（北から）
 - II区上段第1遺構面検出状況（東から）
 - II区上段第1遺構面掘削状況（北から）
 - II区上段第1遺構面掘削状況（東から）
- 図版20 II区上段第2遺構面
- II区上段第2遺構面検出状況（北から）
 - II区上段第2遺構面検出状況（東から）
 - II区上段第2遺構面掘削状況（北から）
 - II区上段第2遺構面掘削状況（東から）
 - II区上段第2遺構面遺物集中部の遺物出土状況（西から）
 - II区上段第2遺構面遺物集中部の遺物出土状況（東から）

図版21 II区上段第3遺構面池（1）

- II区上段池検出状況（北から）
- II区上段池検出状況（西から）
- II区上段池掘削状況（北から）
- II区上段池掘削状況（西から）
- II区上段池土層断面（北西から）

図版22 II区上段第3遺構面池（2）

- II区上段池掘削状況・溝検出状況（西から）
- II区上段池西部石組（西から）
- II区上段池石組（北から）
- II区上段池石組（北東から）
- II区上段池遺物出土状況（東から）

図版23 II区上段第3遺構面・第4遺構面北東部

- II区上段北東部遺構検出状況（西から）
- II区上段北東部SD11上層掘削状況（西から）
- II区上段北東部SD11下層掘削状況（西から）
- II区上段北東部SD11下層掘削状況（南から）
- II区上段北東部周濠2掘削状況（西から）
- II区上段北東部周濠2完掘状況（西から）
- II区上段北東部土層（北から）

図版24 II区上段第3遺構面完掘状況

- II区上段第3遺構面完掘状況（東から）
- II区上段地山検出状況（東から）
- II区上段西壁土層（東から）
- II区上段第3遺構面完掘状況（西から）
- II区上段東壁土層（西から）

図版25 II区下段第1遺構面（1）

- II区下段・下段の段差（南西から）
- II区下段第1遺構面検出状況（西から）
- II区下段第1遺構面掘削状況（西から）

Ⅱ区下段第1遺構面検出状況(東から)
 Ⅱ区下段第1遺構面掘削状況(東から)
 図版26 Ⅱ区下段第1遺構面(2)
 Ⅱ区下段SD13掘削状況(東から)
 Ⅱ区下段SD13掘削状況(西から)
 Ⅱ区下段遺物・焼土検出状況(南から)
 Ⅱ区下段溝土層断面(西から)
 Ⅱ区下段ピット群(西部)検出状況(南から)
 Ⅱ区下段ピット群(東部)検出状況(南から)
 Ⅱ区下段ピット群完掘状況(南から)
 図版27 Ⅱ区下段第1遺構面(3)
 Ⅱ区下段溝・滝掘削状況(南から)
 Ⅱ区下段滝掘削状況(南から)
 Ⅱ区下段SD12の閉塞部分掘削状況(南から)
 Ⅱ区下段溝・滝完掘状況(南から)
 図版28 Ⅱ区下段第1遺構面(4)
 Ⅱ区下段溝・滝・井戸完掘状況(南から)
 Ⅱ区下段完掘状況(東から)
 Ⅱ区下段完掘状況(西から)
 Ⅱ区下段井戸肩遺物出土状況(東から)
 Ⅱ区下段東壁土層(西から)
 Ⅱ区下段東壁土層(下部)(西から)
 図版29 Ⅱ区完掘状況
 Ⅱ区完掘状況(全景)(南東から)
 Ⅱ区完掘状況(全景)(東から)
 Ⅱ区完掘状況(全景)(西から)
 Ⅱ区完掘状況(全景)(南から)
 図版30 Ⅲ区全景・周濠3(1)
 Ⅲ区全景(東から)
 Ⅲ区西部周濠3残存状況(西から)
 Ⅲ区表土除去状況(南西から)
 Ⅲ区周濠3検出状況(東から)
 図版31 Ⅲ区周濠3(2)
 Ⅲ区周濠3検出状況(南から)
 Ⅲ区周濠3掘削状況(南から)
 Ⅲ区周濠3西畦除去状況(南から)
 Ⅲ区周濠3完掘状況(南から)
 図版32 Ⅲ区周濠3(3)
 Ⅲ区周濠3検出状況(西から)
 Ⅲ区周濠3掘削状況(西から)
 Ⅲ区周濠3完掘状況(西から)
 図版33 Ⅲ区周濠3(4)
 Ⅲ区周濠3検出状況(東から)
 Ⅲ区周濠3掘削状況(東から)
 Ⅲ区周濠3・堀掘削状況(東から)

図版34 Ⅲ区周濠3(5)
 Ⅲ区西畦東壁土層断面(東から)
 Ⅲ区周濠3西部掘削状況(南から)
 周濠3西部から中央部掘削状況(南東から)
 Ⅲ区周濠3西部遺物出土状況(南から)
 Ⅲ区周濠3西部遺物出土状況(東から)
 図版35 Ⅲ区周濠3(6)
 Ⅲ区周濠3東部検出状況(南から)
 Ⅲ区周濠3東部掘削状況(南から)
 Ⅲ区周濠3東部検出状況(西から)
 Ⅲ区周濠3東部遺物出土状況(北から)
 Ⅲ区SK08掘削状況(上部)(南から)
 Ⅲ区SK08掘削状況(下部)(南から)
 図版36 Ⅲ区周濠(7)
 Ⅲ区周濠全景(南東から)
 Ⅲ区周濠全景(北西から)
 Ⅲ区周濠全景(西から)
 図版37 Ⅲ区堀(1)
 Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況(南東から)
 Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況(南から)
 Ⅲ区周濠3と堀の完掘状況(南から)
 図版38 Ⅲ区堀(2)
 Ⅲ区周濠3と堀の切り合い関係(東から)
 Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況(東から)
 Ⅲ区堀の床面遺構検出状況(東から)
 Ⅲ区堀の完掘状況(東から)
 Ⅲ区堀の床面遺構検出状況(西部)(東から)
 Ⅲ区堀の完掘状況(西部)(東から)
 Ⅲ区中央畦東壁における堀の土層断面(東から)
 Ⅲ区中央畦東壁におけるSD09の土層断面(東から)
 Ⅲ区SP15上部の遺物出土状況(東から)
 図版39 Ⅲ区堀(3)
 Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況(北から)
 Ⅲ区SK14上部の遺物出土状況(西から)
 Ⅲ区堀の床面遺構検出状況(北から)
 Ⅲ区SK15西部の遺物出土状況(北から)
 Ⅲ区堀の床面遺構検出状況(西部)(北から)
 Ⅲ区堀の完掘状況(西部)(北から)
 Ⅲ区SK15掘削状況(北西から)
 図版40 Ⅲ区土層
 Ⅲ区中央畦西壁(南西から)
 Ⅲ区中央畦西壁北部(西から)
 Ⅲ区中央畦西壁南部(西から)
 Ⅲ区東畦西壁北部(南西から)

- Ⅲ区東畦西壁南部（西から）
 Ⅲ区断割トレンチ（西から）
 図版41 Ⅳ区（1）
 Ⅳ区表土除去状況（全景）（南東から）
 Ⅳ区堀検出状況（南から）
 Ⅳ区堀検出状況（北から）
 Ⅳ区土橋検出状況（北から）
 図版42 Ⅳ区（2）
 Ⅳ区堀掘削状況（東から）
 Ⅳ区西壁における堀土層（東から）
 Ⅳ区堀断割トレンチ土層（東から）
 Ⅳ区堀断割トレンチ土層（北東から）
 Ⅳ区堀掘削状況（北から）
 Ⅳ区堀掘削状況（南から）
 図版43 Ⅳ区（3）
 Ⅳ区土橋断割状況（南から）
 Ⅳ区土橋西部ピット（南から）
 Ⅳ区土橋東部ピット（南から）
 Ⅳ区土橋東西断割トレンチ（東から）
 Ⅳ区土橋断割トレンチ北部土層（西から）
 Ⅳ区以南深掘トレンチ北壁土層（南から）

- 図版44 Ⅰ区出土遺物（1）
 Ⅰ区 SK02、SX01・02出土遺物
 Ⅰ区 SX03出土土師質土器・瓦質土器
 Ⅰ区 SX03出土陶器
 Ⅰ区 SX03出土土師質土塊
 Ⅰ区 SX03出土土瓦当
 Ⅰ区 SX03出土土瓦

- 図版45 Ⅰ区出土遺物（2）
 Ⅰ区 SK02、SX01・04・05・06出土土師質土器
 Ⅰ区 SX04・05出土土師質土器・瓦質土器
 Ⅰ区 SK02、SX04・05・06出土陶器・磁器
 Ⅰ区 SX04出土備前焼摺鉢
 Ⅰ区 SX04出土土瓦当
 Ⅰ区 SX04出土土瓦・石製品・緑色片岩
 Ⅰ区 SX04出土石臼

- 図版46 Ⅰ区出土遺物（3）
 Ⅰ区周濠1出土弥生土器・土師器（1）
 Ⅰ区周濠1出土弥生土器・土師器（2）
 Ⅰ区周濠1出土須恵器杯蓋・杯身
 Ⅰ区周濠1出土須恵器杯蓋
 Ⅰ区周濠1出土須恵器杯身

- 図版47 Ⅰ区出土遺物（4）
 Ⅰ区周濠1出土須恵器
 Ⅰ区周濠1出土埴輪（1）

- Ⅰ区周濠1出土埴輪（2）
 Ⅰ区周濠1出土須恵器壺
 Ⅰ区周濠1出土須恵器高杯
 図版48 Ⅰ区出土遺物（5）
 Ⅰ区周濠1出土土鍾
 Ⅰ区包含層出土遺物（1）
 Ⅰ区包含層出土遺物（2）
 Ⅰ区 SX05出土石製品

- 図版49 Ⅱ区出土遺物（1）
 Ⅱ区池出土遺物（1）
 Ⅱ区池出土瓦質茶釜
 Ⅱ区 SD13出土土師質小皿
 Ⅱ区池出土遺物（2）
 Ⅱ区中世遺構出土土師質土器
 Ⅱ区中世遺構出土羽釜（1）
 図版50 Ⅱ区出土遺物（2）
 Ⅱ区中世遺構出土羽釜（2）
 Ⅱ区中世遺構出土瓦質土器・陶器
 Ⅱ区中世遺構出土土師質土器・瓦
 Ⅱ区 SD13出土刀子
 Ⅱ区周濠2出土弥生土器・土師器・須恵器

- 図版51 Ⅱ区出土遺物（3）
 Ⅱ区周濠2出土埴輪
 Ⅱ区周濠2出土中世遺物
 Ⅱ区包含層出土遺物

- 図版52 Ⅲ区出土遺物（1）
 Ⅲ区堀出土土師質土器
 Ⅲ区堀出土土師質小皿
 Ⅲ区堀出土土師質土塊
 Ⅲ区堀出土瓦質土器・陶器・瓦
 Ⅲ区周濠3出土円筒埴輪

- 図版53 Ⅲ区出土遺物（2）
 Ⅲ区周濠3出土埴輪（1）
 Ⅲ区周濠3出土埴輪（2）
 Ⅲ区周濠3出土朝顔形埴輪

- 図版54 Ⅲ・Ⅳ区出土遺物
 Ⅲ区周濠3出土形象埴輪
 Ⅲ区・Ⅳ区出土弥生土器・土師器・須恵器
 Ⅲ区 SK08出土弥生土器
 Ⅲ区周濠3出土イイダコ壺
 Ⅳ区堀出土陶器・Ⅳ区土橋出土石材

報告書抄録

ふりがな	さんじょうおかやまいせきはくつちょうさほうこくしょ (だい19ちてん)							
書名	三条岡山遺跡発掘調査報告書 (第19地点)							
副書名	片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群							
巻次								
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第82集							
編著者名	(編集・執筆) 森岡秀人・白谷朋世							
編集機関	芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課 (文化財担当)							
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL.0797-38-2115 FAX.0797-38-2089							
発行年月日	2009年(平成21年)9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	調査番号						
さんじょうおかやまいせき 三条岡山遺跡	兵庫県 芦屋市 三條町 240番地3・ 240番地7	28206	SO19	34度 73分 41秒	135度 29分 32秒	2008.4.7. 2008.7.2.	812.34㎡	宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
三条岡山遺跡	集落跡 古墳 生産遺跡	弥生時代・ 古墳時代・ 中世	溝・古墳周濠・ 堀・土坑・池・ 滝・ピット・廃 棄土坑	弥生土器・ 土師器・須 恵器・土師 質土器・瓦 質土器・陶 器・磁器・ 瓦・埴輪・ 鉄製品	弥生時代後期後半の準高地性集落 の存在を追認できる土坑を確認。 円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪 を伴う古墳時代中期の古墳周濠3 条を確認。土師器・須恵器も出土。 中世の居館に伴う平坦面を確認。 遺構としては、堀や庭園(池・滝・ 溝・ピット群)、廃棄土坑などを検 出。土師質土器・瓦質土器・陶器・磁 器・瓦等を多数出土した中に、茶釜 もみられる。			
要約	報告の調査地点は、本遺跡発見の端緒となった第1地点と同一であり、当時は上下二段の堆積状の開発が加わっていた。発掘調査の結果、当該地は、中世末期以降、耕作地となったが、それ以前には、15世紀後半に中世の居館が営まれており、堀や池・滝・溝・ピット群を伴う庭園、谷地形を利用した廃棄遺構などが検出された。これらの遺構に伴う遺物は多様であり、土師質土器・瓦質土器(甕・羽釜・茶釜)・陶器(備前焼小皿・備前焼指鉢・備前焼壺・備前焼甕・瀬戸美濃焼茶碗)・磁器(中国製白磁・中国製青磁)・瓦・鉄製品(刀子)等が確認された。中世遺構に先立つ遺構として、古墳時代中期の古墳周濠3条が検出された。これらの周濠の形態から、いずれの古墳も直径10m程度の群集する円墳と推定される。また、主体部は遺存していなかったが、横穴式石室墳ではなく、木棺直葬墳と推定された。古墳周濠からは、土師器・須恵器(杯・高杯・甕・甕など)・円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪(家形・馬形など)が出土しているほか、土師・製埴土器・イイダゴ壺といった漁撈具も出土している。さらに、周濠に切られるようにして弥生時代後期後半の遺構も検出されており、当該地に準高地性集落の存在を追認する形となった。そのほか、遺構に伴うものではないが、奈良時代の土師器・須恵器、中世前期の土師器・須恵器も少量出土している。これらの成果は、既に第1・2・11地点の調査内容から示唆されるものであったが、本調査地点の発掘調査により、ようやくその内実に迫り得るものとなった。							

第1章 序 章

第1節 本発掘調査に至る経緯と経過

今回、調査を実施した地点は、兵庫県芦屋市三条町240番3・240番7に所在し、敷地面積は1,499.78㎡である。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である三条岡山遺跡（平成16年3月刊行、兵庫県遺跡地図番号070031）の範囲に位置し、当該地南端の旧家屋に伴う石垣および前面道路の北半部分は、この遺跡の発見の端緒となった三条岡山遺跡第1地点に相当する。第1地点は、昭和35年（1960）に当該地の前面道路の拡幅と石垣設置工事を行った際、須恵器や埴輪片、中世備前焼などの古墳時代から中世にかけての遺物が大量に出土したことを契機として、層序ごとに遺物が回収された地点である（第2章参照）。

当該地は、平成18年度に共同住宅建設の計画が提出された際、遺構や遺物包含層の有無およびその埋没深度を確認するために、本遺跡の第17地点として、同年8月17日～9月18日に確認調査を実施した地点である。その段階では、鉄筋コンクリート造2階建（一部地下1階）の既存建物があり、確認調査はこの建物を残したまま、庭園や駐車場部分のみを対象とした。確認調査後に、既存建物は解体されたが、解体工事時の立会によって、地下室部分を中心に、基礎工事によって広範に攪乱を被っていることが明らかになった。その後、地権者の変更に伴い開発計画は変更となり、新光商事有限公司（以下、「事業者」と記す。）から、文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出書（造成計画）が平成19年12月10日付で芦屋市教育委員会に提出された。本市教育委員会は、受理した届出書をもとに宅地造成工事計画の内容を再審査し、第17地点の確認調査によって得たデータとの照合を行い、遺物包含層や遺構面が損壊を被ると判断した。

そこで、宅地ならびに私道の造成によって掘削を被る範囲の内、既存建物によって大きく攪乱を被っている部分と、隣接地に接する崖面部分を除外して発掘調査を実施する方針とした。この結果、発掘調査の対象面積は、812.34㎡である。

以上の経過を経て、本発掘調査は、本市生涯学習課文化財担当主査森岡秀人（学芸員）と同課嘱託白谷朋世（学芸員）を調査担当者とし、随時同課嘱託坂田典彦（学芸員）に現場調査協力を得て、平成20年4月7日から7月2日まで、実働51日で実施した。発掘作業は事業者が株式会社弓矢組に委託し、発掘調査や整理作業、報告書印刷等に係る費用は事業者が全額負担し、文化財保護にご協力いただいた。

第2節 調査組織

本発掘調査および資料整理・報告書作成作業、事務は、芦屋市教育委員会が主体となり、以下の体制で、平成20年4月1日から、平成21年9月30日まで実施した。

【平成20年度】 教育長藤原周三、社会教育部長橋本達広、生涯学習課長津村直行、同課主査細井良幸、同課（文化財担当）主査森岡秀人（学芸員）、同課主事春木和子、同課学芸員竹村忠洋、同課嘱託白谷朋世（学芸員）、坂田典彦（学芸員）、同課臨時の任用職員木本真味・田中智美、同課整理補助員桑原育世・近藤奈保子・須田佑子

【平成21年度】 教育長藤原周三、社会教育部長橋本達広、生涯学習課長佐藤細井良幸、同課（文化財担当）主査森岡秀人（学芸員）、同課主事春木和子、同課学芸員竹村忠洋、同課嘱託白谷朋世（学芸員）、坂田典彦（学芸員）、同課臨時の任用職員田中智美・力武麻喜、整理補助員桑原育世・須田佑子・山本麻理



第1図 報告書作成のための室内作業風景

第3節 調査の経過

本発掘調査は平成20年4月7日から7月2日まで実施した。調査初日は雨天であったため、開始立会と器材搬入のみを行い、実際に作業に着手したのは、翌4月8日からである。

本発掘調査は、Ⅰ区から着手した。この地区の北部は、厚さ3mを超える盛土があったため、盛土や旧表土は重機を用いて掘削し、適宜排土を場外搬出しながら調査を行った。また、調査区南端の石垣は、調査の進行状況に併せて除去した。Ⅰ区では遺構面や検出遺構が多く、5月22日まで調査した。Ⅰ区の第3遺構面の様相が概ね判明した5月9日には、Ⅰ区に併行してⅢ区の調査も開始した。Ⅲ区は、5月23日から東部を南に拡幅したため、6月9日までかかった。なお、5月15日には、Ⅳ区の調査範囲を決める参考とすべく、Ⅳ区以南深掘トレンチを設定し、現地表面から3.3mまで重機掘削を行って土層を観察した。また、Ⅰ区とⅢ区の両調査区で古墳周濠が確認されたことを受けて、5月22日に、文化財保護審議会村川行弘委員（故人）と藤原周三教育長の現地視察があった（第3図。裏表紙参照）。Ⅲ区やⅣ区以南深掘トレンチのデータを参考にして、6月6日にⅣ区を設定し、6月16日までこの地区の調査を行った。加えて、6月11日からは、Ⅳ区に併行してⅡ区の調査を開始し、7月2日まで調査を行った。Ⅳ区の調査中の6月24日～6月26日には、Ⅴ区の調査も併行で行った。

5月26日～6月13日には、芦屋市内の中学2年生（潮見中学・精道中学・山手中学）が「トライやるウィーク」活動で調査に参加した（第5図。裏表紙参照）。彼らは、測量や図面作成、遺物の取り上げ、遺物の篩選別などの作業に携わり、とくに篩選別によって、埋土の性格や遺構の年代を決定する資料を得ることが出来た。

発掘調査の後には、引き続き、芦屋市役所三条整理事務所において、整理作業ならびに報告書作成作業を行った。この間、神戸新聞社の取材を受け、7月25日の朝刊（神戸新聞阪神版）に調査成果の概略が掲載された。



第2図 Ⅰ区調査風景



第3図 文化財保護審議会村川行弘委員の視察



第4図 Ⅱ区調査風景



第5図 Ⅲ区調査風景

第2章 三条岡山遺跡をめぐる古環境と既往の調査

第1節 三条岡山遺跡周辺の地理・地質と歴史・伝承

兵庫県芦屋市は、人口93,500人程の県下では最も小さい市であるが、住環境の良さから原始・古代以来多くの人々がこの地に往来、定着し、温暖で恵まれた自然環境の下、歴史と人間活動の軌跡や証左を残している。背後に迫る雄麗な六甲連山は、931.25mを最高峰とする典型的な断層山地であり、断層崖を境として急な階段状の地形を形成して大阪湾に切迫する。芦屋市の市街地は、その前面の複合扇状地や沖積平野に限らず展開しており、芦屋川をはじめ天井川がよく発達する地形と不可分な関係にある。明治初年、日本鉄道史上第1号の単線トンネルが神戸市の石屋川の川底を走ったが、明治6年には芦屋川にも川下を貫くトンネルが開通し、その有様は識者を驚かせた。

六甲山頂は海岸からおよそ7kmの至近地にあり、海岸平野は2kmと幅狭く、急勾配が各所にあつて前山は居住地には適さないが、弥生時代の高地性集落跡は、会下山遺跡・城山遺跡などがこの六甲の前脈に林立しており、紀元前2世紀頃より高所への移住を果たした生活痕跡が点々とみられる。本遺跡の周辺では山芦屋遺跡などに市内最古の先住者の足跡が認められ、この遺跡からは弥生文化期の堅穴住居跡も発掘されている。また、寺田遺跡で稲作開始期の有望な集落が営まれ、同時期の水田跡が前田遺跡でみつまっている。古墳時代に入ると、月若遺跡や寺田遺跡が栄えるとともに、山麓部一帯には古墳の群集がみられるようになる。横穴式石室をもつ城山古墳群・三条古墳群はその代表的なものであり、大陸からの渡来者を数多く含む人々の墓域が本遺跡の東方に形成されており、当遺跡で確認されつつある古墳群との異同が論議されている。

飛鳥・奈良時代には、芦屋川の右岸扇状地上一帯の高燥な土地に古代の郡域中枢と目される一連の公的施設が営まれており、確説に至らぬものの初期兎原郡家の所在が推定され、関連して白鳳期創建の芦屋廃寺、通過する古代山陽道の交通要所としての芦屋駅などが立地した所として知られ、最近の調査ではそれらの実態に迫る物証が矢継ぎ早に得られ、叢説が促されている。畿内の西端となるこの地域には、法隆寺式軒瓦の一群が地方化デフォルメを抑制した形態で用されており、寺域周辺では、瓢箪に成長した郡領層の往来と指使を示唆する墨書土器「大領」「少領」の出土が目される。

神戸市と市境を接するこの丘陵には江戸時代から続く共葬の墓が存在し、明治初期の『三条村史』には、「本村の西方字岡山にあり反別二畝六歩たり」とその所在が確認できる。天保8年(1837)の『三条村絵図』には東西の墓がみえるが、細川道草は『芦屋郷土誌』において、姓名の下に何々兵衛の付く「兵墓」と考え、西の墓とみなしている。付近に集められた石造物には、その関連あるものが含まれていよう(写真図版表紙)。戦国期の居館と不可分の墓地の後継に関して一考する必要があるだろう。

三条岡山遺跡近辺の近代史で見逃せない事件も存在する。上記した墓地とも関連して、明治元年(1868)に神戸事件が起こり、その責任を問われて切腹するに至った岡山藩の藩首三郎正信の遺骨がこの三条岡山の共葬墓地に分骨、埋葬されたという。神戸事件とは、言うまでもなく、幕末の摂海防備のため四国大洲藩と交代すべく打出陣屋に向った岡山藩の藩兵が、途上神戸三宮神社の南方、旧西国街道において隊列を横切る外国人と接触、衝突した出来事であり、この墓も歴史的な因果を感じさせる。小字「岡山」の地名がいつまで通り得るかは定かでないが、岡山藩との関係を彷彿とさせる点にも留意し、縦逸ながら遺跡名の字釈や来歴を伝えておきたい。

第2節 既往調査の概要

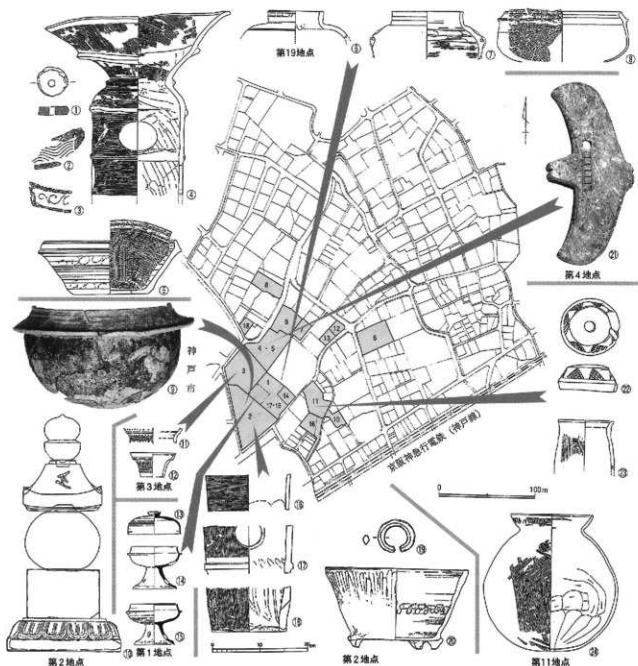
本遺跡は昭和35年1月に発見された。阪口二郎氏の宅地で行われた造園工事に伴うものであったため、応急の調査が村川行弘・石野博信・伊井孝雄・岩本昌三等によって実施された。遺物回収に近い調査であったが、当時、市域最古の須恵器や陶棺片・埴輪片・弥生土器片の出土が注意を引き、所在地から「三条240番地遺跡」と称されるようになった〔村川・藤岡1967〕。今では該当地を第1地点と呼んでいるが、

今回発掘調査を実施した第19地点は、まさにその一面を含む因縁深い事業地であった。その後、採取遺物の再整理を通して、大字・小字の旧地名を尊重し、昭和50年代初めには「三条岡山遺跡」と改称し、弥生時代からの意義を記した〔村川・森岡1976〕。

その後、第1地点の西側山林で甲南女子大学の学生寮の建設計画が持ち上がり、昭和52年度に第2地点として緊急発掘調査を実施した。この調査はトレンチ調査に過ぎなかったが、第1地点の遺物相に見合う各時代の遺物が多数出土し、遺跡の広がりが局所的なものでないことが判明した。本遺跡が長期間

第1表 三条岡山遺跡既往調査一覧表

地点名	調査地	種別	調査原因	調査担当者	調査年月日	調査所見	文献
1地点	三条町240番地 (45m)	緊急立会	民家遺構工事 (土取り)	村川行弘・石野博信・ 井伊孝雄・若林昌三	1960.1.14 ～1.25	弥生土器(V)・古式煎茶器・土師器・地輪・陶片・鉄器片を土取工事中に採集。	「芦屋郷土資料室日誌」, 村川・森岡1967, 村川・森岡1976
2地点	三条町240番地1 (2,666m)	発掘調査	大学学生寮建設 (鉄筋)	村川行弘・勇 正広・ 藤原 弘・森岡秀人	1977.4.20 ～5.30	弥生時代の弥生土器、後期古墳の残骸、門 部礎石片、中世後出包含層を露出。特殊遺 物として金環1点。	森岡1979a・1979b, 森岡編1979、森岡・ 村川1996
3地点	三条町240番地5 (1,990m)	発掘調査	共同住宅建設 (鉄筋)	村川行弘・森岡秀人	1981.5.15 ～7.12	各所に人工的造成面を露出。弥生時代中期 後半以降の弥生土器を露出。出土遺物は 5～6重層の屈折層が中心。	村川・森岡1981、森 岡1984、森岡編2005
近接地	三条町225番地4・ 223番地2～4	工事立会	専用住宅建設 (木造)	森岡秀人	1983.7.14	大阪府府と段丘段層との関係を確認。包含 層未検出。	歴史文化財調査報告 (昭和58年度)
4地点	三条町238番地3・ 4	発掘調査	共同住宅建設 (鉄筋)	村川行弘・村川義典	1983.7.15 ～8.31	飛鳥時代の祭祀遺構(舟形土坑)。子持 勾玉・鉄刀・土師器・須恵器出土。	村川・村川1985、 森岡1988a、森岡・村 川1996
5地点	三条町238番地1・ 3・4 (1,580m)	発掘調査	共同住宅建設 (鉄筋)	森岡秀人	1985.8.1 ～8.7	飛鳥時代～奈良時代の包含層を確認。円筒 埴輪片なども出土。平屋面の存在を確認。 第4地点の補充。	森岡1988b
6地点	三条町190番地 (1,270m)	試験調査	専用住宅建設 (木造)	森岡秀人	1985.8.10 ・8.23	トレンチ1本所定。遺構未検出。遺構な 包含層を確認するも、西端部にとどまる。	歴史文化財調査報告 (昭和60年度)
近接地	三条町226番地1 (371m)	工事立会	専用住宅建設 (木造)	森岡秀人	1988.3.26	供養塚の急傾斜状を確認。包含層なし。	歴史文化財調査報告 (昭和62年度)
近接地	三条町252番地・ 252番地3 (781m)	工事立会	専用住宅建設 (木造)	森岡秀人	1989.5.25	南陽神社。稲荷塚と山王神社。包含層は ない。	歴史文化財調査報告 (平成元年度)
7地点	三条町233番地 (262m)	試験調査 ・工事立会	専用住宅建設 (木造)	森岡秀人・柳田寿寿	1989.9.25 ・10.2	東照宮。稀薄な中世包含層を確認。東西 に走行する段丘の遺構を確認。	歴史文化財調査報告 (平成元年度)
8地点	三条町222番地1 (650m)	試験調査	共同住宅建設 (鉄筋)	森岡秀人	1989.11.29	北照宮。供養塚の急傾斜地形を確認。包 含層未検出。	歴史文化財調査報告 (平成元年度)
9地点	三条町234番地1・ 2 (1,008m)	工事立会	専用住宅建設 (木造)	竹村忠洋	1996.4.11	斜面遺構を確認。包含層なし。	歴史文化財調査報告 (平成8年度)
10地点	三条町251番地1 (980m)	試験調査 ・工事立会	専用住宅建設 (鉄筋)	森岡秀人・水海アツ子・ 竹村忠洋	1997.1.23 ・3.10	渚地性遺構を確認。包含層なし。	歴史文化財調査報告 (平成9年度)
11地点	三条町243番地 (1,321m)	試験調査	専用住宅建設 (鉄筋)	森岡秀人・竹村忠洋	1997.2.27	トレンチ3ヶ所所定。弥生時代～近世の包含 層を確認。本調査が必要ことが判明する。	森岡・竹村1998 (調査終了報告)
11地点	三条町243番地 (1,321m)	発掘調査	共同住宅建設 (鉄筋)	渡辺 昇	1997.6.17 ～8.14	弥生時代～近世の複合的な遺構。遺物を後 出。弥生土器、銅器・鉄器・須恵器・須 恵器・鉄器。石炭貯蔵庫などが出土。	渡辺編1998
12地点	三条町236番地 (232m)	試験調査	専用住宅建設 (鉄筋)	竹村忠洋・山内秀子	2000.3.16 ・5.18	トレンチ2ヶ所所定。包含層1層存在。遺 構面1面を確認(カルテ詳細作成)。	歴史文化財調査報告 (平成12年度)
12地点	三条町236番地 (232m)	工事立会	専用住宅建設 (鉄筋)	竹村忠洋	2000.6.8	グレンジ留工事立会。稀薄な遺物包含 層を確認。	歴史文化財調査報告 (平成12年度)
13地点	三条町236番地1 (261m)	試験調査 ・工事立会	専用住宅建設 (木造)	竹村忠洋	2002.2.26 ・5.22	トレンチ1ヶ所所定。包含層や遺構はない。土 中に弥生土器や中世遺物が露出包含される。	歴史文化財調査報告 (平成14年度)
14地点	三条町240番地6 (316m)	確認調査	専用住宅建設 (木造)	竹村忠洋	2004.12.7	トレンチ3ヶ所所定。遺構面はないが、稀 薄な包含層を確認。	歴史文化財調査報告 (平成16年度)
15地点	三条町242番地3・ 4 (539m)	確認調査	専用住宅建設 (木造)	竹村忠洋	2005.6.2	トレンチ2ヶ所所定。現地表下76cmまで遺 土を確認。遺構・遺物なし。	歴史文化財調査報告 (平成17年度)
17地点	三条町240番地2・ 3・7 (1,500m)	確認調査	宅地造成	竹村忠洋・白谷明世	2006.8.17 ～9.19	トレンチ11ヶ所所定。弥生時代～中世の弥生 文化財をかなり確認(本調査第2年第3期)。	竹村・白谷2006 (終了報告書)
18地点	三条町223番地10 (162m)	確認調査	専用住宅建設 (木造)	竹村忠洋	2006.10.11	トレンチ1ヶ所所定。遺構・遺物は確認さ れなかった。	歴史文化財調査報告 (平成18年度)
19地点	三条町240番地3・ 7 (1,500m)	本発掘調査	宅地造成	森岡秀人・白谷明世	2008.4.7 ～7.2	本書に収録。	森岡・白谷2009 (本書)



※主要遺物は、①～③が〔本件、森岡・白谷2005〕、④～⑧が〔森岡編1979〕、⑨～⑫が〔森岡編2005〕、⑬～⑮が〔森・森岡1976〕、⑯が〔村川・村川1988、森岡・和田編1991〕、⑰～⑳が〔近岡編1998〕からの引用で、㉑～㉓は写真データである。これらの遺物実測図の縮小率は、原則として1/8であるが、㉔は1/4、㉕は1/16、㉖は1/3で示している。なお、㉗については、鎌倉時代後期に比定できる芦屋市内蔵吉の石造物であるので、実測図を合併し、五等分として、完存する形に改定した。

第6図 三桑岡山遺跡の既往調査地点分布図（1/4000）および主要遺物

の複合遺跡であって、弥生時代後期の集落跡、中期古墳や後期古墳、中世の墳墓や居館跡が近接するか、もしくは隣接することが推測され、本格的な発掘調査を経ることによって、さらに周辺に遺跡が及ぶ事実が力説された〔森岡編1979〕。限られた資料ではあったが、報告書では当地域で初めて中世遺物の組成研究、年代研究なども試みられた。また、神戸市域にも遺跡が延伸することが判明し、埋蔵文化財包蔵地としての取り扱いを遺跡分布地図の上で行うようになった〔芦屋市教育委員会1980〕。

昭和56年6～7月には、共同住宅建設に伴い、第3地点が発掘調査された。報告書の刊行は諸般の事情で随分遅れたが、本遺跡の様相の追認と北限を考える所見が得られるとともに、出土埴輪の属性分析から、古墳の性格が大規模首長墳と見るより、円筒埴輪を樹立する初期群衆墳として理解する方向性を採るのが整合的と指摘された〔森岡編2005〕。しかし、具体的な遺構にはほとんど恵まれず、地点によ

り削平など後世の地形改変が著しいことが明らかとなった。

昭和58年度に実施された第4地点では、これまでとかなり異なる奇抜な調査成果がもたらされた。第8トレンチを中心とする飛鳥時代前後の祭祀遺構に遭遇し、絶代の思いもよらぬ特殊な施設に驚きを禁じ得なかった。舟形状土坑に伴った遺物は、最新形式の子持勾玉・直刀・銀装太刀柄頭・佩用金具・鉄鍔・須恵器甕・高杯・平瓶・杯蓋・杯身・土師器壺・甕・鈴形土製品などで、きわめて特異なものが多数含まれていた〔村川¹⁹⁸⁶・村川¹⁹⁸⁶、森岡・村川¹⁹⁹⁶〕。大阪湾を望む絶好の眺望地に選地しており、鳥居風に存在する両端の2本の柱穴の存在も含めて、神マツリと豪壮な供献具類としての色濃い性格が窺えよう〔安井¹⁹⁸⁵〕。なお、第5地点の部分調査はこれを補足して行ったものである〔森岡^{1988b}〕。

以後、第6～10地点にいたるまで、8ヶ所で工事の立会や確認調査が実施されたが、この間、本格的な発掘調査は第11地点に至るまでなかった。この期間に関する調査概況は第1表に委ねたい。

平成7年1月17日、阪神・淡路大震災が勃発した。その後、市内では数多くの復興住宅が計画され、周知の埋蔵文化財包蔵地においては全国支援・兵庫県支援を得て早期に復興調査が実施された。当該遺跡の範囲では、第11地点が対象となり、平成9年6～8月に発掘調査が行われ、久し振りに実りある成果がもたらされた。弥生時代後期の堅穴住居跡、古墳時代では堅穴住居跡・掘立柱建物跡・落ち込み・土坑・溝・櫓・木棺直葬墓や滑石製紡錘車、奈良時代の掘立柱建物跡・製塩炉・製塩土器などが出土し、本遺跡南縁部での様相もかなり複合性が高いことが証された〔波辺¹⁹⁹⁸〕。そして、以後の調査で注目されたのが第17地点の確認調査結果であり、さらに、本書に収められた本発掘調査の成果が加わったのである。

如上のごとく、三条岡山遺跡は発見されてからもうすぐ半世紀を迎える。それでもなお不分明な点が多々みられる遺跡であることは日省すべき点と考えるが、複合度の高い遺構・遺物を保有するのみならず、それぞれの階梯において注目すべき知見が多数得られており（第6図）、今後もさらに驚愕するような出土文化財に恵まれることが予想されよう。

第3節 三条岡山遺跡第17地点の調査概要

調査地は、平成18年度に共同住宅建設の計画が一度提出されたため、遺構や遺物包含層の有無とその埋没深度等の確認調査を行っている（三条岡山遺跡第17地点）。この調査は、本市生涯学習課文化財担当学芸員竹村忠洋と同課嘱託白谷朋世（学芸員）が担当し、平成18年8月17日～9月18日（実働21日）に実施した。そして、地形実測図、トレンチ配置図、土層断面図、遺構平面図や遺物出土状況平面図を作成した。その後、事業者が改まり、開発計画も変更になったことから、本発掘調査は三条岡山遺跡第19地点として実施した。本調査では、包含層や遺構の内容等は確認調査のデータを参考にしたので、ここに、その概略を記す。

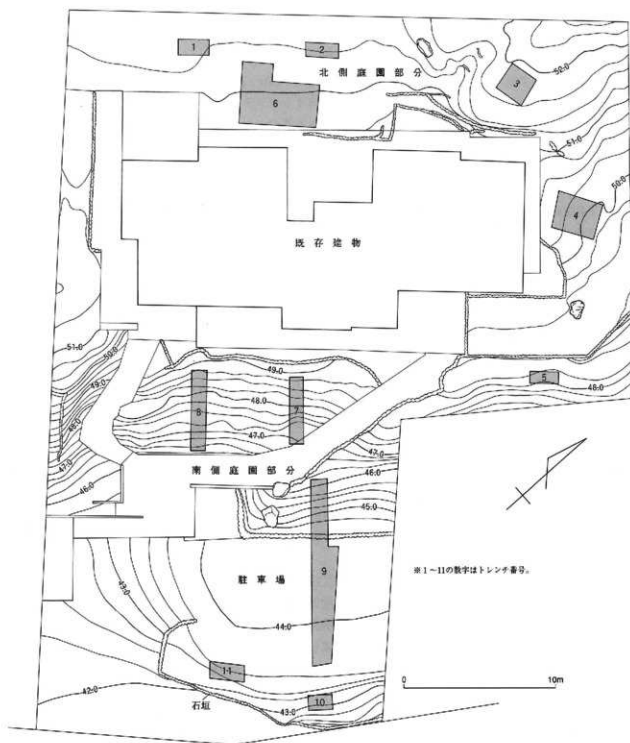
確認調査段階では、既存建物が現存していたため、この建物を避けてトレンチを合計11基設定し、設定順に番号を付けた（第7～9図、図版2～4）。第1～4・6トレンチは既存建物の北側庭園部分に、



第7図 第6トレンチの調査風景



第8図 第9トレンチの調査風景



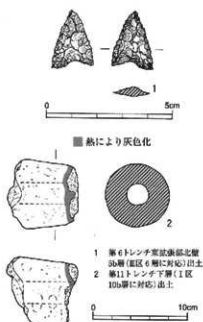
第9図 調査地地形図および確認調査トレンチ配置図 (1/250)

第5・7・8トレンチは既存建物の南側庭園部分に、第9トレンチは南側庭園部分から当該地南部の駐車場に、第10・11トレンチは駐車場以南の斜面部分に設定したもので、重機の進入の可能な第9トレンチのみ重機掘削し、他のトレンチは人力掘削を行った。各トレンチは長方形の平面プランで設定したが、第6トレンチは、当初設定した範囲において埴輪を伴う遺構が検出されたので、この遺構の様相を把握するために南に延長し、さらに東に拡張した結果、「L」字形を呈している。いずれのトレンチにおいても、現表土の下には、既存建物に伴う宅地造成時の整地層（盛土層）があり、多くのトレンチにおいて、盛土層の下に遺物包含層や遺構が検出された。なお、確認調査における総面積は64.0㎡を測る。

北側庭園部分に設定した5基のトレンチ（第1～4・6トレンチ）のうち、西寄りに設けた第1・2トレンチでは、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪や近世以後の瓦を含む遺物包含層があり、現地表下75～80cmにおいて、基盤層を検出した。一方、東寄りに設けた第3・4トレンチでは、整地層の厚さが60～110cmで、その下に、層厚約100cmに及ぶ遺物包含層（古墳時代の土師器・須恵器・埴輪と近世以後の瓦・陶磁器が混在する）を検出したので、基盤層は現地表下210～250cmで検出されることになり、旧地形が北西から南東に下る可能性が考えられた。なお、第4トレンチでは基盤層直上に水成層が確認されたことから、この部分に谷を想定した。ただし、これら4基のトレンチから出土した遺物は少なく、明確な遺構も確認できなかった。一方、第1トレンチと第2トレンチの間に設定した第6トレンチでは、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪とともに弥生土器や中世青磁の混在する遺物包含層（層厚約40cm）があり、さらにその下に、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪を濃密に出土する溝が検出された。この溝は、現地表下約90cmの基盤層上面に掘り込まれたもので、南西―北東方向に走る。その性格を把握すべく第6トレンチを拡幅したところ、溝の平面形は緩やかな弧を描いており、底部の幅は約1.5m、深さ約0.4m、検出長は約5mで、さらに東と西に延びることが明らかになった。この溝は、その平面形・断面形や埴輪片等の出土状態から、古墳の周濠と判断された（図版4）。ただし、周濠の南東側には近世以後の耕地が展開していることが確認されたので、墳丘はこの耕地化の段階で既に削平された可能性が高い。なお、この古墳の墳形・規模については、ひとまず直径10m程度の円墳と推定した。

既存建物の南側庭園部分に設定した3基のトレンチ（第5・7・8トレンチ）のうち、東側隣地に近接する急斜面に設定した第5トレンチは、安全面確保のために深掘しなかったため、盛土が層厚120cm以上であることを確認するに留まった。また、第7・8トレンチにおいては、盛土が層厚約80～240cmと極めて厚いことが確認された。ただし、両トレンチでは、厚い盛土の下に、古墳時代～中世の遺物包含層が遺存しており、とくに第7トレンチでは炭化物や土器細片を含む黒褐色粘性砂質土（第7トレンチ6層）の分布から、何らかの遺構の存在が推定された。さらに、現地表下約300～340cmで検出された基盤層の様相から、北から南に下る旧地形を確認することもできた。

南側庭園部分以南に設定した第9トレンチでは、盛土の厚さが、トレンチの北部で約170cm、中央部～南部で約30cmと様ではなかったが、盛土の下に耕作面や古墳時代～中世の遺物包含層が確認された。また、トレンチ北部の西壁には人頭大程度の礫を伴う中世遺物（瓦質土器・備前焼）の集積遺構が、トレンチ中央部の東壁には土坑が検出された。



第10図 確認調査出土の特殊遺物
(2/3、1/4)

当該地南端に設定した第10・11トレンチでは、中世を主体とする古墳時代～近世の遺物包含層が確認され、基盤層は現地表下約170～220cmで検出された。基盤層上面や旧地表面は現在の地形と同じように南傾している。なお、第11トレンチでは、遊離遺物と考えられるものの、薙羽口（第10図2）が出土しており、近在に金属加工場の存在も推定された。

出土遺物としては、縄文時代の打製石鏃（第10図1）、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪）、古代の土師器、中世の土師質土器・瓦質土器・陶器（備前焼・丹波焼）、磁器（中国青磁）、薙羽口・瓦が確認され、既往調査（第2章第2節）における出土遺物と極めて共通性が高い。

なお、本遺跡で出土の顕著な古墳時代の遺物と中世の遺物については、古墳時代の遺物が、第6トレンチを中心に調査地北西寄りに、中世の遺物が、第7・9トレンチを中心に調査地南東寄りに多い傾向が看取された。遺構については、北側庭園部分に古墳の存在が明らかになった。また、調査地南東寄りに中世遺物が集中していることから、当該期の耕地だけではなく、土坑や建物跡を伴う居住域である可能性が高まった。

第3章 発掘調査の概要

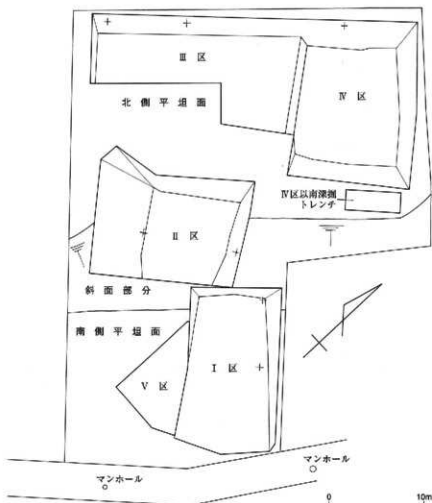
第1節 本発掘調査の方法

当該地の現況は、所有地の形態とその南端道路の方向に合わせて、北西から南東に下る斜面地に切土と盛土を施し、中央に比高差約5mの上下二段の平坦面を造り出した宅地であった。当該地の南端道路際には、高さ1mほどの石垣を積み上げて、道路面より一段高い平坦面（駐車場）を造成し（以下、「南側平坦面」と称する。）、その北側に植栽を施した斜面（以下、「斜面部分」と称する。）を経て、標高50m付近に居宅部平坦面（以下、「北側平坦面」と称する。）が設けられていた。この北側平坦面は北辺に庭があり、この部分は緩斜面になっていた。なお、北側平坦面の中央部西半には、旧家屋の地下室が位置しており、その建設と解体によって、地表面から深さ2m以上の攪乱が生じていた。

調査の契機となった新計画の宅地造成工事では、北側平坦面は現状を生かしつつ水平になるように主に北側を削平して宅地化し、その南寄りから斜面部分にかけては北側の宅地に伴う擁壁や階段、駐車スペースを設けるために、整地面からさらに6m下まで大きく掘削する。また、南側平坦面は、西部に若干の盛土を施して平坦面を造成する一方、東部には前面道路から北側の宅地に至るための進入道路を設けるため、前面道路に近いレベルまで掘り下げるという計画である。

このような現況と開発計画を勘案した結果、発掘調査は、進入道路部分になる南側平坦面東部とそれに続く斜面部分東部から開始し、この部分を「Ⅰ区」と呼称した。Ⅰ区の調査終了後には、斜面部分西部（「Ⅱ区」）、北側平坦面西部（「Ⅲ区」）、北側平坦面東部（「Ⅳ区」）、南側平坦面西部（「Ⅴ区」）に区分けして、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅱ区、Ⅴ区の順に調査を進めた（第11図）。また、北側平坦面南東端には「Ⅳ区以南深掘トレンチ」を設けて、平坦面から斜面部に移る範囲の土層や遺構の有無の確認を行った（図版43）。ちなみに、確認調査時のトレンチでは、第1・2・6トレンチがⅢ区に、第3・4トレンチがⅣ区に、第7・8トレンチがⅡ区に、第9・10・11トレンチがⅠ区に位置する。なお、各調査区の壁面は安全対策として法を付けて掘り下げたが、北側平坦面の攪乱部分と東側隣接地に近い斜面部分は、安全上の理由により発掘調査の対象から除外し、後者は調査後に工事の進捗に併せて立会した。

事業地は、比較的盛土が厚かったことから、表土や



第11図 調査区配置図（1／400）

盛土を重機掘削し、遺物包含層や遺構を工事掘削深度まで人力掘削した。もっとも、掘削深度以上のレベルで地山が検出された部分については、地山検出をもって最終掘削面としている。排土は場内に仮置きし、原則として調査終了後に埋め戻したが、南側平坦面と斜面部分の排土の一部は場外搬出した。

記録は実測図(平面図・土層断面図)を作成するとともに、写真と映像を撮影した。平面図は、事業者が現地に設置した仮座標を基準として、各地区ごとに任意の杭を設け、光波測距器を用いて作成した。写真は、35mmの白黒・カラーポジフィルムとデジタルカメラを用いて撮影した。なお、調査に用いたレベルは、調査地前面道路に本市道路課が設置したマンホール上面基準高(T.P.+40.68m)から水準測量により得た数値を基準高とした。

各調査区は、Ⅰ区が東西9.6~10.6m、南北16.0~17.5mのほぼ長方形で167.95㎡、Ⅱ区が東西15.5~16.5m、南北11.0~13.6mの長方形に近いプランで185.0㎡、Ⅲ区が東西約21.2~22.8m、南北7.0~12.3mのL字形プランで201.9㎡、Ⅳ区が東西11.6~13.0m、南北17.0mの長方形プランで209.1㎡、Ⅳ区以南深掘トレンチが東西6.0m、南北2.0mで12.0㎡、Ⅴ区が既存の石垣に合わせた変則的な形態で、東西7.2m、南北12.0mで48.38㎡であり、総調査面積は812.34㎡となった。ただし、各調査区の壁面に十分な法面を設けたため、遺構検出面の面積は総調査面積の6割ほどである。

第2節 層 序

前節で述べたように、調査区はⅠ~Ⅴの五つの地区に細分したが、このうち、Ⅰ区・Ⅴ区が南側平坦面を中心に展開する。また、Ⅱ区は斜面部分西部に、Ⅲ区・Ⅳ区は北側平坦面に広がっている。各地区の土層は、概ね、上から現表土、旧家屋建設に伴う盛土、旧家屋建設前の旧表土、遺物包含層、無遺物層、地山である。しかし、地形の影響や土地利用の変遷の違いから、各地区の旧表土・包含層の枚数や層厚、地山直上層の様相などが多様であり、南側平坦面、斜面部分、北側平坦面でその様相が異なるので、調査区全体に共通する土層番号は設けなかった。代わりに、それぞれの地区(Ⅰ区・Ⅴ区、Ⅱ区、Ⅲ区・Ⅳ区)ごとに、壁面や土層観察用畦の土層を基準とし、最上位層を1層として検出順に土層番号を付した。ちなみに、南側平坦面(Ⅰ区・Ⅴ区)ではⅠ区西壁・東壁の土層断面(第20・21図)を、斜面部分(Ⅱ区)ではⅡ区西壁・東壁の土層断面(第27・28図)を、北側平坦面(Ⅲ区・Ⅳ区)ではⅢ区中央畦西壁・東畦西壁の土層断面(第32図)を基準とした。

これらの層序については、同一の性格を有するものの、土質や土色に若干の違いがある部分を細別するため、土層番号にアルファベットの小文字を付して表記している。ただし、遺構埋土については、アラビア数字の土層番号を付けたものもあるが、○囲い数字やアルファベット表記等を用いて他と区別したことが多い。なお、土色は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じるとともに、適宜、視認色を用いている。以下に、Ⅰ区・Ⅴ区、Ⅱ区、Ⅲ区・Ⅳ区の層序について述べる。

Ⅰ区・Ⅴ区の層序は、第9トレンチの土層を参考にし、新たに確認した土層を追加した形で設定しているが、東壁・西壁で対応層が見られなかった6・8・11・13・15・17・19層は、欠番となっている。1層は表土、2層は近現代盛土、3層は近現代の水成層、4層は旧表土、5・7・9層は中世以後の耕作土、10層は遺物包含層、12・14・20・21層は自然堆積層、16層は大阪層群に似た基盤層、18層は周濠1埋土である。Ⅱ区の層序は、第7トレンチの土層を参考にして設定した。1層は表土、2層は近現代盛土、3層は旧表土(旧耕作土を含む)、4・5層は遺物包含層、6層は周濠2埋土、7・9層は遺物を含まない自然堆積層、8層は水成層ないし土石流堆積層、10層は地山の風化層、11層は典型的な大阪層群ではないが、地山とみなした層である。Ⅲ区・Ⅳ区の層序は、第6トレンチの土層を参考にして設定した。1層は現表土、2層は盛土、3層は旧家屋に伴う攪乱、4層は旧表土より上位の自然堆積層、5層は旧表土、6層は遺物包含層、7層は周濠3より下位の遺物を含まない自然堆積層、8層は地山の風化層、9層は地山の土壤層・鉄分沈着層、10層は地山である。なお、Ⅳ区南部には、5層の間層として、近世以後の水成層である11層が観察された。

第3節 遺構

前節と同様、Ⅰ区・Ⅴ区、Ⅱ区、Ⅲ区・Ⅳ区に分けて記述する。なお、事業地は北西から南東に下る斜面に即して造成されているため、各調査区は東西南北に対して約45°振った地区割りとならざるを得なかった。このため、以下では、各調査区の地区割りに応じて、便宜上、標高の高い北西方向を北側、南東方向を南側として記述する。

1. Ⅰ区・Ⅴ区

南側平坦面を中心とする調査区で、確認調査の第9・10トレンチが、中央やや東寄りを南北に貫通し、第11トレンチは、Ⅰ区の南西端に位置している(第12～21図、図版6～18)。なお、Ⅰ区・Ⅴ区の南端は、昭和35年の石垣施工工事の際、基礎層まで掘削されたため、遺構面は残存していない。

Ⅰ区では、合計4面の遺構面を検出した。その検出層位は、上から、第1遺構面(5・7層上面で検出)、第2遺構面(9層上面で検出)、第3遺構面(10・12層上面で検出)、第4遺構面(12・20・21層上面で検出)である。一方、Ⅴ区では、旧表土である4層を除去したところ、Ⅰ区の第1遺構面に相当する遺構面が検出された。しかし、第1遺構面のベースである7層直下に20層が現れ、この20層上面で遺構が検出できなかったことから、Ⅴ区ではⅠ区の第2～4遺構面に相当する遺構面はすでに削平されたものと判断した。よって、Ⅴ区の遺構面はⅠ区の第1遺構面に相当する1面のみであり、この面を「Ⅴ区の第1遺構面」と表記する。Ⅰ区の第1遺構面とⅤ区の第1遺構面は耕作面で、耕作地段差や溝、土坑が検出された(第12図、図版6・7)。Ⅰ区の第2遺構面と第3遺構面では、土坑や溝、不定形の中世土坑等が検出された(第13～17図、図版8～13)。第4遺構面では、不定形の中世土坑と古墳の周濠が検出された(第18・19図、図版14～17)。以下、遺構面ごとに検出した遺構の様相や年代等を記述する。

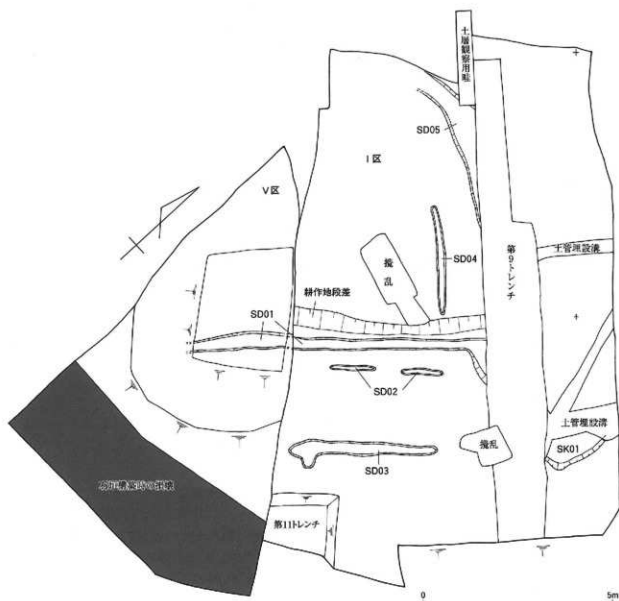
(1) 第1遺構面(第12図、図版6・7)

第1遺構面は、現表土(1層)下の近現代盛土(2層)や近世遺物を含む旧表土(4層)を除去し、耕作土である7層上面の標高43.0～43.4mで検出した遺構面である。この遺構面は比高差約30cmの耕作地段差を伴う上下2面の平坦な耕作面から成り、溝5条(SD01～05)、土坑1基(SK01)を確認した。ただし、Ⅰ区北端は、4層の下に7層はなく、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土の5層が現れた。

耕作地段差は第9トレンチ以西において明瞭で、この段差の直下に東西方向を指向するSD01が位置している。SD02・03はSD01と同じ下段の耕作面で検出したもので、SD01と同一方向を指向する。一方、SD04・05は上段の遺構面で検出したもので、SD04は南北方向を指向して、耕作地段差付近まで延びている。また、SD05は5層と7層の境界に沿いながら、緩やかに南へ延びる。ちなみに、5層上面は北に上昇しており、Ⅰ区のすぐ北側の第1遺構面相当面は一段高くなるようなので、5層検出部分が耕作地段差に相当するのであろう。SD01・02・05の埋土は4層に類似した褐色(10YR5/1)～黄灰色(2.5Y6/1)粘性砂質土で、SD03・04の埋土は流水堆積による黄灰色(2.5Y6/1)～にぶい黄色(2.5Y6/3)細砂である。Ⅴ区ではSD01の続きが検出されており、SD01の総検出長は7.8mを測る。溝の幅はSD01・03・05が約25～40cm、SD02・04が約15～25cmで、SD01は深さが10cm以上あるものの、他は数cm程度しか検出できなかった。よって、SD01・05を耕作地段差に伴う用排水路、他の溝を塋痕と捉えておきたい。なお、これらの溝の出土遺物は極めて少なく、わずかにSD03において須臾器の杯片1点が見られたが、遺構の年代を量る資料とは言えない。

SK01は第9トレンチの東壁に掛かり、遺構の北側は土管理設溝によって損壊を被っている。残存部分の平面形は東西150cm、南北80cmほどの不定形で、北寄りに直径50cmほどの略円形で灰色(7.5Y5/1)～(N5/0)粘性シルト質土を主体とする部分があり、その周囲に耕作土に似た褐色(10YR6/1)～にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂質土が見られるので、耕作地に伴う溜め井や野壺の可能性がある。中世の土師質土場の体部片1点が出土しているが、遺構の年代は遺物の年代より下であろう。

ちなみに、第1遺構面は、ベースとなる5・7層が、中世の土師質土器や瓦質土器に加えて近世陶磁器細片を含んでおり、中世末～近世の遺構面と考えられる。



第12図 I・V区第1遺構面平面図 (1/100)

(2) 第2遺構面 (第13・14図、図版8)

耕作土である7層を除去した後、1枚下の耕作土である9層上面において検出した遺構面で、標高42.8～43.3mを測る。第1遺構面同様に、第2遺構面でも、第9トレンチ以西において耕作地段差が認められたことから、第1遺構面が、第2遺構面の耕作地の区画を踏襲している様子がうかがえる。検出した遺構は、2条の溝 (SD06・07) と1基の土坑 (SK03)、不定形の中世土坑2基 (SX01・02) で、耕作地に伴うものと、中世の居館に伴うものが見られる。なお、I区北西部においては7層直下で無遺物層である12・14・16層が検出されており、この部分については第2遺構面が最終検出面となった。

SD06はI区北東部で検出した幅約50～80cm、深さ約10cm、検出長200cmの溝で、I区東壁以东に延びる。埋土は褐灰色 (10YR6/1) ～黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂と黄褐色 (10YR5/8) 粘土の混じった水成層である。須恵器の杯片1点および土師質土器片1点が出土した。SD07はI区南西部で検出した幅約30～45cm、深さ約10cm、検出長240cmの溝で、須恵器や土師器の細片と中世土師質土器の皿片が見られた。埋土は、ベースの9層より白色がかった灰白色 (10YR7/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土である。SD06とSD07は東西より少し北に振る方向を指しており、法量や土質から、耕作に伴う溝と考えられる。

SK03はSD06より南側で、第9トレンチの壁に掛かって検出された。9層を攪拌したような灰黄褐色 (10YR5/2) ～褐色 (10YR4/4) 粗砂混じり砂質土を埋土とする遺構だが、本来の形態は不明である。

第3遺構面では、溝1条(SD08)、土坑3基(SK02・04・05)と、不定形の中世土坑3基(SX03・04・06)



を検出した（第15～17図、図版9～13）。これらの遺構はいずれも中世に属するもので、居館に伴うものが多いようである。

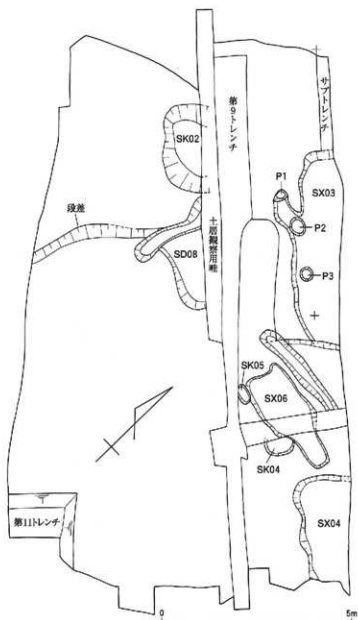
SD08はI区北西部で検出した幅約40～50cm、深さ約20cm、検出長220cmの溝で、土師質土器の細片を出土した。埋土は10層よりやや黒色がかかった褐灰色（10YR4/1）～にぶい黄褐色（10YR5/3）細砂質土で、走行方向は第2遺構面で検出したSD06・07と同じであることから、SD08もSD06・07と同様に本来は第2遺構面に伴う耕作溝と捉えておく。

SK02は、第9トレンチ西壁に掛かる遺構で、第2遺構面で検出したSX01の下位に位置する。東西110cm、南北240cm、深さ30cmほどの皿状の遺構で、埋土は灰黄褐色（10YR6/2）～にぶい黄褐色（10YR5/3～10YR5/4）粘性砂質土～砂質土（第9トレンチ17層）でSX01埋土に似た土質と言える。また、土師質小皿・土塼や備前焼片が出土しており（第36図3・6・7・9・14～16）、SX01から出土したものと同一個体の可能性のある破片が含まれていることから、SX01とSK02は同一の遺構と判断するに至った。ただし、検出した遺構面の違いから、上位埋土をSX01、下位埋土をSK02として報告する。なお、確認調査時に第9トレンチにおいて確認した中世陶器の集積遺構は、SX01およびSK02に相当するものと判断した。遺構のベースは流出堆積している12・14・16層で、SK02の埋土は大阪層群に似た基盤層である16層を主たる起源とし、上部は土壌化によって粘性を帯びており、SX01埋土はさらに酸化が進んで黄色がかっている。ところで、SX01・SK02は、出土した遺物の様相から中世の遺構と言えるが、人為的な遺構と考えるほかに、窪地状の自然地形を礫や陶磁器類の廃棄土坑に転用したようにも見える。

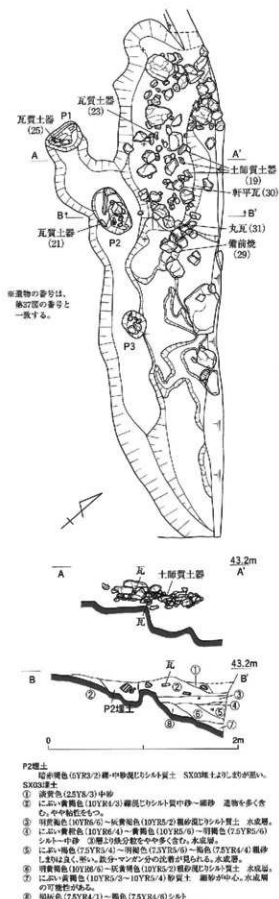
SK04・05はI区南東部のSX06に近接する遺構である。埋土や遺物の様相から、SX06に伴う遺構と考えられることから、SX06と併せて後述する。

SX03とSX04はI区東壁沿いで検出したもので、北側のSX03は東西120～180cm、南北500cm、深さ100cmほどの不定形の遺構である。南側のSX04は、その南端を石垣構築時に切られているが、東西70～120cm、南北300cm、深さ80cmほどが遺存していて、平面形は隅丸方形に近い。ともに、室町時代の多様な遺物が出土しており、I区における当該期の主たる遺構といえる。

SX03は12層を掘り込む遺構で、その上面は南に下降しており、上位には5・7・9層だけでなく、10層も堆積している（第21図）。しかし、SX03の北部は5・9層を除去した段階で検出されたので、ここでは第3遺構面検出遺構として扱っている（第16図、図版10・11）。埋土は、ブロック状の砂を除くと、上位の粘性砂質土（第16図②・③層、第21図①～③・



第15図 I区第3遺構面平面図（1/100）



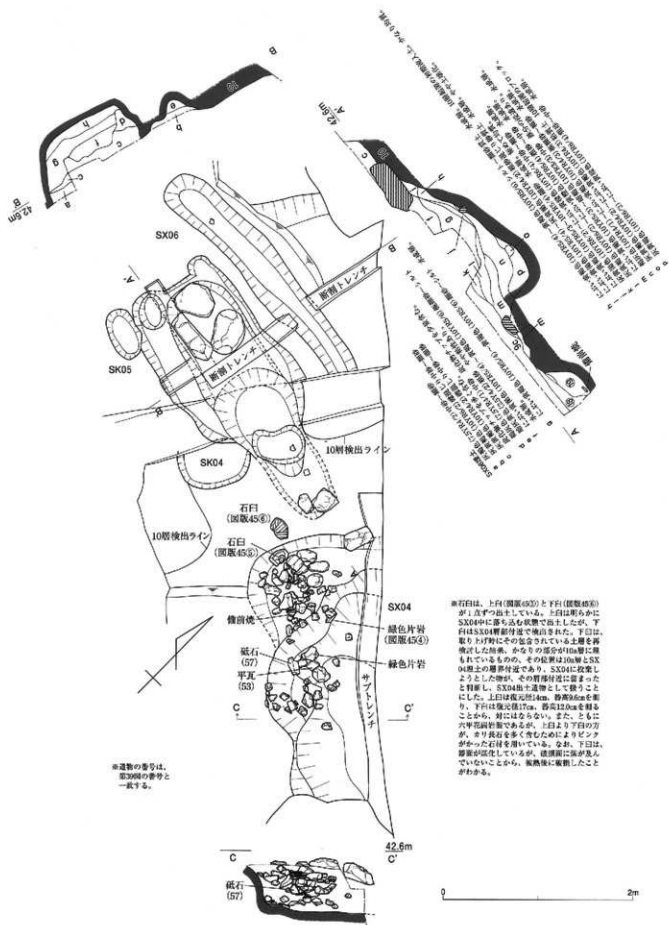
第16図 SX03平面図および見通し断面図
(1/40)

⑬～⑮層)、中位の粗砂～中砂(第16図④・⑤層、第21図東壁⑤～⑦層)、下位のシルト～細砂(第16図⑥～⑧層、第21図東壁⑧～⑫・⑬層)に分類できる。中位から下位にかけてラミナが認められるので、水流堆積層といえる。一方、上位の粘性砂質土はかなり不均質で、遺物の出土が多い。この遺構からは、土師質土器、瓦質土器、陶器、瓦などが出土しており、専ら播鉢や燗釜といった調理具が多い傾向がある(第37図)。また、赤変したものを含む花崗岩や古生層の礫を伴っている。

ところで、SX03の床面は凹凸が著しく、水流によって挟まれたようになっていることや、中位から下位に水流による堆積砂が認められること、さらに、SX03南部の埋土やその上位に堆積している10層が明らかに斜め堆積(流出堆積)であることから、SX03は、人為的な遺構と言うより、本来谷であった部分が埋没する過程で利用され、廃棄土坑のような様相を呈したものと考えられる。とくに遺物の出土量が多かったSX03の上層は、谷の西肩部が湿地状を呈していた段階で、居館において不要になった調理具等を廃棄したものであろう。SX03の年代は、出土した土師質土器、瓦質羽釜、備前焼播鉢等から、15世紀後半と考えられるとともに、軒瓦等の出土によって、当該期の居館に瓦葺の建物が含まれていたことが推定できる。

なお、SX03の西肩部付近では、SX03を切る深さ40cm程度ビットが3基検出された(SX03-P1～3)。これらのビットは華大の礫や土師質土器・瓦質土器片を伴う(第37図21・24・25)。P1の埋土は弱い粘性を持つ灰褐色(7.5YR5/2)礫泥じり細砂質土、P2・3の埋土は暗赤褐色礫・中砂混じりシルト質土で、SX03埋土と比べるとしまりが悪い。P1～3は、埋土や遺物の様相から、SX03の埋没後にさほど間をおかず建てられた建物に伴う柱穴の可能性が高い。

SX04はSX03の約4m南側に位置しており、9b・9c層の下で検出したが、SX03の南部上位に堆積した10a・10b層を掘り込んでおり、SX03より後出の遺構である(第21図)。埋土は、SX03とは異なり、にぶい黄褐色～黄褐色を呈するシルト質土で、土壌化が認められる。遺物は土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、石製品(石臼、礎等)、調理具の多さがSX03と共通する(第17図、図版12)。埋土は、その土質からSX03以来の谷の最終埋積土と想定できるので、SX04の性格も、SX03同様に、斜面地形を利用した廃棄遺構と推測される。なお、SX04の下位には、SX05が位置している。



第17図 SX04・06平面図および見通し断面図・土層断面図 (1/40)

SX06はSX03の南西側かつSX04の北西側に検出した遺構で、検出当初は、平坦な上面をそろえた60cm大の花崗岩礫3石を伴う、東西2m、南北5m程度の隅丸方形の遺構に見えた。遺構の中央付近を土管理設溝で切られていたこの部分で土層を観察し、さらに解剖トレンチを設けてから四分割法で掘削した結果、東西60～120cm、南北300cm、深さ60cmを測る土坑部分と、その東側の幅30～40cm、長さ280cm以上、深さ34cmの溝状部分に分かれたが、土坑部分と溝の方向が一致しており、埋土も似ているので、一連の遺構と捉えて報告する(第17図、図版13)。

SX06の埋土は上部が灰褐色や灰黄褐色の中砂～細砂(第17図a・b層)で、その下に、炭化物チップを含む灰黄褐色や褐灰色の砂層(第17図c・d層)が広がり、遺構のベースは10層であるが、南方に偏するように10層を挟る長軸120cm、短軸80cm、深さ40cmの楕円形の砂溜まり(第17図f～p層)があった。この埋土は、ラミナの見られる水流堆積層である。出土遺物は乏しく、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器の小片のみである。SK04はSX06の南西側に検出した遺構で、北側を土管理設溝によって切られているが、径80cm、深さ10cm程度の円形土坑に復元できよう。埋土は褐灰色(10YR5/1～10YR4/1)～灰黄褐色(10YR4/2)粗砂混じり細砂質土で、土師質土器の細片と炭化物を含んでいた。SK05はSX06の北東隅に検出した遺構で、長径55cm、短径32cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。炭化物を含む黄灰色(2.5Y5/1～2.5Y4/1)シルト質土を埋土とする柱状の部分と、灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄褐色(10YR5/3)中砂～粗砂を埋土とする掘形に分かれるが、遺物は出土していない。

SX06の性格については、正直なところよくわからないが、上面をそろえるように設置された花崗岩礫3石のすぐ南側に砂溜まりがあることや、方向をそろえた土坑と溝を伴うことから、中世居館に伴う、何らかの上屋構造を有する洗い場のものを想定している。

(4) 第4遺構面(第18・19図、図版14～17)

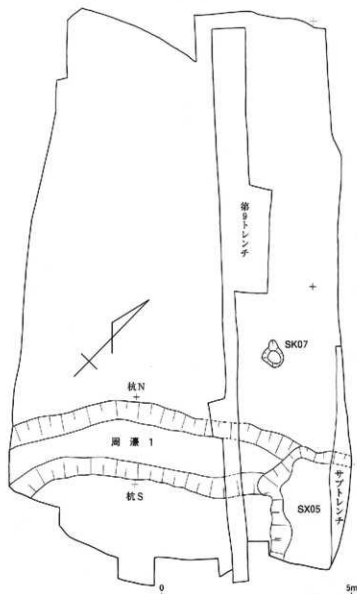
第4遺構面は、I区の中央部から南部に展開する遺構面で、無遺物層である12・20・21層をベースとしており、標高42.1～41.4mを測る。この遺構面では、土坑1基(SK07)と不定形の中世土坑1基(SX05)に加えて、古墳の周濠1条(周濠1)を確認した(第18・19図、図版14～17)。ただし、後述する通り、SK07は第3遺構面で検出したSX06の、SX05は第3遺構面で検出したSX04の下部構造であるが、検出した遺構面の違いを考慮して、第4遺構面の遺構として記述する。

SK07はSX06の礎設置部分である。礫を除去したところ、SX06の砂溜まりの北側に、10層起源の灰黄褐色(10YR4/2)～にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂混じり細砂質土が確認された。このことから、SX06の3石は、浅く10層を掘り下げて、人為的に設置されたものであることが明らかになった。

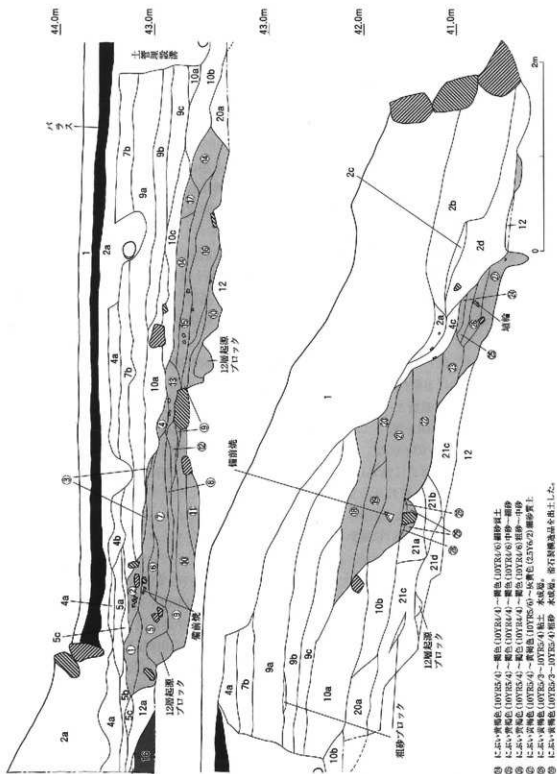
SX05は第3遺構面のSX04の下位で検出した遺構で、東西160～190cm、南北310cmを測る不定形な平面形で、周濠1の東部を切っている(第19図、図版15)。遺物は少ないが、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・石製品(滑石製模造品)と中世の土師質土器・瓦質土器・磁器が混在する(第38図44、第42図122・132・135・136)。埴輪や滑石製品(第42図136)の存在から古墳時代の遺構の可能性も考えたが、136を出土した北寄り最下部の砂層(第21図⑨層)を篩選別したところ、土師質小皿片(図版48⑦)と青磁碗片(図版48⑧)を供伴することが明らかになったので、中世の遺構と判断した。床面は西から東に下降するとともに、北から南に下降しており、南端部の深さは1mに達する。SX05の上位埋土は土壌化の見られる灰黄褐色～にぶい黄褐色砂質土(第21図⑩層)や粘性のあるにぶい黄褐色～黄褐色細砂質土(第21図⑪層)であるが、下位埋土は、水成層であるにぶい黄褐色～褐色砂層の流出堆積層が主流になり(第21図⑫～⑬層)、SX05の床面は水流によって挟まれたと見られる凹凸が目につく。また、周濠1の床面よりもSX05の床面の方が40cm以上低く、第19図a・b層のように、周濠1の埋土が埴輪と共にSX05内にずり落ちたものも見られる。このような様相から、SX05の性格は、中世において周濠1を攻撃するように切り込んだ谷の西側部であり、徐々に埋没していく課程において、古墳時代の遺物や中世の遺物が流入したようである。ただし、SX05の南端では、瓦質土器羽釜(第38図44)と共に煤化した拳大の礫が数個出土しており、これらは人為的に投入された可能性を有する。また、SX05から出土した中世遺物とより上位に位置するSX04から出土した中世遺物に著しい時期差を認めることはできないので、SX05はSX04と同様に斜面地形を廃棄場として用いた一連の遺構と考えると整合性があるだろう。

周濠1は、東部をSX05に切られているが、I区の南部を東西に貫通するように検出された遺構で、検出長は7.6mを測る（第19図、図版14・16・17）。検出当初は、幅約2mの灰黄褐色～ぶい黄褐色細砂質土（第19・20図18a層）を、傾斜地に流入堆積した腐植土層ないし、耕作地段差に伴う溝の埋土と捉えたが、土師質土器や瓦質土器といった中世遺物に加えて、古墳時代の土師器・須恵器などが多く包含されていることから、その性格を追究すべく、第9トレンチを延長して断割ったところ、18a層の下には暗灰色がかった褐灰色～灰黄褐色～黒褐色細砂質土（第19・20図18b層）が確認され、18a・18b層を主たる埋土とする、深さ50～60cmで皿状の断面形の溝であることが明らかになった。また、掘削を進めたところ、18a層には土師質土器や瓦質土器と古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・土製品（土鏝）が混在しているものの、18b層から出土した遺物は土師器・須恵器・埴輪・土製品など、古墳時代後期までのものにほぼ限られることが確認された。さらに、溝の平面形が緩い円弧を描いていることから、この溝が古墳の周濠であると判断するに至った（「周濠1」と呼称する。）。このため、周濠1に2ヶ所の土層観察用の土手（東側土手・西側土手）を設けて埋土を具に観察したところ、18b層の下に、18b層より色調の薄い褐灰色～灰黄褐色シルト質土（第19・20図18c層）とベースである20層の再堆積土と見られる褐灰色～ぶい黄褐色細砂質土（第19・20図18d層）が認められた。また、18c・18d層にはほとんど遺物が含まれないことから、18a層を「周濠1上位埋土」、18b層を「周濠1中位埋土」、18c・18d層を「周濠1下位埋土」と区別することにした。なお、ベースとなる土層の情報を得るために、周濠1の完掘後に周濠1の中央部分を断割ったところ、自然堆積層である20層が堆積しており、その下にきわめて堅く安定した12層が認められた（図版18）。

周濠1から出土した古墳時代の遺物について見ると、土師器・須恵器・埴輪は周濠の各所に分布しているが、土製品（土鏝）は、I区西端の南北80cm、東西50cmに集中する傾向が看取された。これらの土鏝は破片も併せて15個体以上出土しており、いずれも形態や法量が共通している（第41図111～118）ことから、一連の網に伴うものと判断した。土師器は、細片が多いことから、一見して古墳に伴うものというよりも周辺からの流入が考えられる状態であり、後日検討したところ、庄内式や布留式に相当するものが一定量見られる一方で、古墳築造時期を示すと考えられるものはほとんど見られなかった（第40図61～79）。このため、土師器を基準にして古墳の年代を推し量ることは出来ない。そうすると、必然的に古墳の築造年代は、須恵器と埴輪を根拠とせざるを得ない。須恵器は杯蓋・杯身・高杯・甕・壺が出土している（第40図80～98）。これらは、80のように内面に赤彩を施し、5世紀後



第18図 I区第4遺構面平面図（1/100）



半に属する杯蓋がある一方で、84・85の杯蓋や86～93の杯身のように6世紀後半に下り得るものも見られた。このため、周濠1の築造は、須恵器からでは5世紀後半とも6世紀後半とも決し難い。一方、埴輪は土師質焼成のものばかりで、比較的破片が大きい普通円筒埴輪や朝顔形埴輪は、周濠1に直接関わる可能性が高い(第41図101～110)。101～103は調整状態が良く観察でき、外面の最下段は一次調整のタテハケにナデ調整で仕上げ、それより上の段はタテハケの後にBd種を施している。また、内面はユビナデとユビオサエで成形していることから、5世紀後半頃の円筒埴輪と推測できる。朝顔形埴輪の107・108は、厚手で突出する突帯をもつ。胎土や器壁の厚さから104・105と同一個体とも考えられるものである。これらは、朝顔の受け部や突帯の形態、円筒部の造作から、5世紀後半から6世紀初頭に下る年代が想定される。このような埴輪の様相から、周濠1の築造年代は、5世紀後半でも新しい段階に想定したい。

ところで、周濠1の西部が遺存していないか追求すべくV区を設定して掘削したところ、昭和35年の石垣設置工事によってV区南部は大規模な攪乱を被っており、同濠1は、I区より西の部分を完全に失っていることが明らかになった。さらに、このことから、昭和35年当時の出土遺物にみられる古墳時代中期の土師器・須恵器・埴輪(森岡編1979 第4図)の多くは、この周濠1に帰属するものであったと言える。

I・V区においては、以上のように、第1遺構面で中世末～近世の耕作面が確認され、この耕作地の区割りが第2遺構面における耕作地の区割りを踏襲することが明らかになった。当調査区においては、これらの耕作地に先行する遺構として、第2～4遺構面で15世紀後半～16世紀前葉の遺構が確認された(SK02・04・05・07、SX01～06)。これらの中では、SX02とSX06が人為的に配石を行った可能性があるものの、SK02とSX01・03～05は、地形を活かした廃棄遺構の可能性が考えられるものである。とりわけ、SX03～05は調査区東辺に南北に連なって確認されたもので、層位的に見ると、SX03→SX04、SX05→SX04の前後関係が読み取れる。また、SX03とSX05下位埋土が床面を扶えるような勢いのある水流堆積層であることから、SX03とSX05の下位埋土の堆積環境が似ており、その堆積時期を近いものとみるならば、SX03とSX05とは互いに触れ合う時期に埋没が進行していったと捉えることが出来よう。遺物については、土師質土鍋と瓦質羽釜、備前焼播鉢が普遍的に出土しているが、土師質土鍋と瓦質羽釜について、明確な時期差を認めることはできない。備前焼播鉢については、SX01・SK02に、乗岡編年の中世4期(15世紀前葉～15世紀第2四半期)のものがあり、この遺構が当調査区の中世遺構では最も早いものかもしれない。次いで、SX03・06において、乗岡編年の中世5期(15世紀第3四半期～15世紀末)のものがあり、SX04ではさらに新しい乗岡編年の中世6a期(16世紀初頭～16世紀前葉頃)のものが見られる。よって、これらを根拠として、当調査区の中世遺構は、SX01・SK02→SX03・05・06→SX04(SX02は不明)と考えたい。この結果として、第1遺構面と第2遺構面で検出した耕作地は16世紀中葉以降に形成されたものと判断できる。

ところで、これらの耕作地は耕作地段差を伴う上下二枚の平坦なものとして造営されているが、周濠1の上位埋土に中世遺物が混入している様子を勘案した場合、中世の居館段階において、周濠1の上部や墳丘の残骸を削る造作が行われたことが推定できる。おそらく、当調査区全体を対象として、多少の緩傾斜は残ったにしても、一枚の平坦面とする造成がなされていたものと考ええる。なお、周濠1から東播系の須恵器碗(第40図100)など、古墳築造以降、居館造成までの期間に該当する遺物が少量出土しているので、当調査区やその周辺において、居館に先行する生活痕跡が残されており、それらが削平されてしまった可能性を否定することは出来ない。しかし、この間の遺物が極端に少ないことを考えると、この時期に濃厚な遺構を伴う生活域として活用されていた可能性はかなり低い。

さらに、第4遺構面南部で検出された周濠1については、先述したように、ひとまず5世紀後半の年代を与えておく。また、その全形を復元すると、直径12m程度の円墳と推定できる。なお、当該地は現況において南側道路に面する石垣はあるものの、横穴式石室の構築石材と考えられるほどの規模の花崗岩礫は乏しく、発掘調査においても、花崗岩礫の出土を見なかったことから、木植直葬墳の可能性が高いといえよう。

2. II区

II区は、V区のすぐ北側の斜面部分から北側平坦面南端に位置する調査区である。現状では斜面部分は南北幅10m、比高差5mの単一の斜面であるが、既存建物に伴う盛土を除去したところ、II区の地形は、その中央部に比高差16m程度の崖を有する上下二段の平坦面であることが明らかになった。崖の北側には南北長5mの上段平坦面が、崖の南側には南北長3mの下段平坦面が広がり、下段は、I区・V区の遺構面より2～3m上昇している。上段平坦面は、さらに北側に広がっていたようだが、既存建物の地下室構築によって大きく攪乱を被っているため、本来の規模は不明である。なお、確認調査時の第7トレンチが、II区東端の上段から崖部にかけて、第8トレンチがII区西寄りの上段南端から下段にかけて位置していた（第22～28図、図版19～29）。

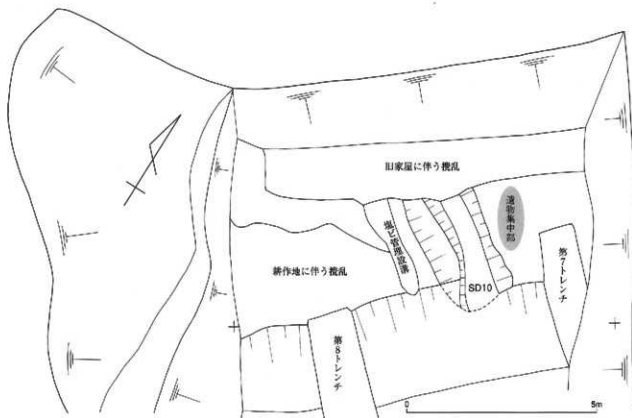
II区では、上段で4面、下段で1面の遺構面を検出した。その検出層位は上から、上段の第1遺構面（4層上面で検出）、第2遺構面（5層上面で検出）、第3遺構面（5層中位～6層上面で検出）、第4遺構面（7・8層上面で検出）である。上段には近世～近現代耕作土（3層）の下に遺物を含む自然堆積層（4・5層）が存在していたが、下段は、3層直下が中世遺構の埋土や基盤層（11層）になっており、耕池化される時点で自然堆積層が削平されてしまったようである。このため、下段の第1遺構面は、上段の第3遺構面に対応すると判断した。以下、遺構面ごとに検出した遺構の様相や年代等を記述する。

(1) 上段第1遺構面（図版19）

第1遺構面は、現表土（1層）・近現代盛土（2層）・旧表土（3層）を除去し、土壌化した包含層である4層の上面（標高47.6m）で検出された。しかし、この遺構面は平坦な耕作面であることは確認できたものの、大きく攪乱を被っており、明確な遺構は検出できなかった（図版19）。この面では、図版51㊟の江戸時代前期の唐津焼折縁皿が出土しているので、中世末～近世の遺構面と考えている。

(2) 上段第2遺構面（第22図、図版20）

第2遺構面は4層を除去し、黄粉状のにぶい黄褐色～にぶい褐色砂質土・粘性砂質土（5層）上面の標高47.4～47.5mで検出された。この遺構面も、第1遺構面同様、かなりの部分が攪乱を被っていたが、調査区東部に南北方向に走る溝（SD10）と遺物集中部が検出された（第22図、図版20）。



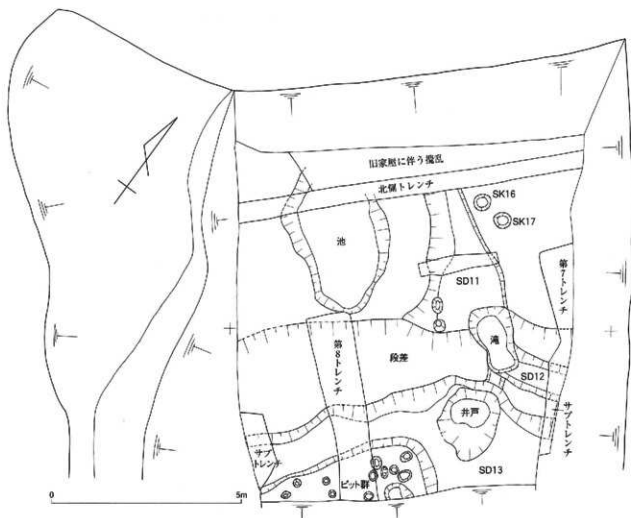
第22図 II区上段第2遺構面平面図（1/100）

SD10は、幅150～200cm、深さ30cmを測り、5層よりも白色がかったにぶい黄橙色砂質土を埋土とする。出土遺物は認められなかったが、埋土や方向から考えると、耕作に伴う用・排水路であろう。

遺物集中部は、5a層上面をやや掘り下げた段階で、SD10のすぐ東側に検出された。東西100cm、南北180cmほどの範囲に、焼石を含む人頭大～拳大の礫や焼土とともに、中世の土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器、古墳時代の須恵器・埴輪が混在して出土した。この部分で5層を掘り下げていくと、5層中位～下位には古墳時代の遺物に集約される傾向が看取された（第46図191・193・197・199～202・205・207・209）。これらの遺物は、後になって、下位の遺構面で明確になる周濠2に係る遺物であることが判明した。

(3) 上段第3遺構面（第23～25・28図、図版21～24・29）

第7トレンチで確認していた炭化物や土器細片を含む灰褐色～黒褐色粘性砂質土（第7トレンチ6層。本発掘調査では6b層に相当する。）を指標として5層を掘削したところ、Ⅱ区上段東部では、標高46.6～46.7mで視認色灰黄褐色の粘性シルト質土（第28図a層）が検出され、6b層の直上層と判断した（6a層）。一方、中央部から西部にかけては、西端際を除いて6層は分布しておらず、標高46.2m付近で、6層の代わりに5層下位層である5d層（にぶい黄橙色～明黄褐色砂混じり粘性シルト質土）や、視認では黄褐色の細砂～中砂（第28図a・d層）、褐色の粘性砂質土（第28図c・e層）が面的に検出され、北側トレンチにおける土層の観察からa・c・d・e層を上部埋土とする遺構の存在が推定された。そこで設定したのが第3遺構面である。この遺構面では、中央から西寄りには南北2列の石組を伴う池が、その東側でSD10のほぼ真下には南流する溝（SD11）が、東部では土坑2基（SK16・17）が確認された（第23～25・28図、図版21～24・29）。



第23図 Ⅱ区上段第3遺構面・下段第1遺構面平面図（1/100）

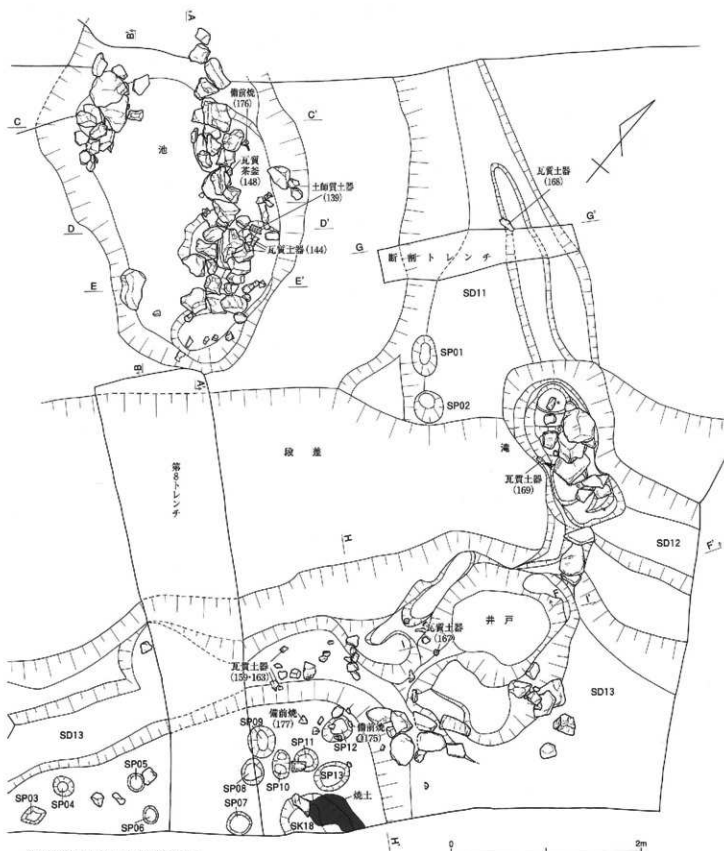
池は、南端が第9トレンチの北肩部に接する位置にあり、北側が旧家屋に伴う擾乱で切られていたが、東西450cm、南北250cmの楕円形に近い平面形を呈していた。検出時には、中央部の幅90～130cmの部分が黄褐色と視認し得る水成層の細砂～中砂（第28図a層。以下、池の埋土表記はすべて第28図に拠る。）で、その周辺が褐色系の粘性砂質土（c・e層）であった（図版21）。これらの土層の様相や6層の有無を確認するために、旧家屋に伴う擾乱の南端に北側トレンチを設定して掘り下げたところ、断面形が碗状で深さ60cmを測る遺構が確認され、そのベースは、西端部にわずかに6層が見られる以外は、9・10層となった。この遺構の最終埋積土と見られるa層を除去したところ、その下に南北に並ぶ石組2列が見え始め、この石列の周埋土（c・e・h・i・k層）が概ね粘性砂質土であったことから、石列を伴う池と推定するに至った（第23～25・28図、図版21・22）。

東側の石列も西側の石列も、石材は六甲花崗岩を主体とし、布引花崗閃緑岩や古生層の礫を加えて構築されていた。石材の大きさは20～120cm大と多様であるが、概ね亜各礫や亜円礫で、いずれも近在で採取できるものである。石列の残りの良い部分には2段積みの部分があり、高さは40cmほどを測るが、裏込め石や控え積みはなく、池の床面を浅く溝状に掘りくぼめて下段の礫を設置した上に、ほぼ垂直ないしやや上開きになるように上段の石を載せている。石列の長さは、東側が南北約300cm、西側が南北約130cmであるが、西側南端より南に約1m離れた位置に40cm大の花崗岩が1石検出されたので、石列がこの石まで続いていたのであれば、西側の石列の長さは280cm以上あったことになる。池の下位に見られるg・k・l層では、石列間のl層が池の初期埋土であるが、g・k層は石列の安定のための置土であり、石列上部の崩壊ないし抜き取りによって一部池内側に崩れ込んだようである。池の中位に見られるh層は地山ブロックを含む不均質なもので、人為的な埋土に見える。おそらく、h層の敷設と石列上部の崩壊ないし抜き取りは一連のものであろう。上位のa～e層では、c・e層が粘質土であり、滞水状態で形成された土壌の可能性がある。それに対して、a・b層は、池を再掘削した部分に堆積した最終埋積土で、水流堆積層であるa層の様相から、洪水等によって一気に埋没した様子がうかがえる。

a・b層から遺物は出土しなかったが、他の埋土からは、中世遺物である土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦と古墳時代の遺物である土師器・須恵器・埴輪が出土した（第43図137～149、第44図152・164、第45図176・179、第46図184・192・194～196）。掘削時に出土層位を正確に押さえることはできなかったものの、これらの遺物は石列間と東側石列以東に偏る傾向があり、石材の上やすぐ脇で検出されたものが多い。この中には、瓦質茶釜（148）や備前焼盃（176）といった特徴的な機能をもつ資料が含まれていた。なお、これらの遺物から、池が構築されてc・e層が形成されるまでの時期を、15世紀後半の範囲で捉えることができよう。

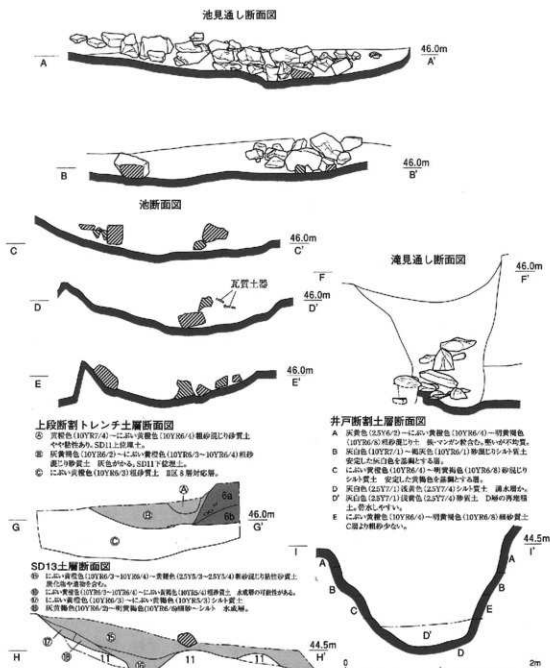
SD11は、北側旧家屋に伴う擾乱によって切られているが、幅100～280cm、長さ360cmが確認され、南端は崖の上端に達している（第24・25図、図版23）。検出時には、幅24～44cmで崖の上端から北に220cmの位置まで延びる黄褐色系の粗砂混じり砂質土（第25図④層。第28図m層に対応。）と、灰黄褐色系の粗砂混じり砂質土（第25図③層）の部分に分かれたので、断割トレンチを設けて土層を観察したところ、④層が上位埋土、③層が下位埋土で、8層をベースとする遺構であることと、この溝が6層の西部を切っていることが明らかになった。④層を埋土とするSD11上部は、深さ10～15cmで断面形が半円形を呈している。③層を埋土とするSD11下部は、深さ28～40cmで、断面形は碗状を呈している。ところで、溝の床面は凹凸がなく南に緩傾斜しており、④層・③層ともにラミナの見られるような水成層ではないので、溝が埋まることのないように、こまめに溝浚いが行われていたのであろう。④層からは、瓦質土器・陶器・埴輪が（第45図178）、③層からは、土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器と埴輪が出土している（第44図168・第46図204）。これらの遺物を見ると、168や178は15世紀後半でも第3四半期に近い様相を呈しているように見える。残念ながら、北側トレンチにおいてSD11下部埋土の様相が十分には把握できなかったため、SD11と池の前後関係はよくわからないが、出土遺物を比較するとSD11が池に先行する可能性もある。

なお、SD11の南西部床面において、2基のビット（SP01・02）を検出した。SP01は、長径42cm、短径26cm、深さ29cmを測る楕円形のビットで、にぶい黄色（2.5Y6/3）粘性砂質土を埋土とする。SP02は、



※遺物の番号は、第43～45図の番号と一致する。

第24図 II区中世遺構平面図 (1/40)



第25図 II区中世遺構見通し断面図および土層断面図 (1/40)

長径34cm、短径31cm、深さ24cmを測る略円形のビットで、有機物を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)～にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土～中砂を埋土とする。崖上端に近い位置のため、橋のような構造物があったのかもしれない。

ところで、SD11が崖の上端に接する位置には、下段へと流下する滝が検出された。この滝の上部覆土とSD11上部の埋土は酷似しており、さらに、滝の下部覆土と下段のSD12の上位埋土(28図④層)も似ているので、SD11・12と滝とを相互に関連のある遺構と考えた。この場合、上下段の平坦化と崖面の切り通しは、上段第3遺構面と下段第1遺構面の遺構構築時の所産と捉えて大過なからう。また、池や滝、溝などを一連の遺構と捉えると、庭園としての空間機能を想定することも許されよう。

SK16・17は、6a層に相当する第28図サ層の上面で検出した、直径50cmの平面円形の遺構で、深さ15cmを測る(第23図)。埋土は、灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土で、遺物の出土はなく、土坑として扱ってはいるが、6b層起源のブロックであるならば、人為的なものではない可能性もある。

(4) 下段第1遺構面(第23・25・27・28図、図版25～29)

下段第1遺構面は近現代盛土(2層)・旧表土(3層)を除去し、地山である11層上面の標高44.5～45.0mで検出した遺構面であるが、南側は旧家屋の塀や門扉の構築によってすでに損壊を被っていた。崖面にはSD11から続く滝があり、この滝を受けて東に延びる溝1条(SD12)と、下段の平坦面をほぼ東西に横切る溝1条(SD13)、その下位に位置する井戸1基、SD13の南側平坦部に展開するピット群(SK18、SP03～13)が検出された(第23・25・27・28図、図版25～29)。

滝は、高さが160cmあり、滝口では幅150cmと最も広いが、下がるにつれてその幅を減じ、幅75cmとなる(第23・25図、図版27)。滝壺は長軸60cm、短軸50cmの隅丸方形で、深さは18cmを測るが、鉄・マンガンの沈着が著しく、常に水が落下していた状態を想定させる。滝壺内には15～30cm大のチャートや六甲花崗岩の亜各礫が見られるが、丁寧に並べたと言うよりも、落下してきたものがそこで止まったように見える。一方、崖面の下半分には、階段状のくぼみを三つ設けて、壁面にもたせかけるように、最大で40cm大の六甲花崗岩・布引花崗閃緑岩の亜円礫を積み重ねてあった。この礫を埋めるように堆積した覆土は、上部が黄褐色系の砂質土、下部が灰褐色系の砂質土である。遺物は、礫と礫の隙間や水流によってポットホール状に挟まれた崖面から出土しており、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・埴輪が見られた(第44図155・158・169・173、第45図174・181)。この中で、155は他の中世遺構の土堀より新しく、16世紀中頃に下る。

SD12は、幅90cm、深さは50cmで、断面形は碗状を呈する。検出長は100cmあり、さらに東壁以東に延びる(第23・24図、図版27・28)。埋土は、初期に流入した水流堆積層(28図⑭層)とその上に、炭化物を含む粘性砂質土(28図⑬層)が認められた。出土遺物は、須恵器・土師質土器・瓦質土器が少量確認された(第44図156・170)。なお、滝壺のすぐ南側で、SD12とSD13の間隔がわずか40cmしかない部分には、滝から流れ落ちた水がSD13に流れ込んで溝状になった部分があり、そこには水の溢れ出しを防ぐため、人頭大の石を詰めて閉塞されていた。滝とSD12から出土した遺物では、土師質土堀と瓦質羽釜が同時期のものと判断でき、先述したSD11とともに、15世紀後半の遺構と言える。

SD13は、Ⅱ区下段の西部から中央部にかけて、崖の直下をほぼ東西に走り、滝に近い位置で直角に曲がって崖から離れ、そこから南流する。崖の直下では、北側が二段落ちになっていて、床面は弧状を描き、幅が120～140cm、深さが60cmを測る。一方、崖から離れると、幅が320cmと広くなり、北寄りの一段深い部分の床面は弧状を呈するが、中央から南側はほぼ平坦である。検出長は760cmを測り、西壁以西と東壁以東に延びている(第23・25・27・28図、図版25～28)。なお、溝の屈曲部分床面において、井戸1基が検出された。

SD13の埋土は、上位が土壌化している粘性砂質土で(第27・28図①・②層。以下、SD13の埋土番号はすべて第27・28図に拠る)、中位には、水成層(③層)と炭化物を含むレンズ状堆積層(④・⑥・⑪層)があり、下位に水成層(⑧・⑨・⑫層)が認められる。出土遺物は多く、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦・鉄製品が認められた(第44図150・153・157・159・161～163・165・166・171、第45図177・180・182・183、第46図206・208)。これらの遺物から、SD13も15世紀後半の遺構と考えられるが、当調査地点では出土量の乏しい完形の土師質小皿や鉄製刀が含まれる点が注目される。

ところで、SD12とSD13の埋土の堆積状況は、下位に水流堆積層があり、その上に炭化物を含む堆積土がある点が共通するが、Ⅱ区東壁における土層の観察では、SD12がSD13に先行するように見える。ただし、溝が維持されていた頃に常時堆積物を浚っていたのであれば、東壁に見られる土層の切り合いは、遺構の廃絶後に北側から徐々に堆積の進んだ様子を示しているかと解釈することもできる。出土遺物はどちらも15世紀後半の年代観を示しているため、遺物から明確な時間差を見出すことができないため、時期差の有無について結論を出すことは難しい。

井戸は、SD13の屈曲分において床面北寄りで検出されたもので、一辺180～200cmの隅丸方形に近い平面形を呈する。深さは120cmで、素掘りの井戸である。埋土は、褐色系の締まりの悪い砂や粘土でSD13の埋土とは異なり、むしろ後述するⅢ・Ⅳ区の堀埋土に似ていた。床面は灰白色～浅黄色シルト質土(第25図D層)に達しており、井戸の最下部にはD層起源の再堆積土(D'層)があって、現状で

も水が湧き出していた(第23～25図、図版28・29)。肩部において、大振りの瓦質羽釜(第44図167)の出土が見られるものの、井戸埋土からは遺物は出土しなかった。167は他の遺構出土の羽釜より若干広く、井筒として用いたものであるならば、井戸の開削年代を示唆する可能性がある。周辺の遺構との関わりとしては、本来は井戸の肩部がSD13の肩部程度の高さであって、井戸と滝・SD12が同時併存していたものが、井戸の廃絶後にその上にSD13を通したとも、元来井戸とSD13は一連の遺構であったが、井戸を先に埋め、その後はSD13だけが用いられたとも解釈できよう。

ビット群は、SD13の南側平坦部において、旧表土(3層)を除去した段階で確認された遺構群で、東西4m、南北1.4mほどの範囲に、土坑1基(SK18)と円形ないし略円形で径20～40cmのビット11基(SP03～13)が検出された(第23・24図、図版26)。本来の表土面は遺存していないため、これらは、ベースとなる11層上面において検出したものであるが、遺構の残存状況はかなり良好であった。

SK18は南部を攪乱によって失っており、本来の形は不明であるが、東西84cm、南北45cmが残存しており、深さは20cmを超える。その上部に焼土や人頭大の花崗岩礫を伴い、周辺のビットと違って、淡色のにぶい黄褐色(10YR7/3～10YR7/4)シルト質砂質土を埋土とする。

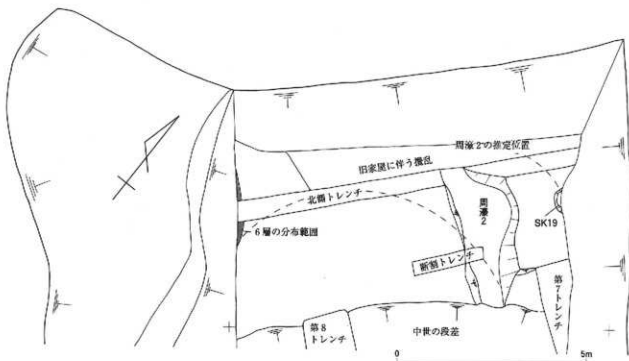
SP03～13は埋土や法量によって幾つかに細分できる。第8トレンチより西側のビットはやや小振りである。深さ40cmを測り、にぶい黄色(2.5Y6/3)～黄褐色(2.5Y5/3)シルト質土を埋土とするSP04や、深さは15cm程度であるが、灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土の柱痕部とにぶい黄色(2.5Y6/3)～黄褐色(2.5Y5/3)砂質土の掘形埋土をもつSP05・06が見られる。第8トレンチから東側には、大振りで深さが20～40cmを測るビットが多い。SP08・09・11・12は、炭化物を含み灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄褐色(10YR5/3～10YR5/4)粗砂混じりシルト質土を埋土とする。また、SP07・13は炭化物を含まないものの、SP08等によく似た埋土を有する。なお、9cmと浅くて地山風化層を含むにぶい黄褐色(10YR6/3～10YR6/4)粗砂混じりシルト質土を埋土とするSP10と、深さは20cmほどあるものの、汚れて不均質なにぶい黄褐色(10YR5/3～10YR5/4)～暗灰黄色(2.5Y5/2)～黄褐色(2.5Y5/3)砂質土を埋土とするSP03は、平面形の歪さから考えると、木の根の痕跡であろうか。ビット群の中では、SP05・06が一連の建物や欄列に伴うものであり、第8トレンチから東側のビットも、幾棟かの建物を構成するビットであろう。

ビットや土坑から出土した遺物はなかったが、ビット群周辺では、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦が出土しており(第44図151・160、第45図175)、土師質小皿(151)や僧前焼皿(175)といった供膳具が見られた。当調査地点では、調理具が多量に出土するのに対して、供膳具の出土量は極端に少ない。それにも関わらず、供膳具が出土していることや、SK18上部の焼土の存在を考えると、この位置に建てられていた建物は、炉や竈を有するもので、その性格は炊事場のような機能の施設ではなかろうか。さらに、想像を逞しくするならば、池や滝、溝、井戸といった庭園を構成する遺構の存在から、ここには茶室や水屋といった特殊な建物が建てられていたと考えても、強ち無謀ではあるまい。

遺物の様相から、井戸の井筒が15世紀半ばに設置され、この庭園が機能していた時期は、概ね15世紀後半～16世紀前半である。また、滝の最終埋没時期はそれより幾分新しい16世紀中頃とみることができよう。つまり、庭園が活用されなくなり、館そのものが廃絶した時期は16世紀中頃であろう。

(5) 上段第4遺構面(第26～28図、図版23)

第3遺構面の遺構埋土を除去してから6層の広がり追求した結果、6層を古墳の周濠埋土(「周濠2」と呼称する。)と捉えたことと、6層より下位に遺構を検出した(SK19)ことから、第4遺構面を設定した。6層は、上位埋土である6a層と、炭化物の含有が多くて灰褐色や黒褐色を呈する粘性砂質土の中位埋土(6b層)、その染み込みの認められるシルト質土の下位埋土(6c層)に区分できるが、その分布は上段の東部と北西端に限られており、周濠2は7・8・9層をベースとする(第26～28図、図版23)。第26図の作成は、何度も精査をかけた後であるため、東部で6層が良好に残っている範囲が、調査区東端から西に1mほど隔てた位置になっている。しかし、北側トレンチの土層観察では幅2.8mにわたって6層が認められ、その下端は最も低位で検出されたSD11際の標高46.0mから東に向かって緩やかに上昇している様子や、東壁において6層の存在が確認できているので、6層の分布範囲は実際にはさら



第26図 II区上段第4遺構面平面図 (1/100)

に東まで広がっており、上段東部では、少なくとも東西幅3mに亘って6層が展開していたと推定できる。しかし、この部分の6層は、SD11によって、西側が完全にカットされ、さらにその西側も池による地形改変があるため、6層本来の範囲は不明である。一方、北西端に見られる6層は、池の西肩部の下位に位置しており、その下端レベルは標高46.2mである。

6層からは、土師器・須恵器・埴輪が出土しており(第46図185~190・198)、第2遺構面で遺物集中部として扱った遺物も合わせると、古墳時代中期の遺物がある程度まとまって出土していると言える(第46図197)。これらの遺物から、周濠2の年代は、5世紀後半と推定できる。

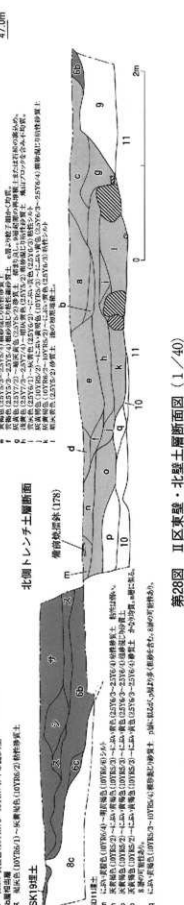
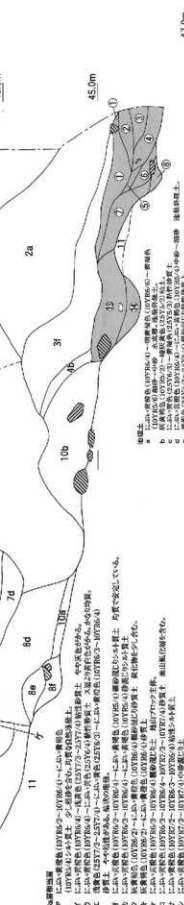
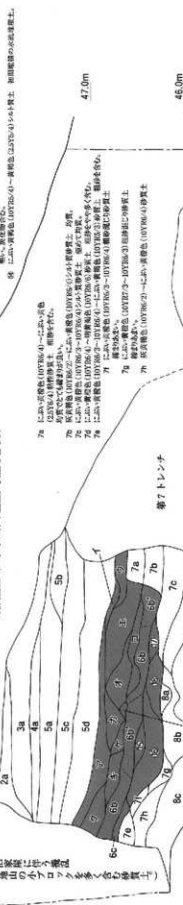
SK19は、東壁沿いにおいて6b層の直下に確認した深さ30cmを測る土坑で、有機質を含むシルト質土(第28図⑮~⑰層)を埋土とする。この埋土は、6c層と似通った土質であり、遺物が確認されなかったために時期は確定できないが、周濠2の深掘部分の可能性もある。

ところで、6層を周濠2埋土としたものの、周濠2の本来の範囲や走行方向、規模などは全く不明である。しかし、SD11や池において周濠2に起因すると考えられる遺物が出土している(第46図194~196)ので、この付近に周濠2が広がっていたのは間違いない。ただし、これらの遺構埋土に6層を起源とするものが顕在化していないことを考えると、東部で見られた6層は、SD11によるカット部分より西側にはあまり広がっていなかったのではなかろうか。また、北側トレンチで見られる6層下端の傾斜は、I区で検出された周濠1や確認調査によって認識されたⅢ区の周濠3(第3章第3節3参照)の断面と比べて、極めて緩やかでしかも幅広である。しかし、出土した埴輪を見る限り、周濠2が他の周濠に比べて極端に規模の大きなものとは考えにくいので、この断面は周濠に直交するのではなく、周濠を斜めに横切っている可能性が考えられる。そうすると、周濠2は、Ⅱ区東部において南北に走行しているように見えているが、実際にはⅡ区東部を北西-南東に横切って、旧家屋における掘削の位置で西行し、西壁沿いに至る弧状を描いていたと推定復元することができよう(第26図)。その結果、直径10mほどの円墳を想定できるかもしれない。なお、この古墳の墳丘部分や南側の周濠は、それが長期にわたって残存していたとしても、上段第3遺構面と下段第1遺構面を造成した段階で完全に削平されてしまったことは、想像に難くない。また、この造成が、I区で確認された15世紀後半の平坦面の造成と同時期のものであることも今更言うまでもない。しかし、I区とⅡ区では当該期の土地利用の仕方は大きく異なっていたようである。

東壁土層断面

- 501土層上
 ① 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ② 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚、土層に粘土が混入する。
 ③ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ④ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑤ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑥ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑦ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑧ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑨ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑩ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑪ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑫ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑬ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑭ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑮ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑯ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑰ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑱ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑲ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ⑳ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉑ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉒ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉓ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉔ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉕ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉖ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉗ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉘ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉙ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉚ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉛ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉜ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉝ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉞ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㉟ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊱ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊲ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊳ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊴ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊵ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊶ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊷ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊸ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊹ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊺ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊻ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊼ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊽ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊾ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。
 ㊿ 灰褐色 (2515.2) ~ 2515.4) 粗粒砂質土、土層厚。

現代粘土 (工部等に用いる粘土、土を含有。)



第28図 II 区東壁・北壁土層断面図 (1/40)

3. Ⅲ区・Ⅳ区

Ⅲ区・Ⅳ区は北側平坦面に位置する調査区で、Ⅲ区は概ねⅡ区の北側を占めており、その東側がⅣ区に当たる。ただし、北側平坦面の南西部には既存建物の地下室が設けられ、地山まで基礎下げが行われていたため、Ⅲ区は、北側平坦地の北辺の庭園部分を中心として設定した。確認調査時に古墳周濠とみた溝状遺構（本調査において「周濠3」と呼称する。）の延長部分は既存建物の中庭に当たっていたので比較的攪乱が少なく、調査区を南側に4m延長したところ、周濠3とこれを横切る中世の堀が検出された。一方、Ⅳ区は、既存建物による攪乱がほとんど及んでいなかったため、北側平坦面東側のほぼ全域を発掘対象とすることができた。なお、確認調査時の第1・2・6トレンチがⅢ区に、第3・4トレンチがⅣ区に位置することになる（第29～35図、図版30～43）。

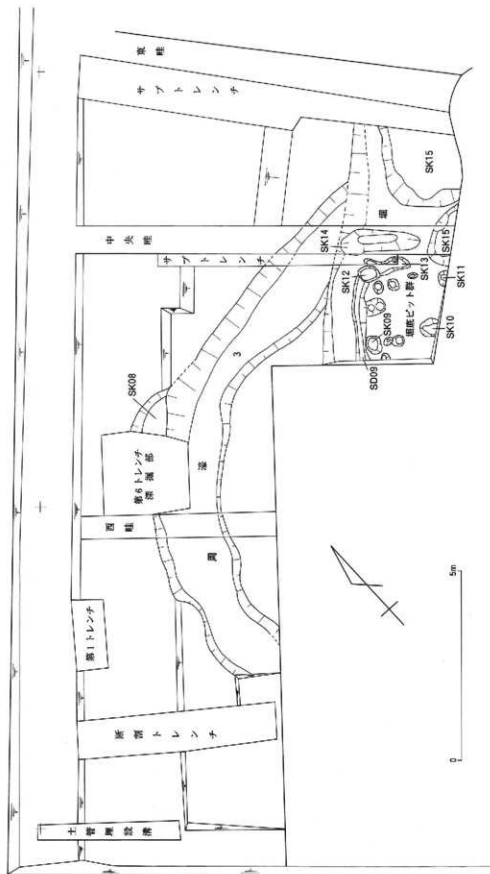
現表土（1層）や旧家屋に伴う盛土（2層）、比較的新しい上位の自然堆積層（4層）を除去して検出した宅地化以前の旧表土（5層）は、耕作土の様相を呈しており、北側平坦面は比高差40～60cm程度の耕作地段差を伴う上・中・下3段にわたる耕作地であったことが明らかになった。さらに、この5層を除去して掘削を進めたところ、Ⅲ区・Ⅳ区では、6層ならびに9層上面に当たる標高49m前後のレベルにおいて、遺構面を検出した。Ⅲ区では、北から順に弥生時代の土坑1基（SK08）、古墳の周濠の一部（周濠3）、中世の堀と堀床面の遺構群（SD09、SK09～15、SP14～21）が切り合い関係を有して確認された。また、Ⅳ区では、Ⅲ区から続く中世の堀の延長部分が検出されたが、この堀の南肩部は近世の耕作地の経営によって失われていた。以下に、Ⅲ区とⅣ区に分け、さらに時代ごとをステージとして、遺構の様相や年代等を記述する。

(1) Ⅲ区の中世遺構（第29・30・32図、図版37～40）

Ⅲ区で確認できた中世遺構は、南東部をほぼ東西に貫通する堀と、その床面で検出された溝、土坑、ピットの遺構群（SD09、SK09～15、SP14～21）から成る。堀は、中央畦西壁沿いに設けたサブトレンチにおいて、周濠3の南側に中世の土師質土器片を含む厚さ40cm以上の水流堆積層が確認されたことから、その存在が明らかになった。Ⅲ区南東部南端における検出長は6.8m、検出幅は3.0mで、北肩部が周濠3を切っている一方で、南肩部やⅢ区以西の部分は既存建物の構築によって既に失われていた（第29・30・32図、図版37～40）。北肩部のラインはやや歪であるが、Ⅲ区南東部における平面形はほぼ長方形である。中央畦や東畦における観察から、10層まで掘り下げた断面形状は逆台形と想定されるので、この堀は等高線に沿って設けられた箱堀であろう。深さは60～132cmを測り、床面には地山の土壌層（9層）が認められたり、堀の下位埋土に有機物を含む堆積土（第30・32図⑬・⑭層。以下、Ⅲ区堀の埋土番号は第30・32図に拠る。）が形成されたりしていたことから、空堀と考えられる。埋土はラミナの明確な水流堆積層が幾重にも堆積しており、視認では、上位は褐色（⑧～⑫層）、中位～下位にかけては黄褐色（⑬～⑭層）を呈している。また、炭化物の流入している層もある（⑩・⑬・⑮・⑯層）。遺物の出土量は余り多くないが、炭化物を伴う層から土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦といった中世遺物（第47図212～226）と、土師器・須恵器・埴輪といった古墳時代の遺物（第49図257・258）が出土している。堀の床面は必ずしも平坦でなく、溝1条（SD09）、土坑7基（SK09～15）、ピット8基（SP14～21）が検出された（第30図、図版38・39）。

SD09は、Ⅲ区南東部の西寄りにおいて、堀の北斜面直下の位置に検出した東西方向の溝である。幅は28～40cm、検出長は220cmで、水成層を埋土としており、堀に先行する溝状遺構の下端部もしくは、堀の下端で共存する排水溝と推測できる。SD09からは、土師質土器や埴輪の小片が出土している。

SK09～15とSP14～21は、SK14が堀の北側斜面から床面に掛かる遺構である他は、堀底の9層ないし10層上面で検出されている。これらの遺構は、明確な柱痕はないが、直径30cm程度、深さ20～40cmの略円形のものをSPとし（SP17・18は近接する二つの遺構と解釈している。）、それより大きいものをSKと表示している。SK09～12は、長径45～60cm程度、深さ30cm程度で略円形の平面形を呈するもの、SK13・14は長楕円形に近い不整形の平面形をもち、深さ10～50cmと床面の凹凸の著しいものである。SK15はⅢ区南東部における堀底の一段下がった部分で、⑫～⑬層を埋土とする。下位埋土である⑮層は、土壌化して炭化物を含んでおり、堀が開放状態であった段階の旧表土であろう。その他の遺構埋土は、



第29図 Ⅲ区平面図 (1/100)

とから、木橋のすぐ東側で、堀の底が一段下がる構造になっていたものと考えている。

(2) Ⅲ区の古墳時代の遺構 (第29・31・32図、図版30～37)

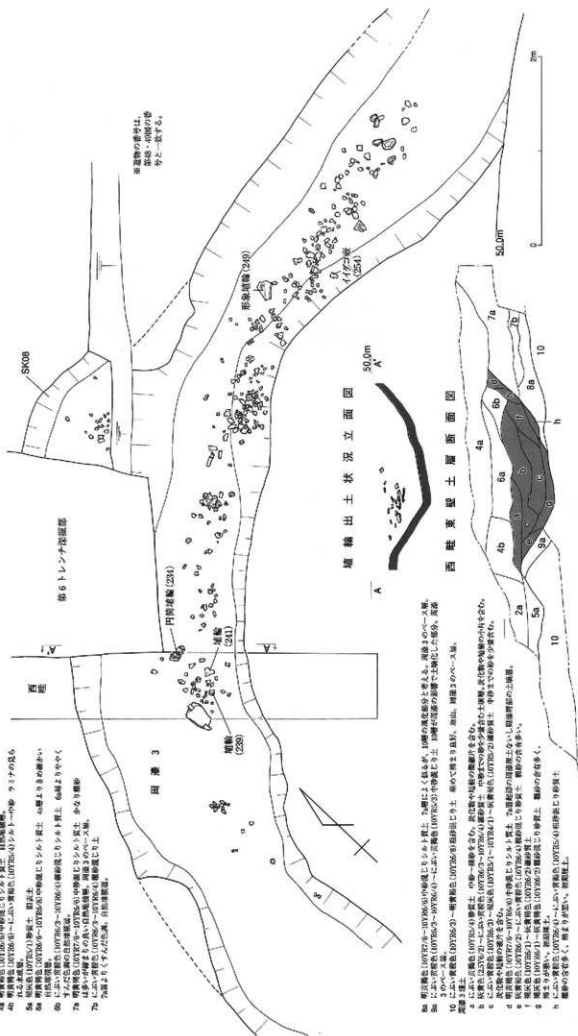
Ⅲ区で検出した古墳時代の遺構は、確認調査時の第6トレンチにおいてその存在を認識し、直径10m程度の円墳に伴う周濠の一部と推定した周濠3である。周濠3は、Ⅲ区の南部を緩やかな弧を描きながらほぼ東西に貫通しており、既に記したように、南東部は中世の堀によって、南西部は既存建物の地下室によって失われているものの、東西13mの範囲に亘り、検出長は15mを測る(第29・31・32図、図版30～37)。濠底の形状は皿状で、平面検出では幅130～200cm、深さ40～60cmの遺存が確認された。

西畦東壁の土層観察によると、周濠のベースは、北側が自然堆積層の7層や地山の風化層である8層で、中央から南側が地山である10層ないしは10層の土壌化した9層である。なお、周濠の南側は、10層上面まで削り込んで近世耕作土(5a層)が形成されているため、周濠の南側部はかなり損なわれているものの、7層上面から切り込む北側部は残りが良く、周濠の最大残存深度は80cmを測る。周濠埋土は、炭化物を含む黄褐色に視認される砂質土から成る上位埋土(第31・32図a・b層。以下、周濠3埋土の土層表記は第31・32図に拠る。)、炭化物の含有が多く、視認では灰褐色～暗褐色を呈する細砂質土から成る中位埋土(c・f層)、しまりの悪い粗砂混じり砂質土である初期流入土から成る下位埋土(e・g・h層)に分けられる。遺物は、中位埋土からの出土が圧倒的に多く、埴輪(普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪)を中心として、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器・土製品(イイダコ壺)が見られるほか、上位埋土から少量の土師器・須恵器・埴輪片が出土している(第48・49図227～254)。また、周濠3上に堆積した4・6層からは、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器・埴輪、中世青磁、石鏃(第10図1)等が少量出土している。周濠3の中位埋土からは、多くの遺物が出土したが、とくに、確認調査時の第6トレンチ東部一帯に濃密な分布が見られ、第48図242の朝顔形埴輪の円筒部上部から朝顔部にかけての破片が非常に高い残存率で遺存していたほか、第49図243～249の形象埴輪片や、254のイイダコ壺といった特徴的な遺物が集中的に出土している。その一方で、周濠3から出土した土師器・須恵器は乏しく、古墳の年代決定は埴輪を指標にするしかない。朝顔形埴輪と普通円筒埴輪、形象埴輪は胎土や焼成、調整に共通性があり、周濠3に関わる一括資料と判断した。これらの埴輪はいずれも土師質焼成を基本とするが、半須恵質と言えるほど堅く焼き締まっている破片もある。朝顔形埴輪も含む円筒部分にはBc種ヨコハケが多量に用いられ、内面はユビナデとユビオサエで仕上げられている。また、形象埴輪については、246・247のような家形埴輪や249のような馬形埴輪の破片が見られる。このような調整や焼成状況、さらに形象埴輪群の存在から、周濠3の構築は5世紀後半と考えることができよう。

以上、周濠3の検出状況からこの古墳の本来の姿を推定すると、直径13m程度の円墳の可能性が考えられる。また、墳丘の規模に比して、普通円筒埴輪だけでなく、朝顔形埴輪、さらには家や馬といった形象埴輪を伴っており、埴輪の豊かさに特徴を見出すことができる。

(3) Ⅲ区の弥生時代の遺構 (第29・31図、図版35)

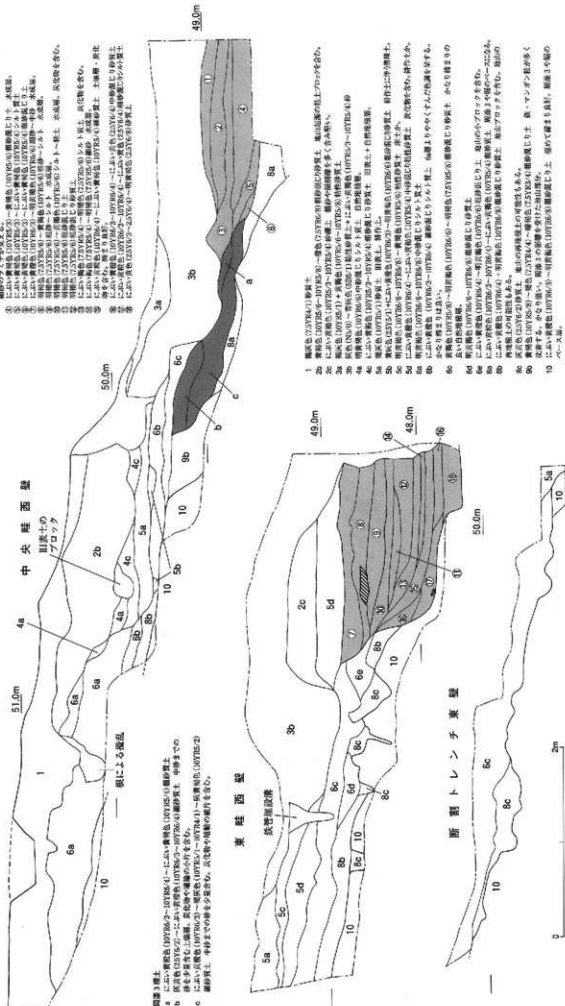
Ⅲ区中央北寄りでは確認した弥生時代の遺構は、土坑1基(SK08)である。SK08は、その西側を第6トレンチによって、南側を周濠3によって削平されていたため、現状では半径120cm程度の扇形の平面形を呈している(第29・31図、図版35)。復元すれば、長軸で3m以内の楕円形の土坑とみられる。周濠3の中位埋土に似た、パウダー状の極めて均質な灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土を埋土としており、確認調査時や本発掘調査の遺構検出時には、周濠3の一部と見なしていた。しかし、埴輪や須恵器が全く出土せず、弥生時代後期後半の弥生土器片ばかりが出土したことから、周濠3とは区別して「土器溜まり」と認識して掘削したところ、深さは約35cmを測り、床面がボール状を呈する土坑であることが判明した。土器は、遺構埋土に混在するようにして壺・壺・鉢などの細片が出土しており(第50図259～264)、総点数は73片を数えた。なお、床面に貼り付くように出土した遺物は見られなかったことや、地山起源の極めて均質な自然堆積層を埋土としていることから、SK03は、土器を廃棄するために掘られた土坑というより、他の目的で構築された土坑に、近在からの土器片が徐々に流入したものであろう。とはいっても、弥生時代後期後半の土器片を有する遺構の存在は、調査地点周辺に、当該時期の集落が展開していたことの傍証となり得る。

[illegible]

第31图 Ⅲ区周濠3平面图·立面图·土層断面图 (1/40)

【図32 断面図】

- 2 砂土、3 河床砂より上部の自然堆積層、4 河床土より上部の自然堆積層、5 河床土、6 自然堆積層、7 河床土より下部の自然堆積層、8 河床土の上部層、9 河床土の下部層、10 河床土



第32図 III区土層断面図 (1/40)

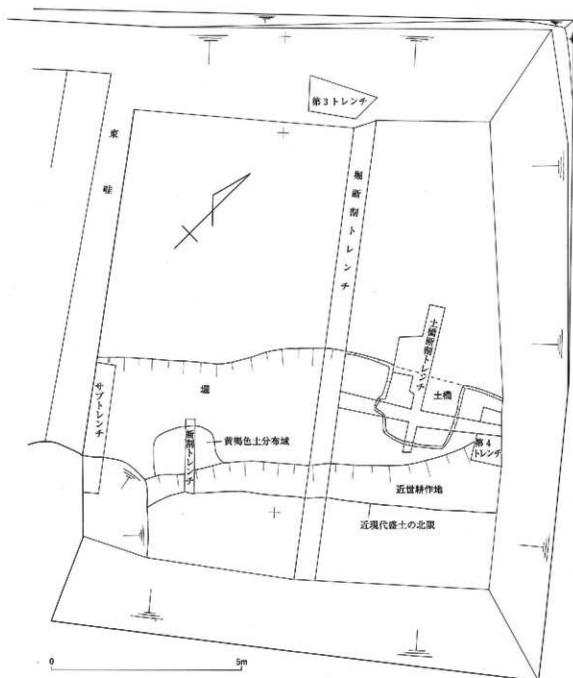
- 河床土
① 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
② 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
③ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
④ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑤ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑥ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑦ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑧ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑨ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑩ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)

- 河床土
① 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
② 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
③ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
④ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑤ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑥ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑦ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑧ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑨ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑩ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)

- 河床土
① 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
② 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
③ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
④ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑤ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑥ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑦ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑧ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑨ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)
⑩ 河床土 (河床砂より上部の自然堆積層)

(4) IV区の近世遺構 (第33・34図、図版41・42)

IV区では、旧表土である5d層を除去して6c層上面で検出した遺構面は、標高47.8~50.0mを測る。ただし、堀より北は、南北長6mに対して比高は約1mで、北から南に下る緩斜面となる。これは、近世に耕作地が営まれる前の地形を反映しているようで、中世の居館造営時に造成されたカット面と想定される。一方、堀の南側には、耕作地段差があり、堀の北側遺構面より一段低い位置に耕作面が営まれていた。この耕作地は、IV区南部の東西9mの範囲すべてに広がっており、その南半部は近代盛土である2層に覆われていたが、南北幅は24m以上に亘る。この耕作土からは近世磁器片が出土しているので、近世遺構とみなした。堀断割トレンチにおいて、堀と耕作地の関係を観察したところ、耕作地は堀の南側の地山(10層)直上に営まれ、耕作土(5d層)下端と堀の床面レベルがほぼ一致する。耕作地の北端に比高60cm以上の耕作地段差があり、この段差の北側上段の耕作地は、堀埋土の上面に乗る形で営まれたため、堀は南肩部を失っており、IV区でも堀幅は確認できなかった。なお、この南側耕作地上には水成層である11層や旧表土(5a層)が堆積しており、近世以後の洪水によって耕作地が放棄されたと解



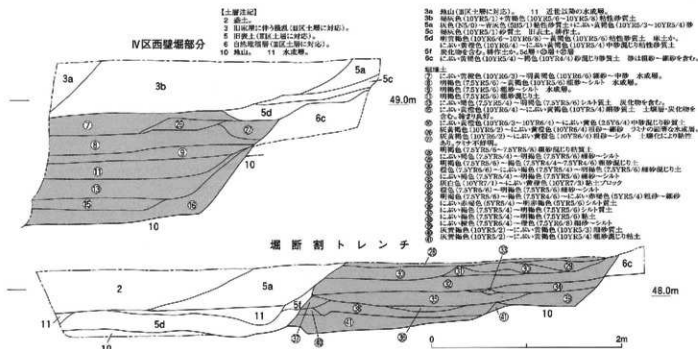
第33図 IV区平面図 (1/100)

することも、耕作を放棄して休閑地となり、宅地化するまでの間に洪水があったとも想定できよう。

(5) IV区の中世遺構(第33~35図、図版41~43)

IV区では、Ⅲ区で検出した堀の延長部分がIV区南部を東西に貫通し、検出長は11mを測る。この結果、堀の総検出長は19.2mとなり、IV区以東にも延びているので、本来は20mを遙かに凌駕する規模であったと推定される。ただし、堀の南部は既に失われているため、堀幅は3.2m以上であることしかわからない。堀の残存深度は70~120cmで、底面のレベルは47.6~47.8mを測る(第33~35図、図版41~43)。IV区における堀検出部分の工事掘削深度が浅かったため、堀のすべてを底まで完掘することはできなかったが、東畦沿い(IV区西壁沿い)サブトレンチ、堀断トレンチ、土橋断トレンチでは、堀の底まで断ち割り、堀の断面形態やⅢ区と同様に水成層が顕著な埋土を観察することができた。第4トレンチにおいて谷の存在を想定する根拠とした基盤層直上の水成層が、この堀の埋土であることも判明した。ところで、濠を伴う中世居館の場合、掘削土を盛って堀より内郭側に土塁を造る例は枚挙に暇がないが、今回の調査区では、土塁を構成していた盛土が堀に流入した痕跡は確認されなかった。もっとも、堀より北側の緩斜面に全く遺構が検出されず、出土遺物もほとんど認められなかったのは、緩斜面に造成したこの部分に土塁が構築され、土坑や溝などを構築する余地がなかったためと考えることもできよう。

堀の検出時に、南西部と北東部で、通常の堀埋土とは異なる黄褐色砂質土の分布が認められた。それぞれに断割トレンチを設けて土層を観察したところ、南西部(第33図に「黄褐色土分布域」と表示。)では、黄褐色土の下に埋土である水流堆積層が確認されたため、この部分は他と異なる堆積環境であったものの、堀の一部であると判断した。一方、北東部では、東西1.8m、南北2.0mの範囲に、堀を埋める厚さ60cm以上の盛土が確認されたので、この位置に土橋が設けられていたと想定するに至った。東西方向の断割トレンチでは、土橋の東側と西側の両方に、堀の底を20cmほど掘り下げた遺構が検出された(第35図に「土橋東部ビット」・「土橋西部ビット」と表示。)。これらは検出した平面形から便宜上ビットと呼称しているが、上端は東西幅80cm程度だが東西幅約40cmの深掘部分のみられる二段掘りであり、東側ビットでは径20cm程度の柱杭が認められる。また、B層下部から柱等の安定を図るために詰められとみられる角礫6個(図版54⑬~⑮)が出土した。このような構造から、溝掘りして要所に杭を打設する土留め板橋構造(財団法人東日本鉄道文化財団2007)であったと推定される。このビット間を充填するようににぶい黄褐色砂質土を主体とする土橋下位盛土(第35図B層)が見られ、その上部に、明褐色のシルト質土を主体とする土橋上位盛土(第35図A層)が積み上げられていた。なお、A層はビット上部を



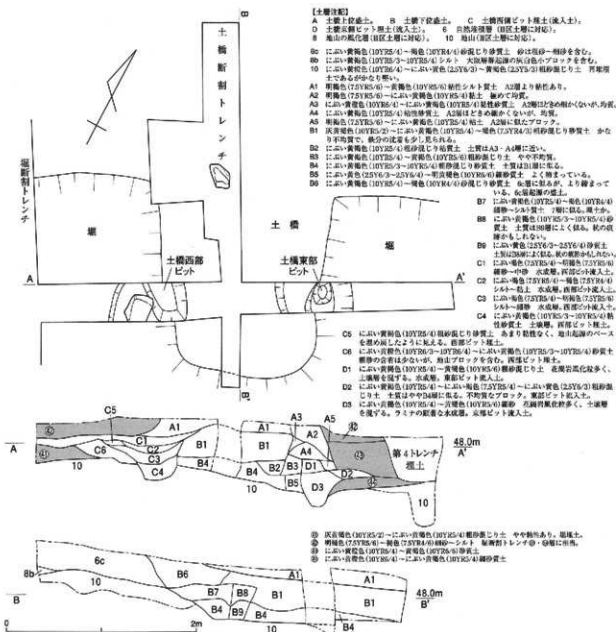
第34図 IV区堀土層断面図(1/40)

覆っているが、ピット埋土が水成層主体であるので、杭や板の倒壊によってピットに土砂が流入し、本来は土橋表装土であったA層がピット上部に及ぶようにずり落ちたようである。

堀からは、少量ながらも須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・埴輪・瓦（第49図256）が出土しており、土橋の盛土からは、須恵器と瓦質土器片が出土している。Ⅲ・Ⅳ区を通して堀から出土した遺物は、土師質土器・瓦質土器・陶器（備前焼）など、圧倒的に15世紀後半の遺物が多く、Ⅰ・Ⅱ区で検出された中世遺構の年代と触れ合う時期の遺構と言える。ただし、煮炊具や鍬鏝といった調理具だけではなく、他の地区より土師質小皿の比率が高い傾向が見られた。

ところで、Ⅳ区の南側に設けた「Ⅳ区以南深掘トレンチ」では、盛土の下にⅣ区南部から同じレベルで続く耕作土（図版433層。Ⅲ・Ⅳ区5層に相当。以下、当該トレンチの土層は図版433に拠る。）があり、その下は床土（4層）、自然堆積層（5層。層厚約40cm、6層。層厚約40～60cm、7層。層厚約10～30cm）である。⑤・⑥層の畧界で瓦が出土しており、⑤層は中世以後の堆積土と見做すが、Ⅳ区の土層との対応関係は不明である。現地地表面3.3m（標高46.4m）まで掘削したが、大阪層群は検出されなかった。

以上のように、Ⅲ・Ⅳ区では、弥生時代後期後半の遺構を切って古墳が営まれ、古墳の周濠を壊して堀を伴う居館が構築され、さらにこの堀の南側を削る形で近世耕作地が展開した変遷が観察できた。



第35図 IV区堀の土橋平面図・土層断面図 (1/40)

第4節 遺物

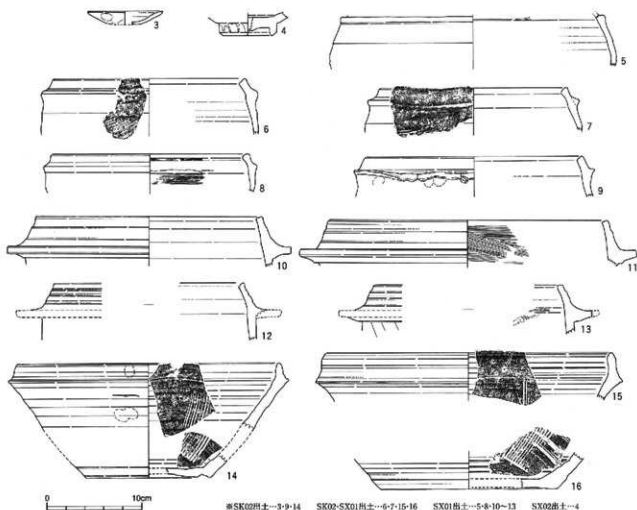
本発掘調査では、弥生土器・古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・土製品（土鍾・イイダコ壺）・石製品、古代の土師器、中世の須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器（備前焼・瀬戸美濃焼）・磁器（中国磁器）・瓦・鉄製品等がコンテナ33箱分出土した。これらは、遺構に伴うものが多く、古墳時代の遺物は古墳の周濠において、中世の遺物は中世の居館に関わる諸遺構において、集中的に検出された。

遺物の記述は、層序や遺構の記述を踏襲して、Ⅰ区・Ⅴ区、Ⅱ区、Ⅲ区・Ⅳ区に分ける。地区ごとに遺構から出土した遺物を中心に図示し、包含層から出土した遺物は、遺構の年代比定に際して参考になるものや本遺跡の性格上特徴的なものに限って図化した（第36～50図、図版44～54）。なお、中世遺構から出土した弥生時代や古墳時代の遺物は混入品とし、包含層出土遺物として扱っている。

1. Ⅰ区・Ⅴ区（第36～42図、図版44～48）

Ⅰ区・Ⅴ区からは、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・土製品・石製品、中世の須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦等が出土している。このうち、SX01・02とSK02から出土した遺物を第36図に、SX03から出土した遺物を第37図に、SX04～06から出土した遺物を第38・39図に、周濠1から出土した遺物を第40・41図に、包含層から出土した遺物を第42図に示している。

SX01・SX02とSK02からは、土師質土器・瓦質土器・陶器などの中世遺物が出土している（第36図3～16、図版44・45）。4の磁器がSX02から出土したもので、その他はSX01・SK02から出土したもの



第36図 Ⅰ区 SK02、SX01・02出土遺物実測図（1/4）

である。4は釉色が灰褐色を呈する粗製の中国製青磁碗の底部である。SX01・SK02から出土したものは、3・5～9が土師質土器、10～13が瓦質土器、14～16が陶器で、土鍋、羽釜、播鉢といった調理道具が目立つ。3は乳白色を呈する手づくね成形の小皿で、口縁部に一段ナデを施す。5～9は播磨型の羽釜タイプの土鍋で、鋳部が形骸化していることから、概ね長谷川編年Ⅵ期とみることができる。10～13はいずれも口縁部がわずかに内傾して二、三段の緩やかな段をもつ羽釜で、森島分類の河内型のE型式・F型式に当たる。14～16は備前焼播鉢で、14は口縁部が口縁帯ほどは発達していないので乗岡編年中世4b期に、15は口縁部「く」の字状の口縁帯を有するので乗岡編年中世5期に相当する。

SX03では、主に上位層から土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦などの中世遺物が出土し、中～下位層には、土師器・須恵器の小片が含まれていた(第37図17～34、図版44)。17～20は土師質土器、21～25は瓦質土器、26～29は陶器、30～34は瓦である。土師質土鍋は17～19のように播磨型の羽釜タイプと、20のような鉄かぶと形が見られる。20の口縁部はやや外に肥厚して三角形を呈するので、羽釜形の土鍋と同様、長谷川編年Ⅵ期のものである。21～25は羽釜で、森島分類のE・F型式に加えて、21のように土師質焼成に近く、幾分長めの口縁部をもつ河内G型式のものもある。26～29は図版44①の片口部とともに備前焼播鉢である。26は焼き歪みのため、口縁部と底部の径が合っていないが、同一個体と判断した。また、図版44②は備前焼の壺である。これらは口縁部形態や焼成状況から、乗岡編年中世5b期に比定できる。瓦の出土は少ないが、軒平瓦(30)を含み、丸瓦(31～33)と平瓦(34)も見られる。30は唐草文をもつ軒平瓦である。31～33は丸瓦の玉縁部分で、32のように釘穴の見えるものがある。

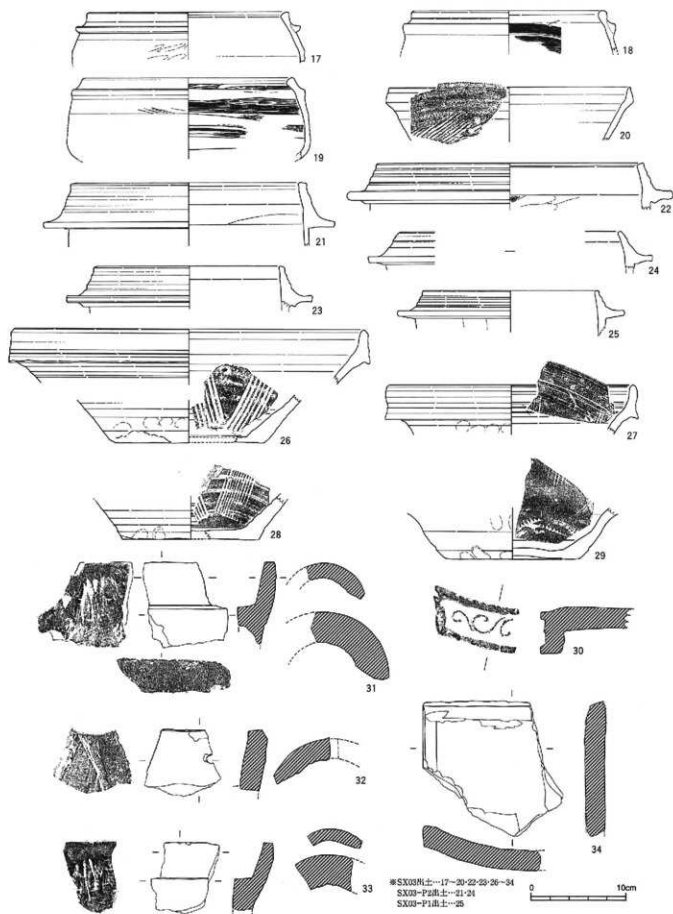
SX04・05からは、土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・石製品や緑色片岩などの中世遺物と、土師器・須恵器・埴輪・石製品といった古墳時代の遺物が出土した(第38・39図35～57、第42図122・123・132・134～136、図版45・48)。遺構の年代を示す遺物として図化したのは、35～39の土師質土器、40～45の瓦質土器、46～49の陶器、50～52の磁器、53～56の瓦、57の石製品である。さらに、図版45に、陶器(③)、緑色片岩(④)、石製品(⑤・⑥)を掲げている。このうち、44はSX05から出土したもので、36・45はSX04・05未分化の状態で見つかったものであるが、その他はSX04から出土したものである。35・36は小皿、37は土鍋、38～45は羽釜、46・47は備前焼播鉢、48・49は備前焼壺、50・51は中国製青磁碗、52は中国製白磁碗、53・54は平瓦、55は丸瓦、56は軒平瓦、57は砥石である。36は体部の開きが大きく、油痕の明瞭な灯明皿である。37は口縁部が短く、鋳部がナデによる突帯状を呈しており、長谷川編年Ⅵ期に下る。羽釜は、SX03出土のものに似た瓦質のものが多く、口縁部の傾きや端部の形態にはややばらつきがあり、38・39の土師質羽釜のように口縁部が上方に高く立ち上がるものも見られる。備前焼播鉢は口縁部部の断面形が「く」の字状で端面に面をもつ、乗岡編年中世6a期のものである。また、口縁部玉縁の形状から、48が乗岡編年中世5b期、49が中世6a期のものといえる。50・51は龍泉窯系の碗で、50は見込みに草花文のスタンプが見られる。56には水波文が見られる。57は粘板岩製で、荒砥であろう。③は備前焼壺体部片、④は明確な加工痕が観察できないので用途は不明であるが、淡路か紀伊からの搬入品である。⑤・⑥は、六甲花崗岩製の石臼で、⑤が上臼、⑥が下臼である。

SX06からは、中世の土師質土器・陶器と古墳時代の土師器・須恵器が出土したが、いずれも小片である(第39図58～60)。58は土師質土鍋、59・60は備前焼播鉢で、59は乗岡編年中世5b期である。

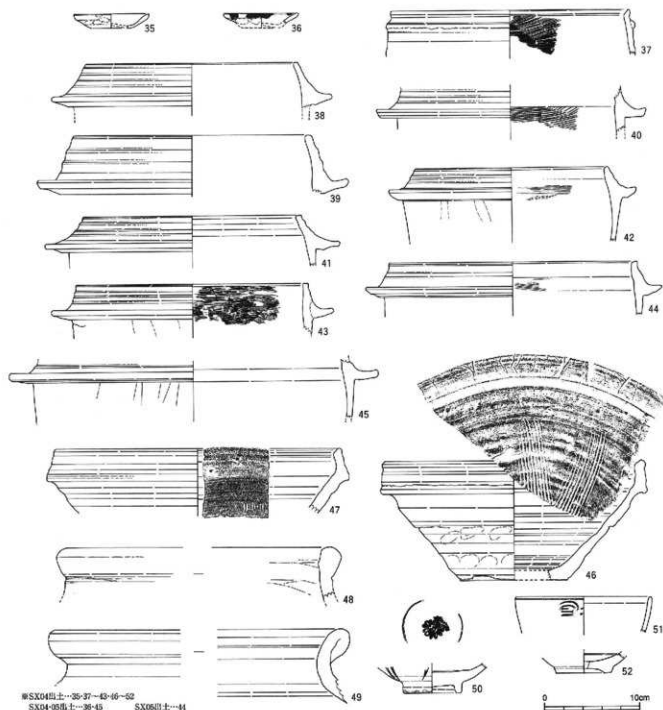
I区の中世遺構出土遺物では、瓦質羽釜が、概ね内傾度が低く直立指向がうかがえるので、15世紀後半を中心とする。さらに、土師質土鍋や備前焼播鉢から遺構毎に年代を検討すると、SX01・SK02は、14のように15世紀前葉～15世紀第2四半期のものが含まれるが、多くは15世紀後半の資料である。SX03やSX06も15世紀後半の年代が考えられるが、SX06は15世紀後半でも新しい段階のようである。また、SX04・SX05は15世紀後半のものに加えて、16世紀前葉に下るものも含まれている。

周濠1からは、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・土製品と、中世の土師質土器・瓦質土器・陶器などが出土している(第40・41図61～118、第42図124～126、図版46～48)。ここでは、おもに弥生時代から古墳時代の資料である61～118について述べる。61～79は弥生土器および土師器、80～100は須恵器、101～110は埴輪、111～118は土製品である。

61・62は壺の口頸部、63～75は壺の口縁部から肩部、76～79は底部である。61は真蛸壺形の土器で、

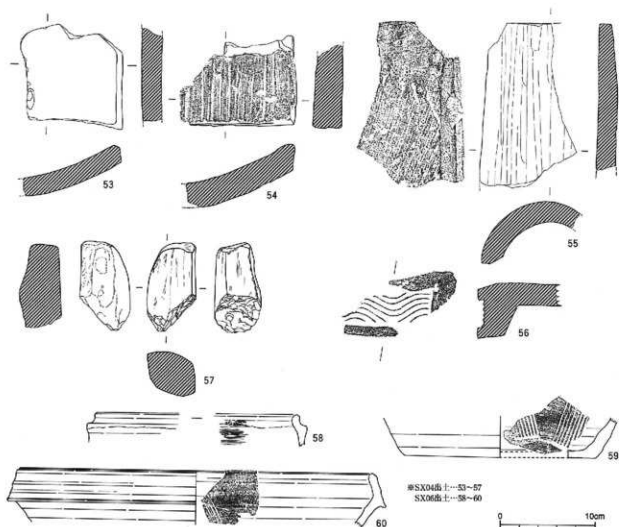


第37图 I区SX03出土遗物实测图(1/4)



第38図 I区 SX04・05出土遺物実測図 (1/4)

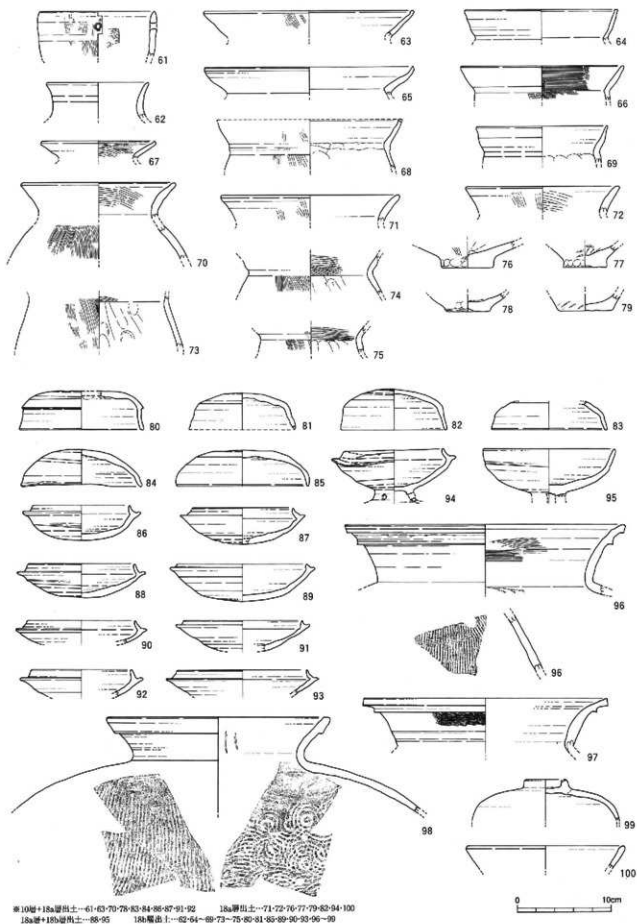
尖り気味の口縁端から1cmばかり下に径5mm前後の焼成前穿孔がみられる。外面は微弱な縦方向のハケ調整、内面はナデにより最終仕上げを行う。屈曲の口頸部を有する62は、短頸壺の一種で、口縁部へと先細りに移行して終わる。V-6様式以降に出現するもので、庄内式期へと存続する。63は庄内式末期の壺の口縁部で、頸部から外上方に直線的にのび、端部をつまみ上げつつ、内側へと折り返し幾分丸みをもたせる。胎土からみて搬入品ではないため、臨地製の土器と考えたい。明るい淡黄褐色の焼き上がりみせる64は、布留式の壺で、頸部に独特の屈曲をもち、口縁端部を丸く内側に肥厚させる。体部は球形となろう。65は紀伊・淡路系の土器で、口縁部を軽くS字状に屈折させ、幅4mm前後の立ち上がり端面を形成する。通常はこの部分に刻目を施すものが多い〔森岡2003〕。明るい褐色の色調を示し、時期は庄内式の前半とみられる。おそらく在地産とみてよからう。丁寧にハケで調整される66も庄内式



第39図 I区 SX04・06出土遺物実測図 (1/4)

前後の臺ないし鉢であろう。67も臨地製の小型庄内式甕で、口縁部は薄く仕上げられ、端部を内折れ気味に立ち上げる。本場の庄内甕の製作技術をよく熟知している点が特筆されよう。68・69は稚拙なつくりではあるものの、布留式初頭に入る在地産の土器で、摂津地域の特徴をよくとどめている。白っぽい色調と二次粘土使用の形跡をみせる70は、西摂平野部産の搬入品であり、遺跡間交流の証左となる甕である。「く」の字単口縁の甕71・72は庄内式併行期の甕であるが、摂津の在地色を示すもので、底部は平底になる可能性が高い。器壁の薄い73の甕は、北四国系の諸特徴を具有するが、臨地製の土器とみなしてよいだろう。胴部内面上半に指頭圧痕が施されている。74・75なども同じ胎土・色調を呈しており、同一個体になるか、もしくは同系になるものと考えられる。用途として甕形製塩土器に蓋然性は大きい。底部分に使用痕は看取できない。底部(76~79)は、畿内第V様式後半から庄内式期前半にかけての所産で、76は壺、77は鉢、78・79は甕と思われる。多くに底部再成形技法〔森岡1977〕が認められ、78・79の2点はドーナツ状の上げ底となっている。以上掲げた赤焼き系の土器は、その大半が在地の「山の土器」(褐色系土器群)〔森岡1980〕で構成されるもので、2世紀後半から3世紀末までの時期幅に入る。一部に4世紀に下降する土器が含まれている。

須恵器についてみると、80~85は杯蓋、86~93は杯身、94・95は高杯、96・97は甕、98は壺で、古墳時代の遺物であるが、99の蓋と100の碗は中世に下る。80は内面に赤色顔料が塗られており、古墳祭祀に用いられたことがわかる。蓋では縁がはっきりしたシャープな造りの80が最も古く、I型式5段階に遡るが、84や85はII型式5段階に下る。一方、杯身は、低く短い立ち上がりを持つものに限られていることから、概ねII型式3段階~5段階のものと言えよう。94は円形の透し孔を持つ低脚の有蓋高杯で、95



第10组+18a组出土--61-63-70-78-83-84-86-87-91-92 18a组出土--71-72-76-77-79-82-94-100
18a组+18b组出土--88-95 18b组出土--82-64-89-73-75-80-81-83-89-90-93-96-99

第40图 I区周濠1出土文物实测图(1)(1/4)

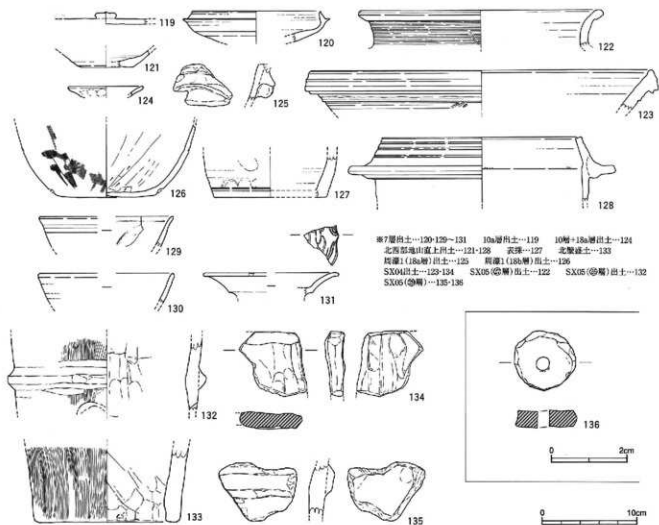
は方形透し孔をもつ無蓋高坏である。96・97は緩やかに反し、口端部直下に突帯を持つ。98は口縁部が肥厚する広口壺の口頸部である。これらはⅠ型式後半段階～Ⅱ型式5段階の範疇で考えることができるので、実年代では5世紀後半～6世紀末と言えよう。99は焼成が極めてあまく、輪高台状のつまみを持つ特異な形態である。100は東播磨系の埴の口縁部で、13世紀に下る。なお、本調査地点において確認された当該期の遺物はすこぶる少ない。

埴輪は、いずれも軟質の土師質焼成だが、黒斑は認められない。101～103が普通円筒埴輪、107～109が朝顔形埴輪である。101～103は器面の保存状態が良く、比較的破片が大きいので周濠1に直接関わるものと捉えている。外面の最下段は一次調整のタテハケにナデ調整で、それより上の段はタテハケの後に原体の目幅が4～5本/cmと広いBd種のヨコハケを施している。内面はユビナデとユビオサエで整形している。101・102は淡橙色を呈し、シャモットないしくサリ礫を含むもので、同一個体かもしれない。103は乳白色を呈しており、調整や突帯の形態は似ているが、ハケメの原体が異なり、別個体である。104～106は内湾状に立ち上がる円筒形で、円筒埴輪とも形象埴輪とも定かではない。胎土にはシャモットないしくサリ礫に加えて白色砂粒を含んでおり、101～103とは異なる。朝顔形埴輪のうち、107・108は104～106に似た胎土で淡橙色を呈し、幅が狭く突出する突帯をもつ大形品である。一方、109は緻密な胎土で器面が橙褐色を呈しており、目の細かいハケ調整を施す。110は透し孔をもつが、扁平なので形象埴輪であろう。なお、胎土は104や107に酷似している。これらの埴輪では、101～108・110が、粗雑な調整で、幾分ざらざらした質感がある。シャモットないしくサリ礫と白色砂粒の多寡はあっても、同一の工房で同時期に同一産地の土を用いて造られた一群と理解することができよう。一方、109は胎土や調整が全く異なるので、同一墳で前者と共存するかは疑問である。このことから、周濠1に本来的に属する埴輪は101～108・110であると見た場合、円筒埴輪の外面調整に、タテハケ→粗いBd種ヨコハケを用いていること、須恵質焼成の個体が含まれないこと、朝顔形埴輪の形態や突帯の様相などから、この古墳の構築年代を5世紀後半と推測できよう。

111～118は、周濠1西辺で集中的に出土した土師の一部である。これらは、直径1.3～2.0cm、長さ5.1～5.5cm、重量7.2～11.0gの同一タイプの管状土師である。胎土は良質で、いずれも土師質焼成である。

このように、周濠1から出土した遺物は、古墳時代の資料に加えて、古墳の築造に先行する弥生土器・土師器が含まれている。さらに、古墳時代についても、周濠1を巡らす古墳に本来的に伴う須恵器・埴輪だけでなく、この古墳に後続する古墳ないし集落に伴う資料をも伴っている。加えて、周濠の最終埋没段階を示す中世の土器類も見られる。

第42図に示したものは、119～123が須恵器、124～126が土師質土器、127が陶器、128が瓦質土器、129～131が磁器、132～135が埴輪、136が石製品（滑石製模造品）である。また、図版48には土師質土器（⑦）、磁器（⑧）、陶器（⑨）を挙げている。119は杯蓋、120・121は杯身、122は壺、123は甕で、119は宝珠つまみを持つⅢ型式の資料であるが、本調査地点ではこの時期の遺物は少ない。124～126は周濠1の上位・中位埋土から出土したもので、124は小皿、125は甕の把手、126は甕の体部である。126は内面をケズリ、外面にハケ目を施した薄手のもので、古墳時代の甕の可能性も残る。127は表採品であるが、15世紀後半の備前焼壺の底部である。128は羽釜でSX02に伴う可能性がある。包含層からの出土であるが、中国青磁は多形で、129・130の碗に加えて、内面に片刃彫りの文様を施す131の腰折れの後花皿（131）も見られる。132・133は円筒埴輪で、備前焼を思わせる堅い焼き上がりで褐色～赤褐色を呈する132が、タテハケ調整のみで仕上げられている。かなり堅い土師質焼成で黄橙～橙色を呈する133は肉厚の基底部外面に丁寧なタテハケを施す。134・135は形象埴輪である。134は板状の造りで、表面はヘラによる面取りが、裏面はナデ調整による凹凸が顕著である。135は幅広で低い突帯をもち、シャモットないしくサリ礫の含有が多く、朱褐色を呈する。132は焼成状況や胎土から、133は出土層位から、周濠1とは別の古墳に伴うものと言える。136は、⑦・⑧とともにSX05の⑨層から出土した古墳時代の滑石製模造品で、直径1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.9gを測る。⑦は小皿の口縁部、⑧は中国製青磁碗の口縁部、⑨は瀬戸美濃焼の天目茶碗体部片で、居館に関わる中世遺物である。



第42図 I区包含層出土遺物実測図(1/4、1/1)

2. II区(第43～46図、図版49～51)

II区からは、土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器などの中世遺物と土師器・須恵器・埴輪といった古墳時代の遺物が多く出土したほかに、鉄製品も出土した。このうち、第43図(図版49)には、池からの出土遺物を、第44・45図(図版49・50)には、滝や溝などの中世遺構から出土した遺物を、第46図(図版50・51)には周濠2関連遺物および包含層出土の遺物を図示している。

池からは、土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦(第43図137～149、第44図152・164、第45図176・179)や土師器・須恵器・埴輪(第46図184・192・194～196)が出土している。これらは池埋土のc層～1層に含まれており、141・145～147はk層を主体とする東部の粘性砂質土から、152・165はe・h層から出土している。ここでは、遺構の帰属年代に直接関わる中世遺物について述べる。

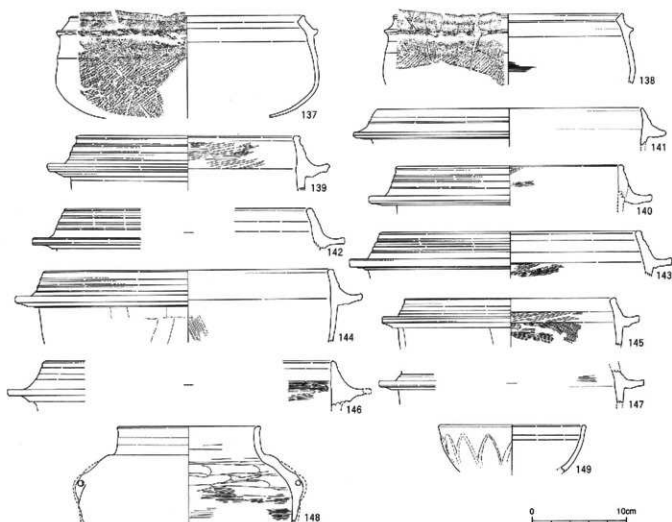
137～140・152は土師質土器、141～148・164は瓦質土器、149は磁器、176は陶器、179は瓦である。137・138は土鍋、139・140は羽釜、152は大皿で、煮炊具はI区の中世遺構から出土した遺物と同形・同時期のものと言える。厚手の手づくね成形皿である152は淡橙色を呈しており、復元口径は12.0cmを測る。口縁部は直線的に外に開いており、ユビオサエ成形後二段ナデを施している。141～147・164は森島分類の河内E・F型式の羽釜、148は茶釜で、いずれも使用による劣化が著しい。148は直立する口縁部から丸みを帯びた体部上半までが残存しており、肩部に環付が認められる。体部外面はナデ調整で、内面は下部にハケ目が施されているが、上部はユビオサエやナデで粗い仕上げになっている。炭素が剥落した部分で観察すると、胎土は5mm大のチャート、石英、シャモットなどの砂粒を多く含む粗い粘土

で、橙褐色を呈している。これは、炉にかけて茶湯を沸かす道具であるので、当地において茶の湯が嗜まれていたことの決定的な証拠と言える。また、龍泉窯系の遼弁文青磁碗である149も茶の湯に関わる資料である。176は備前焼の壺で、短く直立する口頸部に丸く張った肩部を有する。口縁端部の玉縁は形骸化し、肩部は灰かぶりになっていてヘラ描きの沈線が巡り、体部下端まで自然釉が垂れ下がっている。乗岡実氏から、本来は肩部に耳が付いていた壺であろうとの指摘を受けており、茶壺として用いたものかもしれない。179は平瓦である。

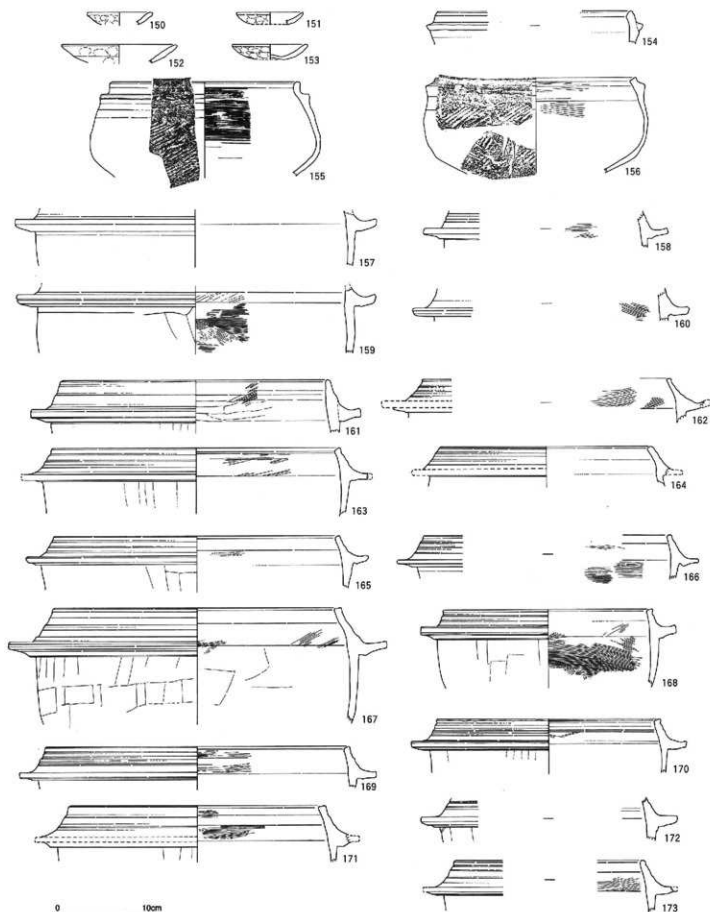
滝から出土した遺物は、遺構の性格上残存率が低く、状態も良くないが、土師質土器・瓦質土器・陶器（第44図155・158・169・173、第45図174・181）や埴輪が見られる。155・181は土師質土器、158・169・173・174は瓦質土器である。155は極めて焼成の良好な土鍋で、断面三角形の胴部から立ち上がる口縁部は短く外反しており、長谷川彌年Ⅷ期のものと言える。158・169・173は羽釜で、焼成のあまい174は、一見東播系の須恵器のように見える外面タタキ調整の甕である。肩のあまり張らない器形で、頸部で屈曲し、短い口縁部の端部を丸く収める。和泉産の平底の甕と考えられる〔菅原正明1990〕。181は甕の把手であろうか。

滝からは、土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪・瓦などが出土している。

SD11の上層からは、瓦質土器・陶器・埴輪が（第45図178）、下層からは、土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器と埴輪が出土している（第44図168、第46図204）。168は、炭素の吸着が見られず灰白色～淡黄橙色を呈するために土師質土器にみえる羽釜であるが、焼成は良好で、白色・灰色砂粒を含む胎土は緻密であるので、瓦質土器と捉える。ほぼ直立する口縁部は短く、外面をケズリ調整、内面をハケ目調整



第43図 II区池出土遺物実測図（1/4）



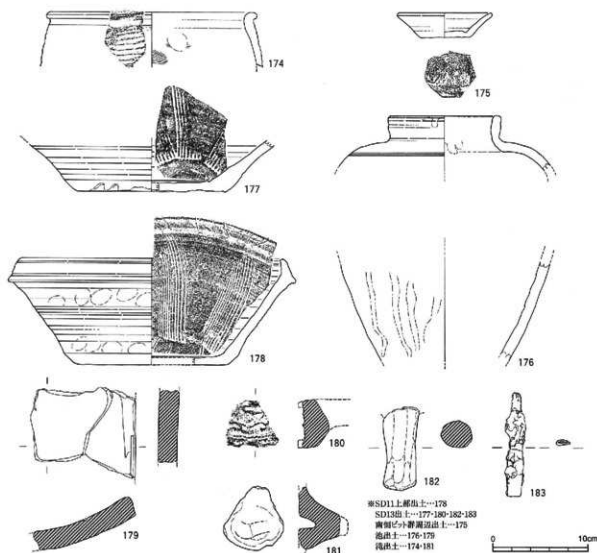
※ 施 (c+白) 土土…152-164 瑞土…158-169-173 瑞土…155 SD11下部土…168
 SD12土…156-170 SD13土…150-167-159-161-163-165-166-171 SD13上部土…153
 丹波の瑞土…167 第7トンネル土…154-172 南面ビナ群瑞土…151-160

第44図 II区中世遺構出土遺物実測図(1)(1/4)

で仕上げる体部の上部が厚くなっているのも、森島分類の河内H型式の羽釜であろう。178は、砂粒の多い山土を用いており灰色を呈する備前焼播鉢である。口縁帯としての発達が不十分な口縁部の形態から、乗岡幅年中世4b期～5a期の古相と考える。なお、204は周濠2関連遺物として扱う。

SD12から出土した遺物は、少量の須恵器・土師質土器・瓦質土器である（第44図156・170）。外面の煤化が著しい156は土師質土器、170は瓦質羽釜である。

SD13から出土した遺物は多彩で、須恵器（第46図206・208）とともに、土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・鉄製品が認められた（第44図150・153・157・159・161～163・165・166・171、第45図177・180・182・183）。ここでは、中世遺物について記述する。150・153・157・182は土師質土器、159・161～163・165・166・171は瓦質土器、177は陶器、180は瓦、183は鉄製品である。150・153は手づくね成形の小皿で、二次焼成によって黄灰色になっている150は、灯明皿として使われたことがわかる。淡橙色を呈する153は完形に復元できた。口径7.6cm、器高1.6cmの浅い皿で、底部中央がわずかに上がる「へそ皿」である。157と瓦質土器はいずれも口縁部がわずかに内傾し、二、三段の緩やかな段をもつ羽釜である。胎土をみると、171だけが肌理の細かい灰白色粘土を胎土としていて炭素の吸着がよいが、他の瓦質羽釜は、砂粒を含む淡褐色や黄褐色の粗いもので、土師質土器とみなした157の胎土とほとんど変わらない。182は土塊の脚部と考えられる。177は陶器で、山土を用いた備前焼播鉢である。180は軒平瓦で、磨滅が著しいが、辛うじて瓦当に唐草文が認められる。183は鉄製品で、残存長10.8cm、幅1.6cm、厚さ0.6cmを測る細長い板状の形態である。折れた部分の断面観察によって、厚さ1.0～1.5mmの鉄板を折



第45図 II区中世遺構出土遺物実測図(2)(1/4)

り曲げて断面が水滴状になるように整形しており、中空である。鉄板の合わせ部分は鋭い刃になっているようなので刀子と推定した。このほか、中国製青磁碗の細片も出土している。

SD13より南側のピット群周辺では、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦が出土している（第44図151・160、第45図175）。151は土師質土器、160は瓦質土器、175は陶器で、151は153に似た小皿、160は羽釜、175は備前焼の皿である。175の底部外面には糸切り痕が残るが、この底部片はⅠ区7層から出土しており、ピット群周辺で出土した体部と接合できた。このことから、ピット群直上層がⅠ区の7層に対応する可能性も考えられる。

井戸の肩部においては、瓦質土器（167）が出土している。口径30.0cmに復元できる大振りの羽釜で、他の中世遺構から出土したもののより口縁部の内傾度が高い。胎土は砂粒をあまり含まないがやや粗い灰白色の粘土で、炭素の吸着状態は極めて良く、器面の保存状況も良好であるので、井筒として用いられたとみることができよう。

なお、第7トレンチからも、土師質土器の154や瓦質羽釜の172といった中世遺物が出土している。

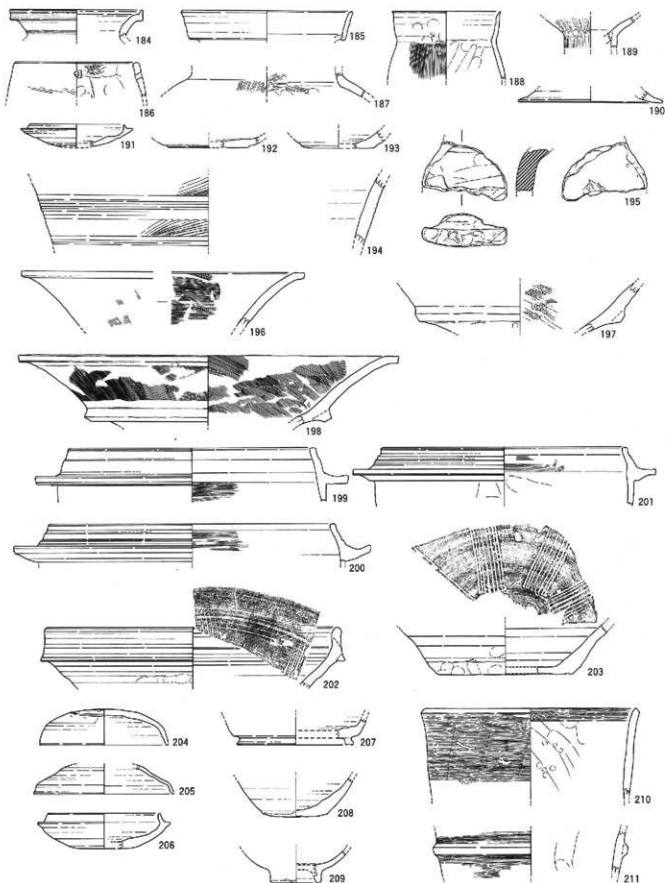
このように、Ⅱ区の池や溝（SD11・12・13）といった中世遺構から出土した遺物や、ピット群周辺から出土した遺物は、15世紀後半～16世紀前半を中心とする。ただし、井戸の肩部において出土した瓦質羽釜の167は、口縁部の内傾状態や焼成状況から、他の遺構出土の羽釜より若干先行するであろう。また、滝から出土した土師質土器の155や瓦質甕の174は、16世紀前半に下り得るものである。

第46図の184～204は、周濠2とその直上の遺物集中部、さらに周濠2を切り込む池やSD11、攪乱から出土した遺物である。ここからは、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪が出土し、その最上部からは土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器や焼石が出土している。184～190は弥生土器ならびに土師器、191～194・204は須恵器、195～198は埴輪、199・200は土師質土器、201は瓦質土器、202・203は陶器である。なお、出土遺構や層位は第46図に付記している。

184～187は壺、188は甕、189・190は高杯である。短い頸部から直立する口縁部へと移行する184は、外面を回転板目調整して仕上げる特徴的な土器だが、胎土は在地のもので、明るい褐色の焼成を示す。口縁端部は、上方にやや内湾ぎみに立ち上げて、内面にはヨコナデ痕をとどめる。弥生後期の範疇で理解し得るものであるが、庄内期に下る可能性もある。有段口縁をもつ185も三条岡山遺跡では初出の資料で、二重口縁の壺とみだが、正確な器種は定かではない。紐通し孔を持つ186はもう少し傾く弥生土器無頸壺の口縁部であろう。舞台が付くかもしれない。胎土からみて搬入品であるが、大坂平野のものではない。暗褐色を呈する内面には指頭圧調整をとどめる。187は大型壺の頸部である。器壁は厚く、内面は黒化する。球形体部に付くものとみられ、庄内式期に下る可能性がある。188は甕形の製埴土器で、内面に剥離痕がみられ、使用痕跡をとどめている。二次焼成を受けて脆弱化した薄い器壁も特徴の一つで、おそらく庄内式段階のものとみられる。類品として、月若遺跡（第28地点）に良好な煎煎タイプの製埴土器があり、それを参考にすれば、おそらく尖底に近い底部が付くと思われる〔森岡・木南彌1997〕。褐色を呈する189は充墳法の底部をもつ大型高杯の脚部上端接合部であろう。また、190は胎土・色調の類似性から189の脚部と考えられる。

191・192は杯身、193は壺底部、194は甕の口頸部、204は杯蓋である。192は7世紀以後に下るものであり、時期の特定しやすい191は立ち上がりが短く、口径の小ささや器高の低さから、Ⅱ型式6段階のものといえる。204は復元口径13.4cm、器高38cmを測り、Ⅱ型式5段階といえる。

Ⅱ区で検出した埴輪片に、黒斑は見られない。土師質焼成のものが主体を占め、下段の表土直下から出土した円筒埴輪片1点のみが半須恵焼成であった。195は形象埴輪、196～198は朝顔形埴輪の口縁部や頸部で、いずれも焼成は良好である。ナデ調整で仕上げている195は、弧状の破片であるが、欠損が著しく形象埴輪の種類や部位はわからない。196～198の196・198は、ともに大きく外反する口縁部の端部をナデ調整によって水平に屈曲させ、直立する端面を有する。内面・外面ともに12～14本/cmの目の細かい原体を用いて密にハケ目調整を施す。口縁部突帯は、197が磨滅のために低く見えるものの、198は幅が広く突出度が高く、外面のタテハケ調整後に貼り付けてナデ調整されている。これらの胎土はシャモットまたはカサリ礫や白色砂粒の微小粒子を含む良質の粘土で、橙～黄橙色を呈しており、単一



※土段東部遺物集中部出土…191・193・197・199～202 周濠2出土…185～190・198 上段5層出土…205・207・209
 池出土…184・195・196 池(c層)出土…194 池(h・i層)出土…192 SD11下部出土…204 SD13出土…206・208
 東部浅瓦出土…203 第2遺物面鏡瓦出土…211 第7レンガ3層(田灰土)…210

第46図 II区周濠2および包含層出土遺物実測図(1/4)

の産地から供給されたものである。なお、周濠2からは朝顔形円筒埴輪が出土しているが、普通円筒埴輪に弁別できる明確な破片は確認できなかった。

199～201は羽釜で、Ⅱ区の中世遺構から出土したものに通じる。備前焼鉢鉢の202・203はともに光沢のある田土を用いており、同一個体の可能性がある。土質と202の口縁帯の形状から、乗岡編年の中世5b期に下と判断できる資料である。

このほか、Ⅱ区から出土した205～208の須恵器、209の磁器、210・211の埴輪を図示している。さらに、図版51に陶器2点(㊹・㊺)を掲げている。

205は杯蓋、206・207は杯身、208は壺底部、209は中国青磁碗、210・211は円筒埴輪、㊹は折縁皿、㊺は備前焼壺である。205はSD11出土の204より時期の下ったⅡ型式5段階に、206は遺物集中部出土の191より古いⅡ型式4段階に、207は高台の形態からⅢ型式に比定できる。また、208はSD13上部から出土したものであるが、報告書執筆時に193と接合関係を有するかが判明した。厚手の丸みを帯びた底部で、内面に自然釉の付着が認められる。焼成状態は良好で、胎土も精良であることから6世紀代のものであろう。209は龍泉窯系の粗製の碗である。210と211は、顕著な混和材を含まないやや粗い粘土を用いており、良好な土師質焼成で、黒斑を有さない。210は、一見すると円筒埴輪とは思えないほど薄手の造りで、外面は1次調整のタテハケの後、突帯を貼り付け、やや目の粗い6～7本/cmの原体を用いてBd種のヨコハケ調整を行っている。内面はユビオサエとナデで仕上げている。口縁部はわずかに外反し、端部はナデによって丸みを帯びた外傾面を有する。211はハケ調整の原体が210と一致しており、同一個体と推測できる。突帯は低い台形状を呈する。210と211は平面的には周濠2に近接する位置から出土しているが、出土層位から周濠2との関わりの有無を断定することができない。㊹は、上段直上から出土した江戸時代前期の唐津焼折縁皿で灰釉が掛かる。この遺物の存在から、第1遺構面を中世末～近世の遺構面と考えている。また、㊺は、遺物集中部から出土した備前焼壺の体部片である。

ところで、周濠2から出土した須恵器は、その一部が周濠1の須恵器と時期的に重なるが、より新しいものを含んでいる。一方、朝顔形埴輪(196～198)は、焼成状態やハケ目調整、突帯の形状を見ると、5世紀後半に比定できるため、須恵器と朝顔形埴輪では年代が合わない。また、195～198と210・211を比較すると、195と210・211の胎土は似ているが、196～198は明らかに異なる。しかし、焼成状態やハケ目調整、突帯の形状を見ると、210・211は5世紀後半に比定できることから、時期的には同一古墳の埴輪としても矛盾しない。

3. Ⅲ区・Ⅳ区(第47～50図、図版52～54)

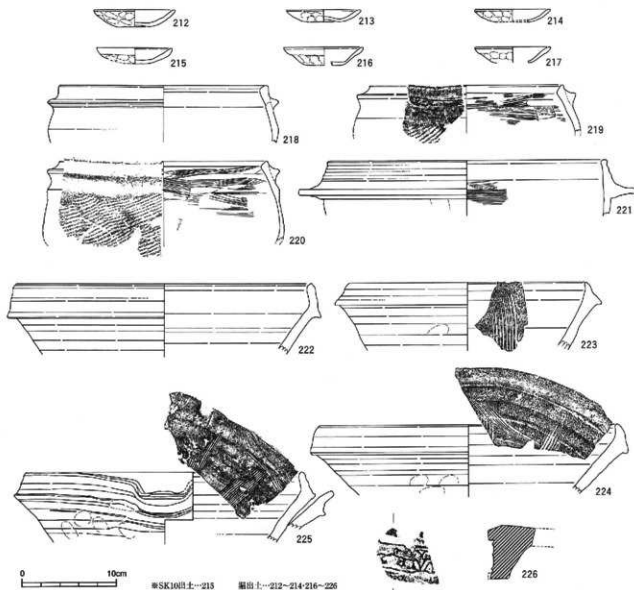
Ⅲ区・Ⅳ区からは、堀を中心に土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦などの中世遺物が、周濠3を中心に土師器・須恵器・埴輪・土製品といった古墳時代の遺物がまとまって出土した。さらに、SK08から弥生土器が出土しているほか、周濠3や堀からも弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土している。第47図(図版52)には堀からの出土遺物を、第48・49図(図版52～54)には周濠3や包含層から出土した遺物を、第50図(図版54)にはSK08からの出土遺物を図示した。さらに、図版54には、Ⅳ区堀の土橋下位盛土から出土した礫の写真も掲載している。

堀からは、土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪・瓦が出土している(第47図212～226、第49図256～258)。これらは、堀埋土のうち、炭化物の流入している層から出土したものが多く、215は堀の床面で検出されたSK10から出土している。212～220は土師質土器、221は瓦質土器、222～225は陶器、226は瓦である。また、256・257は須恵器、258は土師器である。

212～217は、直径7.8～8.6cmを測る手づくね成形の小皿である。いずれも、乳白色～淡橙色を呈しており、216のように器高1.9cmを測り、形の整ったへそ皿も見られるが、総じて低平で形が崩れたものが多いことから、15世紀後半頃のものといえよう。218～220は播磨形の羽釜形土壺で、219・220は通常より胴の位置が高く、口縁部端部の内傾面が明瞭であるといった特徴があるが、概ね長谷川編年Ⅶ期とみることができる。221は断面が褐色を呈する粗い胎土を用いた羽釜で、口縁部がほぼ直立していることから15世紀後半以後のものといえる。222～225は備前焼鉢鉢で、焼成や色調、口縁部形態から、灰色を

呈する223が乗岡福年中世4b期に、褐色を呈する222・224・225が中世5b期に相当すると言える。また、図版54㉔は、Ⅳ区西壁沿いサブトレンチにおいて堀埋土から出土した備前焼の壺底部で、胎土や焼成状態から15世紀後半頃のものであろう。226は、唐草文のみられる軒平瓦片である。ちなみに、当調査地点は、周辺の調査地点と比べると土師質皿の出土量が乏しいが、その中にあって、堀については、他の遺構より土師皿の出土量が多く、幾分組成が異なる。堀に関わる遺物は、15世紀後半の年代を示すものが多く、Ⅰ・Ⅱ区の中世遺構出土の遺物と時期的に併行関係を有していることから、Ⅰ～Ⅳ区の中世遺構を、居館に伴う一連の遺構と判断した。なお、堀底の遺構出土遺物と堀出土遺物、土橋の盛土出土の遺物は、その量が限られているために、明確な時期差を読みとることは出来なかった。ところで、図版54㉓は花崗斑岩の岩片、㉔～㉖は層理状の縞がみられる灰色の泥質砂岩である。㉔は円磨度があるが、その他は剥離した岩片で、㉕と㉖が接合関係を有する。これらは拳大以下のもので、最も大きい㉕が、長辺10.5cm、短辺8.0cm、厚さ4.0cmを測る。

周濠3では、主に中位埋土から、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・土製品といった多くの遺物が出土している（第48・49図227～254）。227～249は埴輪、250～252は弥生土器ないし土師器、253は須恵器、254は土製品である。その組成を見ると、周濠1・2に対して、中世遺物の混入が極めて少なく、他の周濠より早くに埋没したか、周濠3より上位に中世遺物を放出するような遺構が少ない立地環境であっ



第47図 Ⅲ区堀出土遺物実測図（1／4）

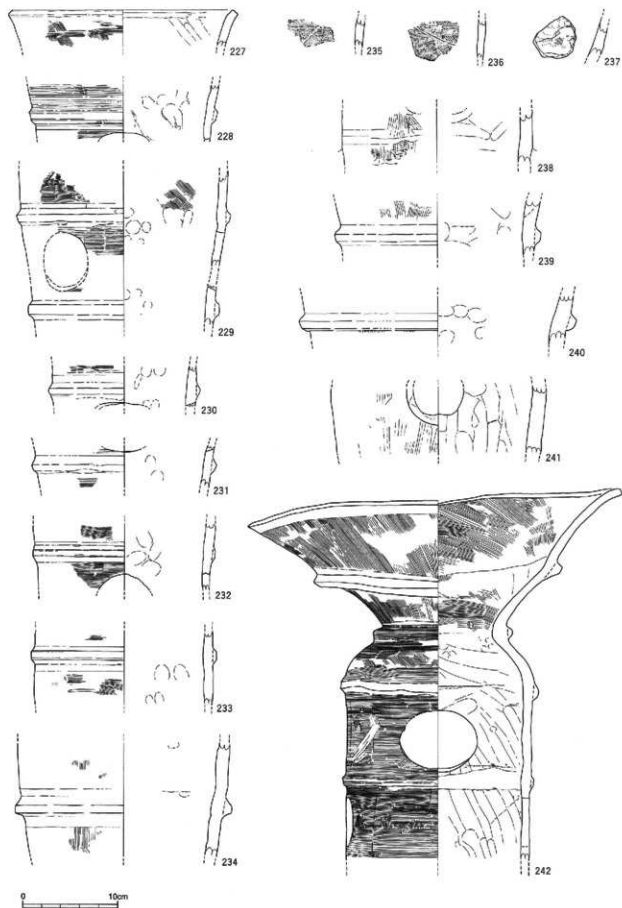
たと推定される。また、古墳時代の資料については、周濠3を伴う古墳に直接関わると思われる埴輪が大量に出土しているものの、土師器・須恵器は極端に少ない。

埴輪はいずれも黒塗を有さず、焼成状況の良好な土師質焼成を基本とする。227・245が筒状を呈する埴輪で、口縁部の残る227は普通円筒埴輪、242は朝顔形埴輪であり、228・239は円筒埴輪とみて大過なからう。一方、240・241・243・245は周濠1で確認したような朝顔形埴輪ないし形象埴輪の可能性が考えられる。これらは、胎土や色調から、①シャモットまたはクサリ礫や灰色・白色の極細砂を少量含む良質の胎土で橙色を呈する227・233・235・236・242、②色調は①と変わらないが、シャモットまたはクサリ礫や白色砂が5mm大のものまで含み、量も多い234・238・239、③乳白色～灰黄色を呈し、灰色・白色・褐色の細砂を多く含む237、④橙色～黄褐色を呈し、シャモットまたはクサリ礫や黒色・白色・灰色の細砂を多く含んでいてざらついた質感の240・243・245、⑤淡橙色～淡褐色を呈し、シャモットまたはクサリ礫や白色・灰色の極細砂と石英を多く含む241に分けられた。ただし、混和材の量や粒の大きさに違いはあるものの、その組成に差異が認められないことから、同一産地の胎土を用いた埴輪群と考えられる。胎土の違いは、調整技法や器壁の厚さ、形態の違いと連関している。

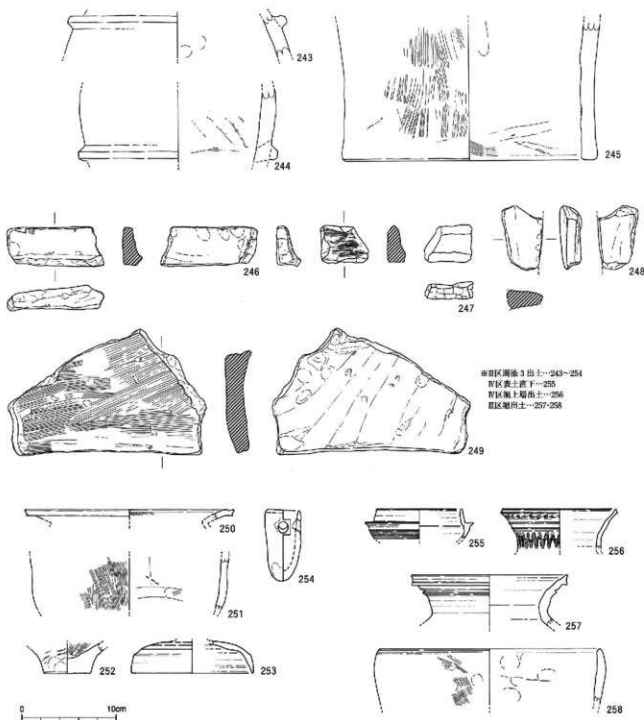
①はやや薄手の傾向があり、突帯は低平で、242を除いて突帯面が下方にむかって斜めにすばまる。227の口縁部は緩やかに外反し、端部をナデ調整によって外方向に屈曲しており、端面は外傾する。口縁部の227・235・236は、一次調整のナメハケの後、幅の狭い原体による粗いヨコハケを施している。なお、235・236は外面にヘラ描き文様が見られる。228・233の外面調整は、一次調整のタテハケの後、B種ヨコハケで仕上げてあり、器面の残存状態の良い229・232では静止痕の弱いBc種が観察できる。ハケ目自体は、228が7～8本/cmのものを用いているが、229・233は、より目の細かい9本/cmのものを用いている。内面はユビオサエやユビナデを用いるものが多いが、229はわずかにハケ目が見られる。朝顔形埴輪の242は、残存率が高く、口縁部から肩部突帯よりさらに2段下まで復元できた。焼成状態は良好で、頸部以下には半須恵質焼成で灰褐色を呈する部分もみられる。ラッパ状に開く頸部から口縁部は歪みが見られ、口縁部と頸部の境の屈曲は緩やかで、二重口縁の表現はあまい。肩部や円筒部の突帯は小振りで低平である。口頸部の調整は幅2.5cm程度で8～9本/cmの目の原体を用いており、外面はタテハケの後、突帯をナデ付け、口縁端部にヨコナデを施している。内面は、頸部下半部に静止痕の見えるヨコハケ、上部にナメハケを施してから、口縁部を貼り足し、口縁部にナメハケを施している。一方、肩部は一次調整のナメハケ、円筒部は一次調整のタテハケの後に突帯を貼り、7～10本/cmと目に粗密のある原体を用いて、Bc種といえるヨコハケ調整を行っている。なお、円筒部には円形の透し孔があり、最高段とその下の段では、その位置が直角近くにずれている。

②は、①に比べて厚手で、断面台形の突帯は比較的高い。外面は5～7本/cmの粗めの原体を用いたタテハケ調整で、ヨコハケは認められない。また、内面はユビオサエとユビナデを併用している。③は7～8本/cmの原体を用いたタテハケ調整のみが観察できる。内面は半須恵質焼成で、ユビナデ調整がみられる。④は、②よりもさらに厚手で、突帯は方形に突出している。磨減が著しく、調整の観察が難しいものが多いが、底端部である245は、一見平行タタキに見えるような3～4本/cmの幅広で深い原体を用いたタテハケ調整が認められる。⑤の241も、器面が荒れているが、かすかに④に似たタテハケが観察できる。また、内面は、ヘラケズリを思わせるような凹凸の著しい縦方向のナデで仕上げている。

246～249は板状の形象埴輪片である。これらの胎土は、褐色や橙色、さらに乳白色を呈するシャモットの含有量が多く、白色砂粒の含有もかなり多い良質の粘土で、円筒埴輪の①～⑤の埴輪胎土と混和材が共通する。246・247は幅4cmほどの短冊状の破片で、断面形はL字状を呈する。短冊部分の上面とみられる面にわずかであるが目の細かいハケ調整が認められる。家形埴輪の器台と考えられる。248は246・247に似た破片であるが剥離部分の形態を見ると、他の部材にT字形に接合されていたようである。また、剥離面に対向する辺は斜めになっているので、蓋形埴輪の飾り板かもしれない。249は表面に幅2cmで、5～6本/cmの木目をもつ原体によるハケ調整を施し、裏面はナデ調整で仕上げている。縁辺部はナデ調整を行っており、断面形を観察した部分の上端剥離部分は、他の部材に続くように直径8cmほどの弧を描いている。その形状から、馬形埴輪の障泥の破片と見ておきたい。



第48图 Ⅲ区周濠3出土文物实测图(1/4)



第49図 III区周濠3および包含層出土遺物実測図（1/4）

250は、土師器甕の口縁部である。把手の付く奈良時代頃のものであろう。明るい淡橙色の焼き上がりで、胎土も精良である。分厚い器壁の251は、甕の残欠で、古墳時代中・後期に属する。内面は、弱い指頭圧調整の後、ナデ。外面は、縦方向のハケで仕上げる。252は、弥生後期型の甕の底部で、タタキ成形を加えたものである。第V様式でも後半に入る。

253は杯蓋で、復元径は12.8cmを測る。形骸化した段がみられるが、口縁部は丸みを帯びており、Ⅱ型式2段階に比定できよう。

ほぼ完形の状態出土した254は、細長いコップ形をしており、小振りながらイイダコ壺と想定できる形態である。口径3.3cm、器高7.6cm、穿孔径1.1cmを測る。胎土は、シャモットまたはクサリ礫と花崗岩に起因する長石・石英の微小粒子を含む良質の粘土で、在地産と見ることができる。

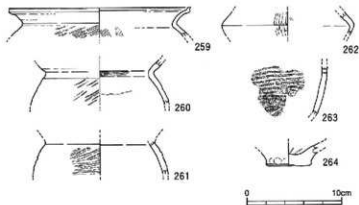
包含層から出土した遺物では、255がⅣ区表土直下から、256～258が堀埋土から出土したもので、255が須恵器の有蓋高杯、256が須恵器の壺、257が須恵器の甕、258が土師器の口縁部である。255はほぼ直立する高い口縁部をもち、体部外面にカキ目が施された丁寧な造りで、方形透し孔をもつ低脚段階のⅠ型式5段階に比定できよう。256は緩やかに外反する口縁部で、クシガキ波状文やナীবな文線が飾り、端部は丁寧なナデを施し、立ち上がる。257の口縁部は、頸部から大きく外反しており、直立する端面はナデ調整によって上下に拡張している。Ⅰ型式後半からⅡ型式前半に比定できよう。内湾する口縁部の端部を尖り気味に丸める258は、シャモットを顕著に含み、製塩土器の作りに近いが、未使用である。Ⅰ区周濠1から出土した土師ととも254や258の存在から、三条岡山の住人が、標高50mの高台であるにもかかわらず、海と深い関わりのある生活を送っていた様子がうかがえる。

このような出土遺物の様相から、埴輪を基に周濠3の年代を比定すると、その焼成状態から、竈竈導入後の5世紀半ば以降に下ることがわかる。また、朝顔形埴輪も含む円筒部分にBc種ヨコハケが多用され、内面はユビナデとユビオサエで仕上げられていることから、Bc種ヨコハケ採用後の5世紀半ば以降であることもわかる。さらに家形埴輪と馬形埴輪を伴う形象埴輪群の存在から、周濠3の構築は5世紀後半頃と考えることができよう〔一瀬2003、一瀬・十河・河内2008、植野2008、加藤2008、川西1978、高橋1994、坂1988・1994、森下・廣瀬2003〕。この場合、包含層出土遺物として扱った255・256が年代的に整合性をもつ資料である。

SK08からは、弥生時代後期後半の土器が出土している(第50図259～264)。259～261は甕、262は壺、264は鉢である。叩き上げ成形の259は、口縁部全体を比較的丁寧にヨコナデ調整し、端部をつまみ上げ、外端面に垂直方向のシャープな面取り調整を加えるもので、V-5・6様式に比定できる後期後半の土器である。細筋のタタキで成形される260は、内面のヘラオサエ調整を横方向とするなど、新しい様相がうかがえる。261と共に後期後半に下る中型の甕であろう。壺の体部262は、外面にヘラミガキが看取され、脚台の付く無頸蓋が想定可能である。褐色の焼成で、胎土も良い。263は大型のタタキ甕の破片で、中程以下、下半を占めるものであろう。264は鉢の底部。V-5様式以降に下る。これらの土器は少量であるが、これまでの出土資料に照らして、2世紀後半を中心とする生活跡が周辺一帯に存在していることを示唆している。

以上のように、当調査地点からは、多種多様の遺物が大量に出土しているが、とくに、古墳時代中期の埴輪は、今回確認された3基の円墳の年代を決める重要な根拠となるので、ここで検討を加えたい。

周濠1～3において検出された埴輪は、いずれも従来の調査で知られていた埴輪と同様に、5世紀後半頃に比定できる〔森岡2005〕。ただし、それぞれの埴輪を比較すると、多少の差異が認められる。周濠2の朝顔形埴輪は、土質や形態をみると、周濠1に直接関与すると判断した107・108の朝顔形埴輪とは全く異なっており、むしろ、周濠1に伴わないと判断した109や、周濠3出土の朝顔形埴輪(242)に似ている。ただし、口縁端部やハケ目、突帯を比較すると、242よりも周濠2出土のものの方がより丁寧に整った造りと言えることから、周濠2が周濠3に先行する可能性がある。周濠2は、その位置を鑑みた場合、周濠3と同一遺構になるとは考えられないので、朝顔形埴輪の類似性から、時期の近い古墳が近接していた状況を復元したい。一方、周濠1から出土した107・108は、周濠2・3の朝顔形埴輪とは、胎土や形態が大きく異なる。また、円筒埴輪についても、周濠1と3では胎土や調整がかなり異なる。ここでは、周濠1の埴輪は周濠2・3の埴輪に対して、より退化傾向にあると捉えて、周濠1は周濠2・3より幾分時期の下るものとする。



第50図 Ⅲ区 SK08出土遺物実測図(1/4)

第4章 まとめ

第1節 時代毎の概要

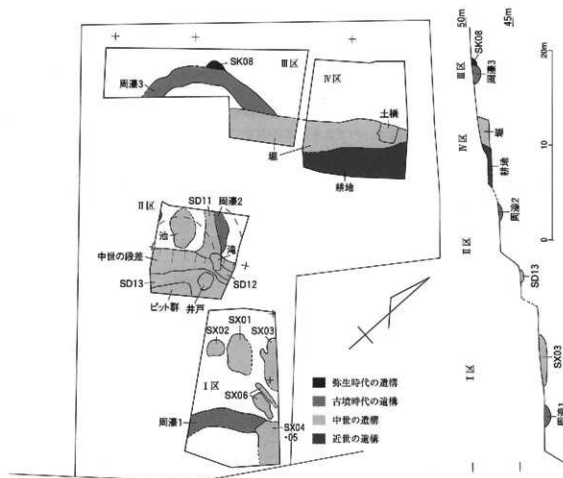
本調査地点は、第1地点の調査以来データが蓄積され、予察されてきた、弥生時代後期の準高地性集落、古墳時代中期の古墳群、15世紀後半を主体とする中世居館に関わる遺構が一挙に検出された。ここで改めて、時期毎にみた遺構の分布について概観する（第51図）。なお、この図では、主たる遺構について、検出遺構面に関わらず、遺構の平面および立面の配置を時期分けして模式的に示している。

当該地で検出された最も古い遺構は、Ⅲ区北部で確認された弥生時代後期の土坑（SK08）である。包含層から同時期の遺物が出土しており、本来は他にも同時期の遺構が存在したと考えられるが、SK08以南が、後世の土地利用によって大きく改変されているため、当該期の遺構は1基のみであった。

SK08南部を切るように、古墳時代中期（5世紀後半）の古墳周濠（周濠3）が検出された。また、Ⅲ区より1段下がったⅡ区上段では、周濠3と極めて近い時期の構築と推定される周濠2の存在が推定された。さらに、当該地南端（Ⅰ区南部）にも、5世紀後半の周濠1が確認された。これらはいずれも南半分を既に削平され、墳丘を失いつつも傾斜面に古墳群が営まれていた様子がうかがえる。

Ⅲ区で検出された周濠3を切るようにして、中世の堀が検出された。この堀は、Ⅳ区にも延びているが、Ⅲ区では既存建物の建築により、Ⅳ区では近世に下る耕地によりその南肩部を失っている。この堀と同時期で共存すると判断した遺構は、Ⅳ区より1段下がったⅡ区上段とⅡ区下段に展開する庭園（池・滝・溝・ビット群を伴う）と、それよりもさらに下った位置にあるⅠ区の遺構群（SX01～06）である。

なお、遺構は確認出来なかったが、奈良時代や中世前期の遺物も少量出土している。



第51図 調査区遺構配置概念図（1/400）

第2節 準高地性集落としての三条岡山遺跡

三条岡山遺跡において、弥生時代の遺物が確認されたのは、昭和35年の遺跡発見時点に遡るが〔熊田1960、村川・森岡1976〕、その後、遺物のみならず、遺構が存在することも判明して〔森岡編1979〕、遺跡としての性格を見極める必要性が出てきている〔森岡編2005〕。第19地点においても、弥生時代後期後半の土器が含まれる土坑が検出されており（第3章第3節）、急斜面地にかかる立地ではあるものの、集落としての営みがあったことは承引されてよいだろう。翻って本地点の特性を顧みるに、第一は水田稲作の可耕地には不適当なため、大阪湾を視界に取り込める眺望の良さが高げられる。第二には、盛行時期が比較的限定され、弥生時代の後期後半～終末期（2世紀後半～3世紀初め）に比重があることを指摘でき、六甲山系前山の前脈に多い高地性集落との関係性がここで改めて問われることになる。

かつて、六甲山系の高地性集落の在り方について検討を試みたことは旧聞に属するものと思われるが〔森岡1974〕、その時提唱した二つの集落類型は、本遺跡の動態を推考する上でも今なお有効と考えられる。第一の類型は、「開発型高地性集落」と呼んだものであり、一般的に見てその立地は比高の小さい山腹斜面地が中心であり、その存続時期も中期中葉～後半に偏りをみせるものが多く、基本的には後期には連続しない。近傍の坂下山遺跡はその典型的な例の一つである〔村川・森岡1976〕。第二類型は「発展型高地性集落」と呼称したものであり、標高200mを前後する高所へも居住空間を広げたものであって、後期初頭以後も持続し、後期中頃をもって終息する。これらのうち、第二類型の方は、中期中葉や後半に始期を持つ遺跡でも後期前半へと持続し、長期間の経営がみられること、堅穴建物の棟数も基本的には多く、少なくとも単位集団〔近藤1959〕、基礎集団〔若林2009など〕以上の居住者の占有が見込まれることなどを大きな特徴としている。会下山遺跡においては、50年振りに行われた確認調査によって、こうした集団規模を超える展開であることを教えている〔芦屋市教育委員会2009b〕。

類型二者には、明らかに多くの相違点があり、加えてそのあり方も、六甲山系高地性集落の中ではより明確化しつつある。これらに対して、三条岡山遺跡のもつ様相は、二者とも大いに違いが認められる。なんと言っても、六甲山系高地性集落に趨勢を占める後期中頃（V-3）までの土器は保有せず、後期後半（V-4以降）～庄内式期（VI-1～）にその盛行の比重があり、第19地点では布留式段階期の土器も少量出土して、間欠的な継続を示している。また、三条岡山遺跡やその周辺遺跡では、一部に外来系の土器（中部瀬戸内～北陸・東海）を含み、交流の広域性は、第一・二類型の高地性集落よりも地域的には一層広い傾向にある。さらに、同時期における近畿圏の高地性集落の分布状況では、淀川水系三島地域の一部、枚方地域の一部、木津川水系の一部、近江地域の一部などに、その地域的偏在性が濃厚に露呈している。ここまで述べれば、三条岡山遺跡の立地環境が、たとえ広義〔小野1984など〕、丘陵性〔石野1973〕、Bタイプ〔都出1974〕の範疇に入ろうと、典型的な高地性集落と言えないだけでなく、存続期間もある種孤立した位置付けになることは否めない。

そこで、改めてこの遺跡の発信する性格や役割について関説するなら、近傍の低位集団自体が該期に移動の気配をみせており、山芦屋遺跡や城山南麓遺跡（中期後半～後期前半）など原状地上位の集落遺跡から下位の遺跡群（寺田・月若・芦屋廃寺・三条九ノ坪遺跡などの諸遺跡〔森岡1988a〕）への動きが看取される。第三類型とした準高地性のかかる集落は、こうした動きに逆行する高位志向集団の温存を裏づけるものであるが、土器の検討からは、2世紀初頭以前の会下山・城山両遺跡の盛行期間とも全くオーバーラップしない年代関係で出現した集落と考える。該期は中国史書に言う後漢恒帝・靈帝在位年間にも比定される「倭国大乱」「倭国乱」期と如実に触れ合うものであり〔『三国志』魏書東夷伝倭人条、『後漢書』倭伝など〕、全国的な弥生集落変遷史の上でも一つのエポックをなす時期である。すなわち、近畿地方では、高地性集落の衰退する地域と出現する地域が明瞭に区分できる段階に相当し、表六甲の地域は紀伊北・中部、大和南部地域などと並んで、まさに前者のモデルとも言うべき消長を探る具体層を提示している。さらに、重要なことは、本遺跡から間断期を挟んで布留式段階の古墳時代前期集落も顕在化しており、東方至近の三条会下遺跡〔森岡2008a〕などの実例を含め、この種類が増えることによって、新たな検討課題も投げかけているのである。

第3節 三条岡山古墳群の墳形・規模・年代・立地

本発掘調査において、3条の古墳周濠（周濠1・2・3）を検出した。これらは、いずれも北側部分しか残っていないが、すべて円墳に伴うものと判断した。これらの周濠の様態から、本来の墳丘はその基底部で直径10～13mとみられ、石材の検出がきわめて乏しかった様相から、葺石を伴わないことと埋葬主体が木棺直葬であったことが類推されるなど、等質性の高い墳丘規模をもつ古墳群が新たに見つかったといえる。今後、これを「三条岡山古墳群」と呼称し、周濠1を伴う古墳を「1号墳」、周濠2を伴う古墳を「2号墳」、周濠3を伴う古墳を「3号墳」としたい。なお、須恵器の情報は不十分であるものの、埴輪の存在から、これらの築造年代は5世紀後半に比定でき、さらに周濠毎の埴輪の形態、焼成状況、調整方法などに、僅かなりとも時期差を認め得ることから、2号墳→3号墳→1号墳に築造されたと判断した。ここでは、近在に位置する古墳と比較することによって読みとれる、三条岡山古墳群の年代とその特色を概観する。

近在で、古墳時代中期の埴輪を伴う古墳としては、芦屋市内では、前方後円墳である金津山古墳（全長約55m）・打出小槌古墳（全長約80m）がある〔竹村・白谷編2007、白谷2008、森岡1995・2008・2008c、森岡・白谷編2008〕。また、西接する神戸市東灘区には、馬・人物・家形埴輪を伴うことで知られる住吉東古墳（全長約22mの帆立貝形古墳）をはじめとする住吉岡町古墳群において、一辺20m程度までの方墳（第24次調査2号墳、第30次調査1号墳、第32次調査1号墳・4号墳・5号墳など）で一連の埴輪が出土している〔安田編2001〕。さらに、同じく東灘区の西岡本遺跡（野寺古墳群）10号墳〔浅岡編2001〕や御影山手遺跡1号墳（直径18mの円墳）〔関野編2006〕も埴輪を伴う古墳である。

三条岡山古墳群出土の埴輪は、厚手で径の小さいものと、やや薄手で径の大きめのものの二通りがあることはかねてから認識されていた〔森岡編1979〕が、金津山古墳と打出小槌古墳から出土した円筒埴輪は、さらに直径が大きい傾向にある。ただし、焼成状況や調整技法については比較・対照が有効である〔森岡2005〕。打出小槌古墳の埴輪は、半須恵質や須恵質焼成のものが3～4割含まれている。また、円筒埴輪についてみると、3突帯4段構成のものが主体を占めるようで、外面調整は一次調整のタテハケないしナメハケのみのものが多く、二次調整のヨコハケを施すものは少ないので、2・3号墳出土の埴輪より新しい傾向が窺取できる。一方、金津山古墳は、極少量ながら黒斑を有する埴輪の存在が知られており、土師質焼成を基本としながら、若干半須恵質焼成、須恵質焼成の埴輪を交える。円筒埴輪は、4条突帯5段構成が主体で、概ね一次調整のタテハケの後に、多様なB種のヨコハケを施して、突帯は狭く低いといった特徴があり、2・3号墳の埴輪と共通点が多いことから、技術的に親縁な製作集団の手に成るものと推察できる。仮に、首長墳の埴輪に先進的な情報・技術が取り入れられ、周辺の小形墳にそれが伝播していくのであれば、2・3号墳の埴輪は金津山古墳と同時期ないしやや後出するものと言えよう。ちなみに、金津山古墳は、前方部内周濠の底面直上において陶器 TK23型式を上限とする須恵器を伴っており、その築造年代を5世紀第3四半世紀頃と理解している。また、打出小槌古墳はそれより新しい5世紀第4四半世紀を想定していることから、2・3号墳は5世紀第3四半世紀の後半頃の築造と推定したい。

また、住吉岡町古墳群では、TK208型式期とされている第32次調査1号墳の埴輪は、黒斑を有するものを含み、土師質から須恵質まで多様な焼成状態のものが混じる。器面調整も多様で、外面には板ナデ仕上げ、タテハケ調整のみ、二次調整の細かいヨコハケ、B種ヨコハケがみられ、内面には、ユビナデ・板ナデ・ハケメがみられる。ただし、どの個体も突帯はかなり突出しており、台形やM字状の断面形を呈していることから、三条岡山古墳群のいずれの埴輪より明らかに先行する。次いで、TK23型式期の古墳とされる住吉東古墳の埴輪と突帯や朝顔形の形態・調整を比較すると、2・3号墳から出土した埴輪の方が幾分丁寧な造りであり、やや先行するようにも見える（神戸市埋蔵文化財センターで実見）。また、TK23型式の新しい段階から TK47型式の古い段階とされる第24次調査2号墳は、南周溝内からB種のヨコハケを施す円筒埴輪が出土しており、焼成状況や突帯の形状など、周濠2に近接して出土した円筒埴輪に似る。さらに一段階新しい TK47型式の古墳とされる第32次調査4号墳は、須恵質焼成を主体とする3条突帯4段構成で高さ40cm程度の円筒埴輪を有する。それとともに朝顔形埴輪を有

して、中には顔部に断面三角形の突出する突帯をもつ土師質焼成のものがあり、1号墳の朝顔形埴輪とある程度類似する。西岡本遺跡の野寄古墳群では、一辺65m程度の方墳である10号墳がTK208～TK23型式期に比定されている。それには、完形に復元された2条突帯3段構成で高さ35cm程度の段構成が特徴的な円筒埴輪や、高さ64cmの朝顔形埴輪がある。これらは、土師質焼成が多く、突帯は低平な台形やM字状のもので、外面調整は1次調整のタテハケのみといった調整上の特徴があり、三条岡山古墳群で出土したものより古色を示している。須恵器の出土が乏しい状態にあって断言は出来ないものの、2・3号墳はTK23型式期、1号墳はTK47型式期の古墳に年代比定できるのかもしれない。

三条岡山古墳群は、標高40～50m程度の六甲山南麓に位置し、非常に眺望の良い古地と言える。このような高台の古墳群といえるものとして、野寄古墳群や御影山手遺跡がある。これらは埴輪を伴う段階で造営が開始され、6世紀にも古墳の築造が続いていて、野寄古墳群では横穴式石室墳が大勢を占める。今回確認された古墳は、いずれも5世紀後半のものであるが、周濠からは6世紀後半に下る須恵器が大量に出土しているほか、三条岡山遺跡第2～5地点の調査においても須恵器、埴輪、金環など、6世紀以後の遺物が出土している（第6図・第1表）。また、第11地点では古墳時代の集落遺構（堅穴住居・掘立柱建物・木棺墓・土坑など）が確認されており、埴輪を伴う可能性のある木棺墓や、柱穴から滑石製鈴車が出土した大形掘立柱建物が古墳時代後期に比定されている〔渡辺編1998〕。このような傍証から、三条古墳群は6世紀に入っても築造が続いていた可能性が高く、横穴式石室を埋葬主体とする古墳が含まれていた可能性もある。ただし、6世紀のある段階で古墳は築かれなくなり、その後には大形建物を伴う特徴的な集落が展開したとする解釈も可能である。

以上の粗い分析を踏まえ、ここに「三条岡山古墳群」の存在を新たに認識しておきたい。埋葬施設の想定を前提とすれば、阪神地方では重要な意味をもつ一帯的な古墳群の一角を検証できたといえ、後続する三条古墳群や城山古墳群が、より芦屋川に近い東方地域に展開して、6～7世紀を概ねカバーすることへの連鎖を今後探索していかなければならない。

第4節 三条岡山遺跡の中世居館

第1節で概観したように、本調査では、傾斜地に築壇状に加工した平坦面に堀、庭園（池・滝・溝・ビツト群）、廃棄遺構などが確認され、中世居館の存在が明らかになった。また、堀より北側の緩斜面には遺構が全く検出されず、出土遺物もほとんど認められなかったことから、土塁の存在を推定した。ここでは、本調査地点とその周辺の調査成果から、居館の構造を推定したい（第52図）。

Ⅲ・Ⅳ区の北側隣接地となる第3地点A・B地区は削平が顕著であったものの、B地区において「南北幅10m以上のカット面」が認識され、それがさらに東の第4・5地点に延びていた可能性が指摘されている〔森岡編2005〕。このカット面はⅣ区の緩傾斜に続く面のようなので、本来はこの位置に広大な平坦面が造営され、堀や土塁で隔絶された居館の中枢部分であった可能性が考えられる。また、Ⅲ区の西側には、第2地点のF区が位置しており、この部分にⅢ区から続く平坦面が認められた。トレンチ調査によって、この平坦面が盛土によることや、中世の遺物包含層の存在が確認されているが、堀の連続を証明できる明確な遺構や水成堆積層は確認できていない〔森岡編1979〕。そのほか、中世居館に関わる地形改変の可能性として、第3地点の北西道路沿いに位置するE・F地区で指摘された掘り割り状凹地形が目される。これは、北から北西方向に向かっており、自然地形に則した自然流路と捉えられているが、中枢部分の北方を区切る、Ⅲ・Ⅳ区の堀より上位に位置する堀としての見直しも必要であろう。

出土遺物については、本調査地点は煮炊具や掻鉢といった調理具が多く、供膳具が極端に少ない傾向が看取された。これに対して、第2地点南西寄りのA地区を中心に、土師皿を中心として、瓦質土器（羽釜・火鉢）・陶器（備前焼鉢・備前焼壺・瀬戸美濃焼鉄釉瓶・瀬戸美濃焼天目茶碗）・中国製磁器（白磁碗・青磁碗）・瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）などの中世遺物が大量に出土している。発掘調査報告書では、この地点に南下する小谷を想定し、そこへの流出堆積層からの出土と位置付けている。遺物の内訳では供膳具の多さが指摘されており、本調査地点の比率とは異なる結果となっている〔森岡編1979〕。

引用・参考文献目録

- 浅岡俊夫 編 2001 『神戸市東灘区 西岡本遺跡』 六甲市遺跡調査会
- 芦屋市教育委員会 1980 『芦屋市埋蔵文化財発掘分布地図及び地名表 (第1分冊)』 (芦屋市文化財調査報告 第12集)
- 芦屋市教育委員会 1993 『芦屋市埋蔵文化財発掘分布地図および利用の手引き』 (芦屋市文化財調査報告 第24集)
- 芦屋市教育委員会 2001 『芦屋市埋蔵文化財発掘分布地図利用の手引き』 (芦屋市文化財調査報告 第40集)
- 芦屋市教育委員会 2009a 『芦屋市埋蔵文化財発掘分布地図利用の手引き』 (芦屋市文化財調査報告 第80集)
- 芦屋市教育委員会 2009b 『現地見学会資料 50年ぶりの発掘調査—会下山遺跡の国史指定をめざして—』
- 有坂康雄・村川行弘 1971 『中世の芦屋』『新修芦屋市史』本篇1 芦屋市役所
- 正 康・藤岡 弘 1976 『古墳時代』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 石野博樹 1973 『3世紀の高城と水城』『古代学研究』第68号 古代学研究会
- 一瀬和夫 2003 『岡崎城跡の外周調査から—B種ヨコハケの成立と波及に関する覚書』『第52回埋蔵文化財研究集会 埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 一瀬和夫・石河良和・河内一浩 2008 『古市・百舌鳥古墳群の埴輪』『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』(平成17年度～19年度科学研究費補助金(基礎研究(A) 研究成果報告書) 科学研究費「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」(研究代表者 白石太一郎) 研究グループ編 六一書房
- 伊藤長・栗岡実・石井淳・重根弘和・上西高登 2004 『中世陶器の物流—備前説を中心に—』『日本考古学協会 2004年広島大会 研究発表資料集』日本考古学協会
- 上田秀夫 1982 『14～16世紀の青磁の分類について』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 植野浩三 2008 『古市・百舌鳥古墳群出土の須恵器』『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』(平成17年度～19年度科学研究費補助金(基礎研究(A) 研究成果報告書) 科学研究費「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」(研究代表者 白石太一郎) 研究グループ編 六一書房
- 岡田幸一・長谷川 純 2003 『兵庫津遺跡出土の上製土器』『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 小野忠照 1984 『高地性集落論』学生社
- 小野正敏 1982 『14～16世紀の埴輪、皿の分類について』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 加藤一郎 2008 『大山古墳の円筒埴輪』『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』(平成17年度～19年度科学研究費補助金(基礎研究(A) 研究成果報告書) 科学研究費「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」(研究代表者 白石太一郎) 研究グループ編 六一書房
- 川西安幸 1978 『円筒埴輪論』『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 熊田雅次 1960 『歴史日誌』(大学ノート)
- 小森修寛 2005 『京から出土する土器の編年の編年研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀—』京都府職工労
- 近藤義郎 1959 『共同作と単位集団』『考古学研究』第6巻第1号 考古学研究会
- 財団法人東日本建設文化財財団 2007 『沙留の移り変わり』
- 菅原正明 1989 『西日本における瓦器生産の展開』『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 国立歴史民俗博物館
- 菅原正明 1990 『「瓦器」は何を語るのか?』『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
- 勸修寺 1997 『中世食器の地域性—6畿内周辺—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 岡野 春雄 2006 『興山寺遺跡第2次発掘調査概報』神戸市教育委員会
- 第8回埋蔵考古学研究会 2008 『シンポジウム記録 城館からみた中世の埴輪』『城館からみた中世の埴輪』(第8回埋蔵考古学研究会集記録集) 第8回埋蔵考古学研究会実行委員会
- 高倉貴子 1994 『埴輪生産の展開』『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会
- 竹村志洋・白谷明男 編 2007 『打出小段遺跡 (第41地点) 発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告 第66集) 芦屋市教育委員会
- 多田鶴久 2008 『埴輪の中世城館について 城館からの年代観』『城館からみた中世の埴輪』(第8回埋蔵考古学研究会集記録集) 第8回埋蔵考古学研究会実行委員会
- たつの市立埋蔵文化財センター 2007 『特別観 再現 埴輪の中世城館—描かれた中世山城の世界—』(たつの市立埋蔵文化財センター図録3)
- 横 伸一郎 1995 『中世後期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真福社
- 郡山比呂志 1974 『古墳出現前後の集団関係—淀川水系を中心に—』『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会
- 郡山比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 中井清二 2000 『武家儀式と土師器』『史料』第83巻第3号 史学研究会
- 中井清二 2002 『土器の名—中世土師器の器名をめぐって—』『日本史研究』483号 日本史研究会
- 中野明日香・小長谷正治・細川真由美 2008 『第3号 調査成果』『兵庫県伊丹市御園塚古墳発掘調査報告書—第8・9・10次調査—』伊丹市埋蔵文化財調査報告書第34集 伊丹市教育委員会
- 奈良県立歴史考古学研究所附属博物館 2008 『はにわと動物たち—大相の埴輪 大集合—』(奈良県立歴史考古学研究所附属博物館 特別展図録 第99号)
- 仁木 宏 2004 『室町・戦国時代の社会構造と守護所・城下町』『第12回東海考古学フォーラム岐阜大会 守護所・戦国期城下町を考える—第1分冊 シンポジウム資料集』守護所シンポジウム(岐阜県研究会世話人 編)
- 白谷明男 2008 『打出小段古墳の全貌を考える。—実録・打出小段古墳—』『芦屋市立美術館研究紀要』第1号 芦屋市立美術館
- 早川 圭 2008 『建物からみた城館遺跡の特質—戦国期の西日本地域を中心に—』『城館からみた中世の埴輪』(第8回埋蔵考古学研究会集記録集) 第8回埋蔵考古学研究会実行委員会
- 祝 瑞 1988 『埴輪の風格性』『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 祝 瑞 1994 『奈良の円筒埴輪』『埋蔵考古学研究所論叢』第11号 吉川弘文館
- 村川行弘 1971 『考古学からみた芦屋』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 村川行弘 1976 『歴史時代』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 村川行弘・藤岡 弘 1967 『芦屋市埋蔵文化財発掘分布地図』(芦屋市文化財調査報告書第5集) 芦屋市教育委員会
- 村川行弘・村川義典 1986 『三条岡山遺跡 (第4次調査)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』兵庫県教育委員会
- 村川行弘・森岡秀人 1976 『弥生時代』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所

- 村川行弘・森岡秀人 1981 『三条岡山道路北部隣接地埋蔵文化財総調査の概要』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1974 『花崗岩土壌地帯に立地する六甲山系高地性集落と其の性格』『朝日ヶ丘縄文遺跡』 会下山弥生遺跡(『芦屋市文化財調査報告 第8集』) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977 『畿内第Ⅰ様式の彌生組分と大塚山遺跡出土土器の占める位置』『河内長野大塚山』 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 1979a 『14. 三条岡山道路』『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』『芦屋市文化財調査報告第9集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1979b 『芦屋遺跡めぐり(7) 三条岡山道路とその周辺』『海技通信』342号 海技大学校
- 森岡秀人 1980 『土器からみた高地性集落と下山の生活様式』『藤井知介君追悼考古学論叢』 刊行会
- 森岡秀人 1982 『城山南麓遺跡A地点発掘調査報告書—芦屋市山芦屋町・児島部建設予定地の埋蔵文化財予察調査結果』『Ashiya Archaeological Record』15 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1983 『城山南麓遺跡B地点緊急発掘調査の概要—城山17号墳の発掘と中量建物の部分確認—』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1984 『三条岡山道路北部隣接地区』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1985 『城山南麓遺跡A地点』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986 『摂津・打出小竈古墳周縁の発掘調査』『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会』近畿地方埋蔵文化財担当者研究会
- 森岡秀人 1987 『古墳時代の芦屋地方(上)—近年の道路調査をふりかえって—』『兵庫県歴史』23 兵庫県史編集専門委員会 編集委員会
- 森岡秀人 1988a 『古墳時代の芦屋地方(下)—近年の道路調査をふりかえって—』『兵庫県歴史』24 兵庫県史編集専門委員会 編集委員会
- 森岡秀人 1988b 『三条岡山道路第5次発掘調査略報』芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1988c 『三条岡山道路(第5次)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1990 『前方後円墳からみた古墳時代の阪神地方』『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 1992 『打出小竈古墳』『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県
- 森岡秀人 1995 『海浜の古墳—摂津・金津山古墳と打出小竈古墳について—』『西谷眞治先生古稀記念論文集』 西谷眞治先生の古稀をお祝いする会
- 森岡秀人 2003 『浪路型即ち』の提唱と摂津』『初瀬古墳と大和の考古学』 学生社
- 森岡秀人 2005 『三条岡山道路検出遺構をめぐり市内出土円筒埴輪の様相と古墳』『三条岡山道路第3地点発掘調査報告書(1981発掘記録)』—中継地区北部隣接地の検出と出土遺物—『芦屋市文化財調査報告第53集』 芦屋市教育委員会・三条岡山道路発掘調査団
- 森岡秀人 2008a 『三条会下遺跡(第2地点)』『平成18年度国庫補助事業芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』『芦屋市文化財調査報告第73集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2008b 『阪住岡本の概要』『金津山古墳発掘調査報告書—第17地点で検出した外周溝の発掘調査成果—』『芦屋市文化財調査報告 第75集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2008c 『金津山古墳発掘報告書』『芦屋市立美術館研究紀要』第1号 芦屋市立美術館
- 森岡秀人・竹村忠洋 1998 『三条岡山道路(第11地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1996 『摂津国』『兵庫県の考古学』 吉川弘文館
- 森岡秀人・吉村 健 1992 『摂津』『前方後円墳と近畿』 山川出版社
- 森岡秀人・和田秀寿・後持 泉 1990 『金津山古墳発掘調査範囲・構造確認調査』『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点 金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第4地点 発掘調査概要報告書』『芦屋市文化財調査報告第19集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1979 『三条岡山道路』『芦屋市文化財調査報告 第10集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1986 『埋蔵文化財調査メモリアル80—85』『芦屋市文化財調査報告 第14集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 2005 『三条岡山道路 第3地点発掘調査報告書(1981発掘記録)』—中継地区北部隣接地の検出と出土遺物—『芦屋市文化財調査報告 第53集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 編 1997 『平成7年度国庫補助事業 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』『芦屋市文化財調査報告 第28集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白羽明子 編 2008 『金津山古墳発掘調査報告書—第17地点で検出した外周溝の発掘調査成果—』『芦屋市文化財調査報告 第75集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿 編 1991 『芦屋の歴史と文化財—歴史資料展示常設展示図録—』 芦屋市立美術館
- 森下重司・廣瀬 定 2003 『円筒埴輪の製作技法』『第52回埋蔵文化財研究集』 埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析— 第52回埋蔵文化財研究集実行委員会
- 森田 勉 1982 『14—16世紀の白磁の分類と鑑定』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1995 『中世祖形器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 森村純一 2002 『15—17世紀における東洋アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史』『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集
- 安井良三 1985 『航海民の考古学』『考古学ジャーナル』No.250 ニュー・サイエンス社
- 安田 道雄 2001 『住吉町遺跡 第24次・第32次 発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 山上雅弘 1995 『第6章第1節 遺構の検討』『小野市小田城跡発掘調査報告書—中小河川(東条川)改修事業に伴う発掘調査報告—』『兵庫県文化財調査報告第143集』 兵庫県教育委員会
- 山上雅弘 2002 『兵庫県内に残る平地居館の土器遺構』(第1回土器研究会 発表レジュメ)
- 山上雅弘 2004 『播磨守護所の実像と伝説する政治拠点』『第12回東海考古学フォーラム岐阜大 守護所・戦国期城下町を考える—第1分冊 シンボジウム資料集』 守護所シンボジウム@岐阜研究会世話人 編
- 山上雅弘 2006 『戦国期平地居館の概要—兵庫県下を中心に—』『大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター シンボジウム 赤松氏と播磨の城郭』大手前大学史学研究所
- 山上雅弘 2007 『戦国期兵庫県下の平地居館』『大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター シンボジウム 赤松氏と播磨の城郭 報告集』大手前大学史学研究所
- 山本信夫 1995 『中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 若林茂彦 2009 『集落分布パターンの変遷からみた弥生社会』『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集 縄文・弥生集落遺跡の集成的研究
- 渡辺 昇 1998 『三条岡山道路—第11地点発掘調査概要—』『芦屋市文化財調査報告 第36集』 芦屋市教育委員会

写真図版

PLATE



調査地からの眺望

※調査地からは、芦屋の海岸部だけでなく、大阪湾岸を一望できる。

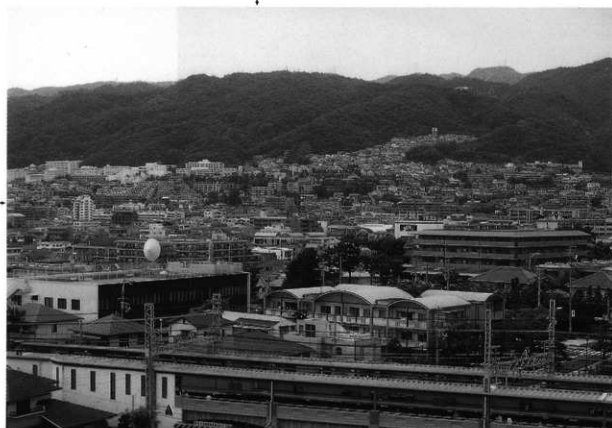


調査地周辺の石仏

※調査地の周辺では、道路の拡張工事によって中世の石仏や五輪塔が出土している。



調査地遠景（南から）（撮影 梅原章一氏）※矢印の交点が調査地点。



調査地遠景（南東から）※矢印の交点が調査地点。



調査地現況（南東から）
※石垣とその前面道路は昭和35年に三糸岡山遺跡発見の端緒となった遺物採集地点である。



調査地現況（南西から）
※建物の南側は盛土によって庭になっていた。



調査地現況（西から）
※建物の北側にある庭は旧地形を保っていた。



第2トレンチ掘削状況 (南から)



第3トレンチ掘削状況 (南東から)



第4トレンチ掘削状況 (東から)



第5トレンチ掘削状況 (東から)



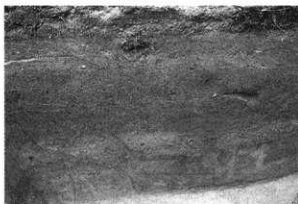
第7トレンチ東壁 (西から)



第8トレンチ東壁 (西から)



第9トレンチ掘削状況 (南から)



第9トレンチ西壁 (東から)



第6トレンチ全景（南から）



(左上) 第6トレンチ西壁（東から）
(左下) 第6トレンチ東拡張区壇輪出土
状況（北から）
(右) 第6トレンチ東拡張区壇輪出土
状況（西から）

調査地現況（南から）
※既存建物の南側盛土による庭部分。



調査地現況（北西から）
※既存建物を解体した後の調査地上段の平坦面。



調査地現況（北東から）
※調査地上段から下段方向の眺め。





I 区第 1 遺構面検出状況
(北から)



I 区第 1 遺構面掘削状況
(北から)



V 区第 1 遺構面掘削状況
(北から)



I区第1遺構面検出状況(南東から)



I区第1遺構面掘削状況(南西から)



I区SK01半截状況(西から)



V区南部攪乱状況(南西から)



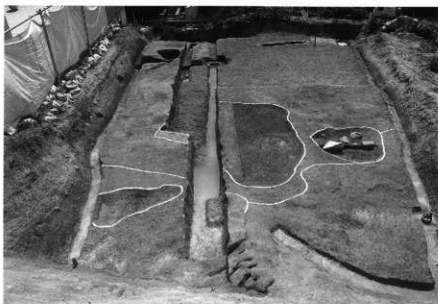
V区第1遺構面検出状況(南西から)



V区完掘状況(北から)



I区第2遺構面検出状況
(北から)



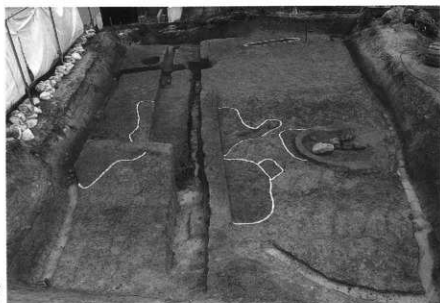
I区第2遺構面掘削状況
(北から)



I区SX01掘削状況 (東から)



I区SX02掘削状況 (北から)



I 区第3遺構面検出状況
(北から)



I 区第3遺構面掘削状況
(南から)



I 区第3遺構面掘削状況
(南東から)

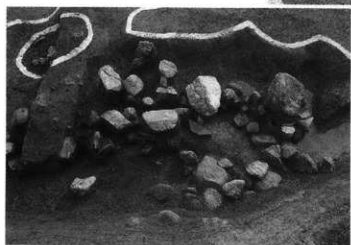


I区SX03掘削状況（南から）

※SX03には土師質土器・瓦質土器の埴、瓦質土器の羽釜、備前焼播鉢、瓦、人頭大の礫などが投入されていた。



I区SX03およびP2半截状況（南から）



I区SX03中央部掘削状況（東から）



I区SX03土層観察用土手土層断面
（南から）



I区SX03掘削状況（北から）



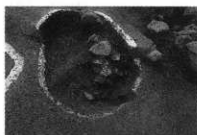
I 区 SX03 遺物出土状況 (南から)



I 区 SX03 瓦当出土状況 (北西から)



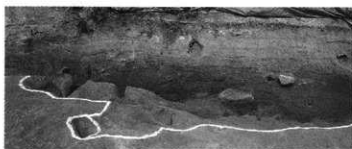
I 区 SX03 - P1 掘削状況 (南から)



I 区 SX03 - P2 掘削状況 (南から)



I 区 SX03 - P3 掘削状況 (南から)



(左上) I 区 SX03 - P1 ~ 3 完掘状況 (南から)
(右上) I 区 SX03 完掘状況 (南から)
(左下) I 区 SX03 完掘状況および東壁土層断面 (西から)



I 区 SX04 遺物出土状況 (南から)



I 区 SX04 掘削状況 (東から)



I 区 SX04 掘削状況 (南から)



I 区 SX04 完掘状況 (東から)



I 区 SX04 完掘状況 (南から)



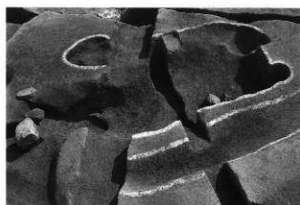
I 区 SX06 検出状況 (南東から)



I 区 SX06 北部掘削状況 (南東から)



I 区 SX06 掘削状況 (北東から)



I 区 SX06 完掘削状況 (北東から)



I 区 SX04・06 掘削状況 (南東から)



I 区 SK04・05 掘削状況 (北東から)



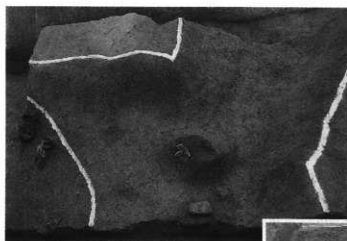
I 区 SK02 掘削状況 (東から)



I 区第 4 遺構面完掘状況（北から）

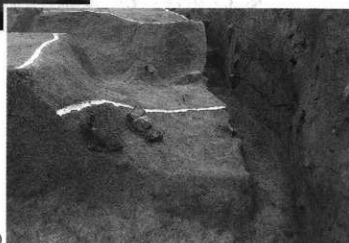


- (左上) I 区第 4 遺構面南部完掘状況
（北東から）
- (左下) I 区第 4 遺構面周濠 1・SX05
掘削状況（南東から）
- (右) I 区第 4 遺構面周濠 1・SX05
掘削状況（東から）



I 区SX05掘削状況（東から）

※SX05は周濠1の東部を切っており、SX05内には、本来周濠1に流入していたと考えられる埴輪が混入している。



I 区SX05掘削状況（南から）



I 区SX05北部埴輪出土状況（北から）



I 区SX05南部埴輪出土状況（南から）



I 区SX05北部下位土層断面（西から）



I 区SX05南部床面検出状況（西から）



I 区周濠 1 検出状況 (東から)



I 区周濠 1 土器出土状況 (東から)



I 区周濠 1 掘削状況 (東から)



I 区周濠 1 土器出土状況 (南から)



I 区周濠 1 土器出土状況 (南から)



I 区周濠 1 完掘状況 (東から)

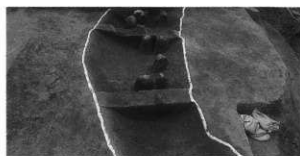


I 区周濠 1 土錘出土状況 (西から)

※周濠 1 は灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈する上位埋土 (I 区 18a 層) に遺物の包含が多く、中世の土師質土器・瓦質土器・磁器などと、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・土製品、弥生土器が混在して出土した。一方、褐灰色～灰黄褐色～黒褐色を呈する中位埋土 (I 区 18b 層) には、中世遺物の混入は乏しく、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪・土製品と弥生土器が出土した。ただし、古墳時代の遺物は、5 世紀後半～7 世紀前半の幅を持っており、周濠 1 の周辺には、時期の異なる古墳がいくつも築造されていたことが想定できる。



I 区周濠 1 検出状況 (西から)



I 区周濠 1 掘削状況 (西から)



I 区周濠 1 東側土手土層 (西から)



I 区周濠 1 西側土手土層 (西から)



I 区周濠 1 東部掘削状況 (南から)



I 区周濠 1 南東部遺物出土状況 (東から)



I 区周濠 1 東部遺物出土状況 (南から)



I 区周濠 1 と東壁土層 (西から)



I 区西壁土層断面 (北東から)



I 区南部西壁土層断面 (東から)



I 区中央部西壁土層断面 (東から)

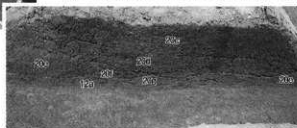


I 区北部西壁土層断面 (東から)



I 区南部東壁土層断面 (南西から)

- ※20c にぶい黄褐色(10YR5/3～10YR5/4)～灰黄褐色(10YR6/2)粗砂混じり土
- 20d にぶい黄褐色(10YR5/3～10YR5/4)～灰黄褐色(10YR6/2)粗砂混じり土。20c層より締まりが悪い。
- 20e にぶい黄褐色(10YR5/3)～灰黄褐色(10YR6/2)～黄褐色(10YR5/6)粗砂混じり土
- 20f にぶい黄褐色(10YR5/3)～暗灰黄色(2.5Y5/2)中砂～粗砂質土
- 20g 暗灰黄色(2.5Y5/2)～黄褐色(2.5Y5/3)細砂～中砂質土
- 12a 明黄褐色(10YR6/6～2.5Y6/7)粗砂混じり砂質土



I 区断割トレンチ土層 (西から)



II 区全景 (南西から)



II 区上段第1遺構面検出状況 (北から)



II 区上段第1遺構面検出状況 (東から)



II 区上段第1遺構面掘削状況 (北から)



II 区上段第1遺構面掘削状況 (東から)



Ⅱ区上段第2遺構面検出状況（北から）



Ⅱ区上段第2遺構面検出状況（東から）



Ⅱ区上段第2遺構面掘削状況（北から）

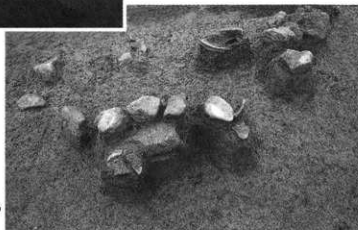


Ⅱ区上段第2遺構面掘削状況（東から）



Ⅱ区上段第2遺構面遺物集中部の
遺物出土状況（西から）

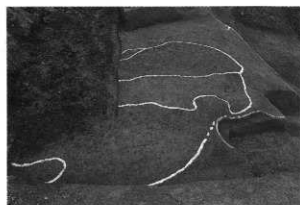
※Ⅱ区上段第2遺構面の北東部には、周濠1の埴土に似たにぶい黄褐色を呈する砂質土層（Ⅱ区5層）があり、この部分を掘り下げると、中世の土師質土器・瓦質土器・磁器などと、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪、弥生土器が混在して出土した。このことから、この部分の下に古墳の周濠を想定するに至った（周濠2）。



Ⅱ区上段第2遺構面遺物集中部の
遺物出土状況（東から）



II 区上段池検出状況（北から）



II 区上段池検出状況（西から）



II 区上段池掘削状況（北から）

II 区上段池掘削状況（西から）



II 区上段池土層断面（北西から）



Ⅱ区上段池掘削状況・溝検出状況
(西から)



Ⅱ区上段池西部石組 (西から)



Ⅱ区上段池石組 (北から)



Ⅱ区上段池石組 (北東から)

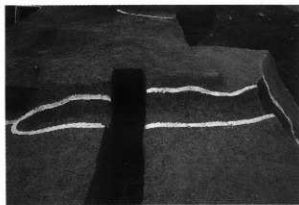
※Ⅱ区上段池は東縁に、人頭大の花崗岩や古成層の礫を一列に並べた石組があり、この礫の裏込めから羽釜を含む中世遺物が出土している。



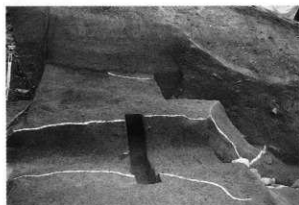
Ⅱ区上段池遺物出土状況 (東から)



II 区上段北東部遺構検出状況（西から）



II 区上段北東部 SD11上層掘削状況（西から）



II 区上段北東部 SD11下層掘削状況（西から）



II 区上段北東部 SD11下層掘削状況（南から）



II 区上段北東部周濠2掘削状況（西から）



II 区上段北東部周濠2完掘状況（西から）



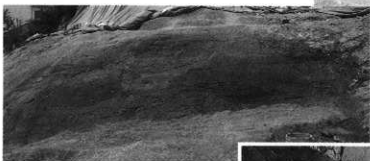
II 区上段北東部土層（北から）



Ⅱ区上段第3遺構面完掘状況（東から）



Ⅱ区上段地山検出状況（東から）



Ⅱ区上段西壁土層（東から）



Ⅱ区上段第3遺構面完掘状況
（西から）



Ⅱ区上段東壁土層（西から）



Ⅱ区上段・下段の段差（南西から）



Ⅱ区下段第1遺構面検出状況（西から）



Ⅱ区下段第1遺構面掘削状況（西から）



Ⅱ区下段第1遺構面検出状況（東から）

Ⅱ区下段第1遺構面掘削状況（東から）



Ⅱ区下段 SD13掘削状況 (東から)



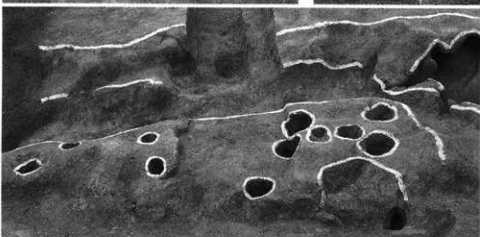
Ⅱ区下段遺物・焼土検出状況 (南から)



Ⅱ区下段 SD13掘削状況 (西から)



(右) Ⅱ区下段清土層断面 (西から)



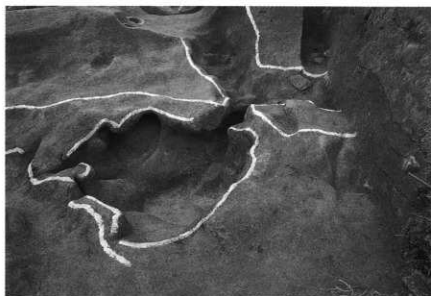
(左上) Ⅱ区下段ピット群 (西部) 検出状況 (南から)
(右上) Ⅱ区下段ピット群 (東部) 検出状況 (南から)
(左下) Ⅱ区下段ピット群完掘状況 (南から)



Ⅱ区下段溝・淹掘削状況（南から）



(左上) Ⅱ区下段溝掘削状況（南から）
(左下) Ⅱ区下段 SD12の閉塞部分掘削状況（南から）
(右上) Ⅱ区下段溝・淹完掘削状況（南から）



Ⅱ区下段溝・滝・井戸完掘状況
(南から)



Ⅱ区下段完掘状況 (東から)



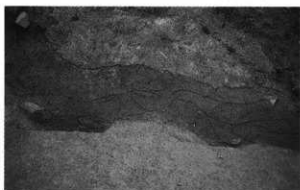
Ⅱ区下段完掘状況 (西から)



Ⅱ区下段井戸肩部遺物出土状況 (東から)



Ⅱ区下段東壁土層 (西から)



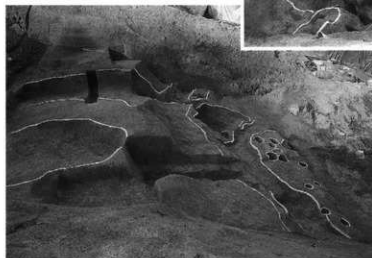
Ⅱ区下段東壁土層 (下部) (西から)



Ⅱ区完掘状況（全景）（南東から）



Ⅱ区完掘状況（全景）（東から）



Ⅱ区完掘状況（全景）（西から）



Ⅱ区完掘状況（全景）（南から）



Ⅲ区全景（東から）



Ⅲ区西部周濠3残存状況（西から）



Ⅲ区表土除去状況（南西から）



Ⅲ区周濠3検出状況（東から）



Ⅲ区周濠3検出状況（南から）



Ⅲ区周濠3掘削状況（南から）



Ⅲ区周濠3西畦除去状況（南から）



Ⅲ区周濠3完掘状況（南から）



Ⅲ区周濠 3 検出状況
(西から)



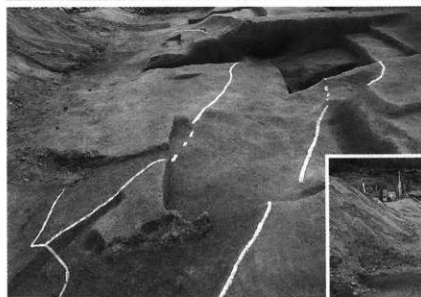
Ⅲ区周濠 3 掘削状況
(西から)



Ⅲ区周濠 3 完掘状況
(西から)



Ⅲ区周濠3 検出状況 (東から)



Ⅲ区周濠3 掘削状況 (東から)



Ⅲ区周濠3・堀掘削状況 (東から)



Ⅲ区西畦東壁土層断面 (東から)



Ⅲ区周濠3西部掘削状況 (南から)



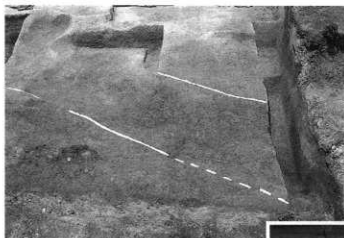
周濠3西部から中央部掘削状況 (南東から)



Ⅲ区周濠3西部遺物出土状況 (南から)



Ⅲ区周濠3西部遺物出土状況 (東から)



Ⅲ区周濠3 東部検出状況 (南から)



Ⅲ区周濠3 東部掘削状況 (南から)



Ⅲ区周濠3 東部検出状況 (西から)



Ⅲ区周濠3 東部遺物出土状況 (北から)



Ⅲ区 SK08 掘削状況 (上部) (南から)



Ⅲ区 SK08 掘削状況 (下部) (南から)



Ⅲ区周濠全景（南東から）

※Ⅲ区は、調査区上段西部に設定した調査区であるが、その南部は既存建物の地下室によって損壊を被っていたため、旧家屋の北側庭園部を中心とする。周濠2の南に位置する堀は、Ⅳ区に延びるが、南側を失っているため本来の幅は不明である。

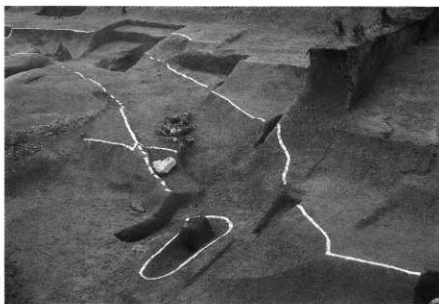


Ⅲ区周濠全景（北西から）



Ⅲ区周濠全景（西から）

Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況
(南東から)



Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況
(南から)



Ⅲ区周濠3と堀の完掘状況
(南から)





Ⅲ区周濠3と堀の切り合い関係（東から）



Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況（東から）



Ⅲ区堀の床面遺構検出状況（東から）



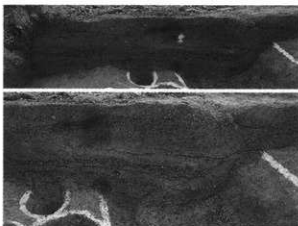
Ⅲ区堀の完掘状況（東から）



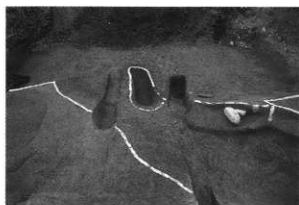
Ⅲ区堀の床面遺構検出状況（西部）（東から）



Ⅲ区堀の完掘状況（西部）（東から）



（左上）Ⅲ区中央畦東壁における堀の土層断面（東から）
（左下）Ⅲ区中央畦東壁におけるSD09の土層断面（東から）
（右上）Ⅲ区SP15上部の遺物出土状況（東から）



Ⅲ区周濠3と堀の掘削状況（北から）



Ⅲ区SK14上部の遺物出土状況（西から）



Ⅲ区堀の床面遺構検出状況（北から）



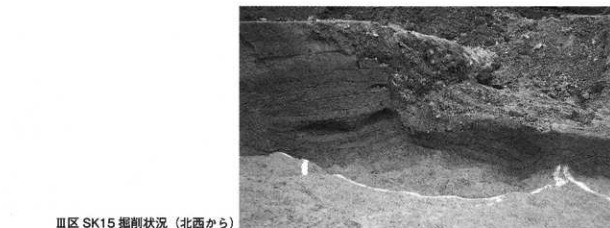
Ⅲ区SK15西部の遺物出土状況（北から）



Ⅲ区堀の床面遺構検出状況（西部）（北から）



Ⅲ区堀の完掘状況（西部）（北から）



Ⅲ区 SK15 掘削状況（北西から）



Ⅲ区中央畦西壁（南西から）



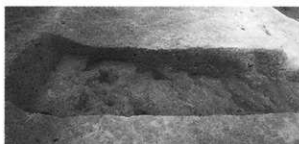
Ⅲ区中央畦西壁北部（西から）



Ⅲ区中央畦西壁南部（西から）



Ⅲ区東畦西壁北部（南西から）



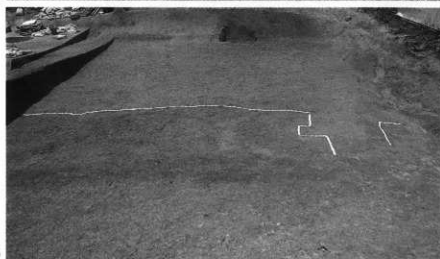
Ⅲ区断割トレンチ（西から）



Ⅲ区東畦西壁南部（西から）



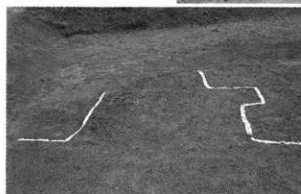
Ⅳ区表土除去状況（全景）
（南東から）



Ⅳ区堀検出状況（南から）



Ⅳ区堀検出状況（北から）



Ⅳ区土構検出状況（北から）



Ⅳ区堀掘削状況（東から）



(上) Ⅳ区西壁における堀土層（東から）
(中) Ⅳ区堀断割トレンチ土層（東から）
(下) Ⅳ区堀断割トレンチ土層（北東から）



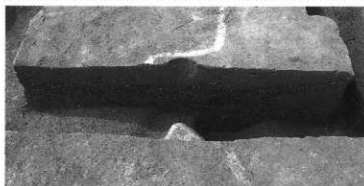
Ⅳ区堀掘削状況（北から）



Ⅳ区堀掘削状況（南から）



(左上) Ⅳ区土橋断割状況 (南から)
(左中) Ⅳ区土橋西部ビット (南から)
(左下) Ⅳ区土橋東部ビット (南から)
(右上) Ⅳ区土橋東西断割トレンチ (東から)

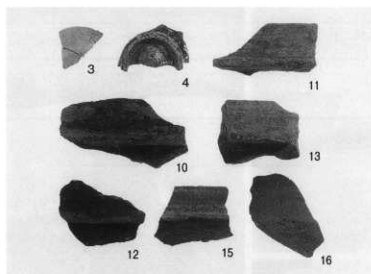


Ⅳ区土橋断割トレンチ北部土層 (西から)

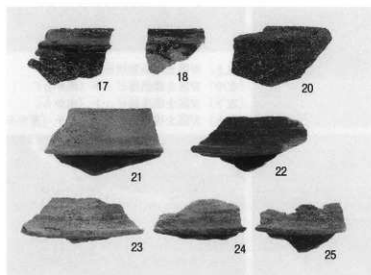


Ⅳ区以南深掘トレンチ北壁土層 (南から)

- ③ 耕作土。
④ 床土。
⑤ 鉄分沈着の著しいオリブ黄色 (5Y6/3) シルト質土。
⑥ 灰黄色 (2.5Y6/2) 礫混じり粗砂質土。
⑦ 明褐色 (7.5YR5/8) 粗砂質土。



I 区SK02、SX01・02出土遺物



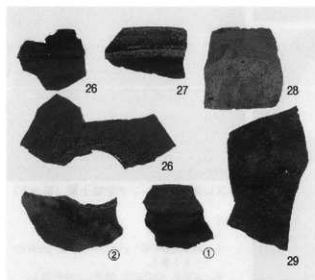
I 区SX03出土土師質土器・瓦質土器



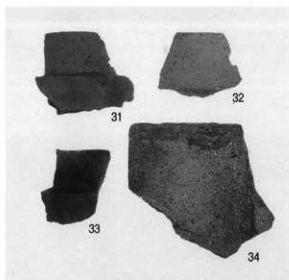
I 区SX03出土土師質土鍋



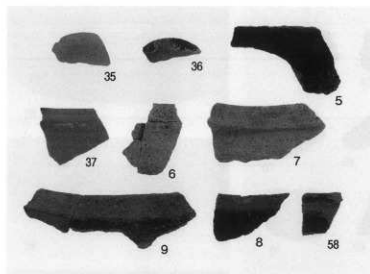
I 区SX03出土瓦当



I 区SX03出土陶器



I 区SX03出土瓦



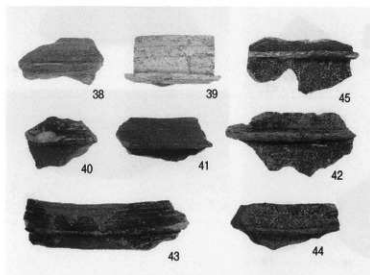
I 区SK02、SX01・04・05・06出土土師質土器



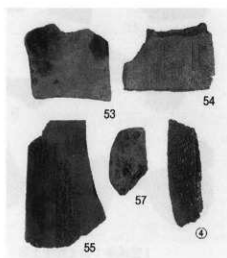
I 区SX04出土備前焼摺鉢



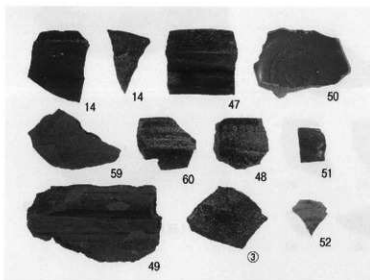
I 区SX04出土瓦当



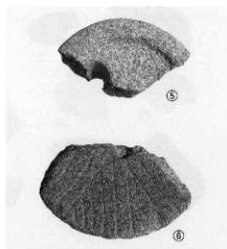
I 区SX04・05出土土師質土器・瓦質土器



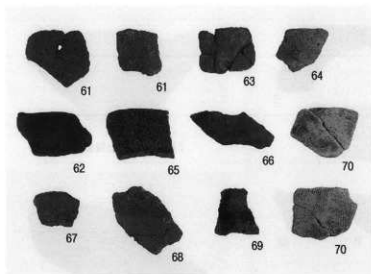
I 区SX04出土瓦・石製品・緑色片岩



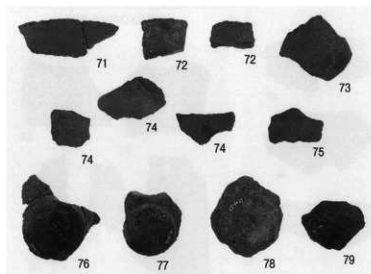
I 区SK02、SX04・05・06出土陶器・磁器



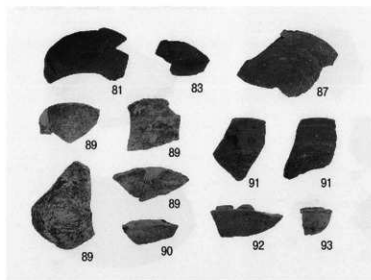
I 区SX04出土石臼



I 区周濠 1 出土弥生土器・土師器 (1)



I 区周濠 1 出土弥生土器・土師器 (2)



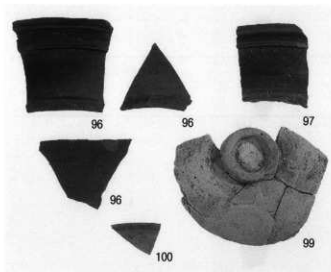
I 区周濠 1 出土須惠器杯蓋・杯身



I 区周濠 1 出土須惠器杯蓋



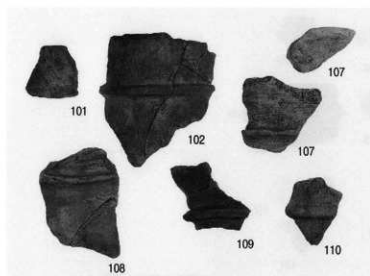
I 区周濠 1 出土須惠器杯身



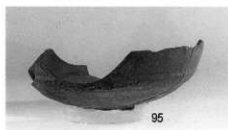
I 区周濠 1 出土须惠器



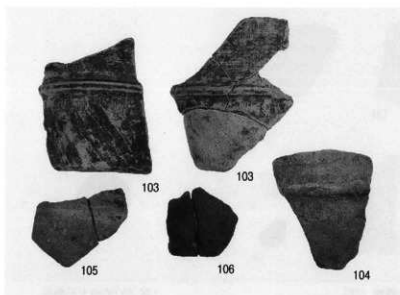
I 区周濠 1 出土须惠器奭



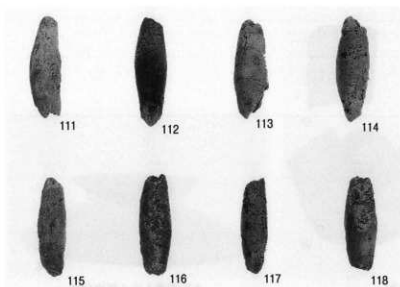
I 区周濠 1 出土埴輪 (1)



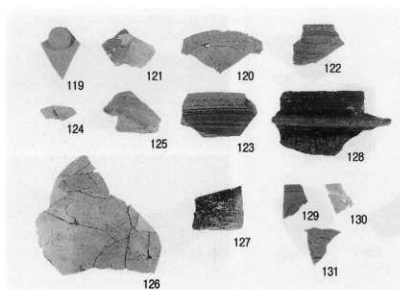
I 区周濠 1 出土须惠器高杯



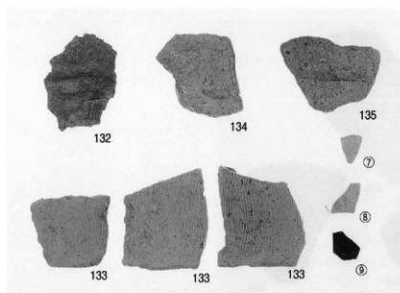
I 区周濠 1 出土埴輪 (2)



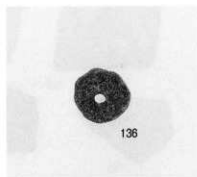
I 区周濠 1 出土土錘



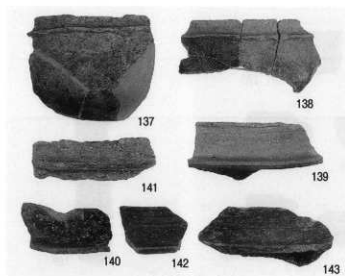
I 区包含層出土遺物 (1)



I 区包含層出土遺物 (2)



I 区 SX05 出土石製品



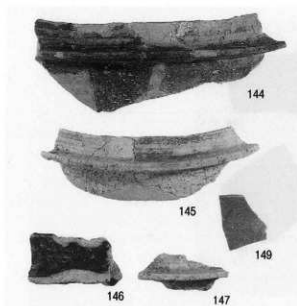
II 区池出土遺物 (1)



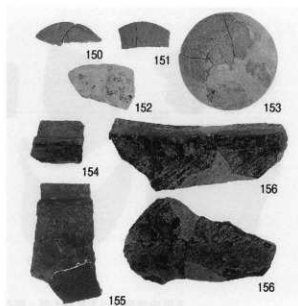
II 区池出土瓦質茶釜



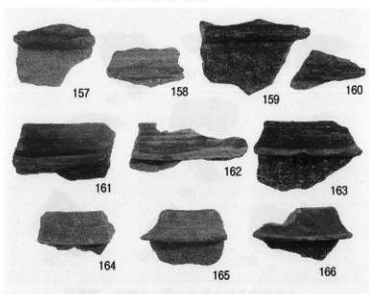
II 区 SD13 出土土師質小皿



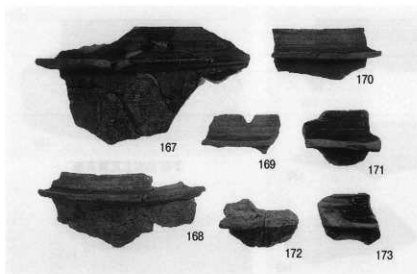
II 区池出土遺物 (2)



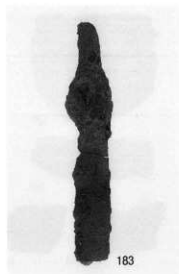
II 区中世遺構出土土師質土器



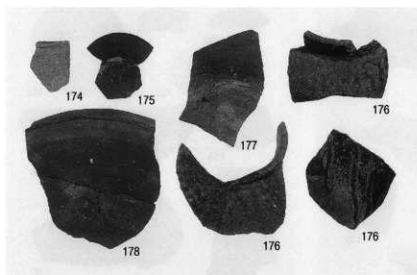
II 区中世遺構出土羽釜 (1)



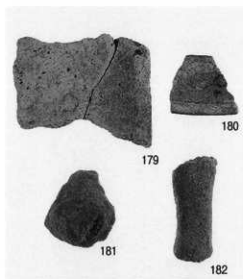
II 区中世遺構出土羽釜 (2)



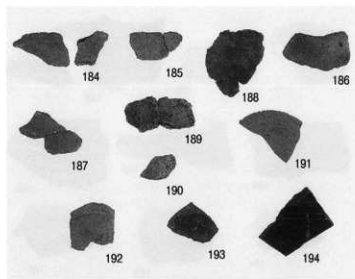
II 区 SD13 出土刀子



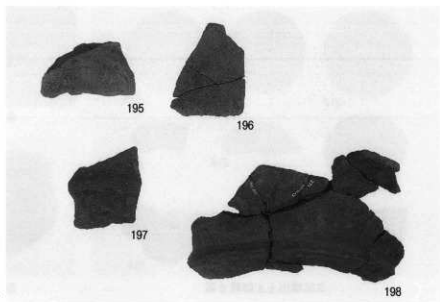
II 区中世遺構出土瓦質土器・陶器



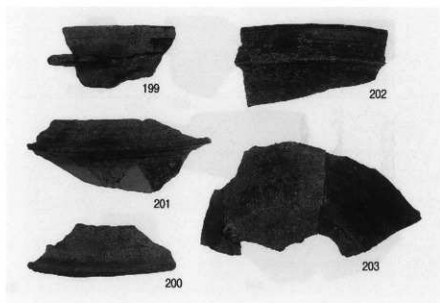
II 区中世遺構出土土師質土器・瓦



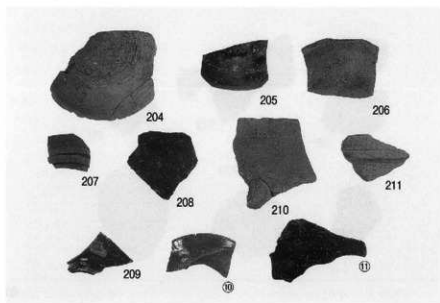
II 区周濠 2 出土弥生土器・土師器・須恵器



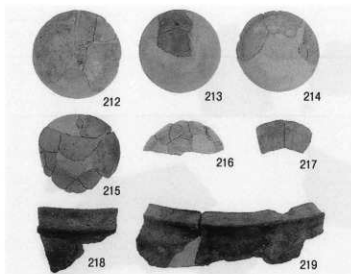
II 区周濠 2 出土铜轮



II 区周濠 2 出土中世遗物



II 区包含层出土遗物



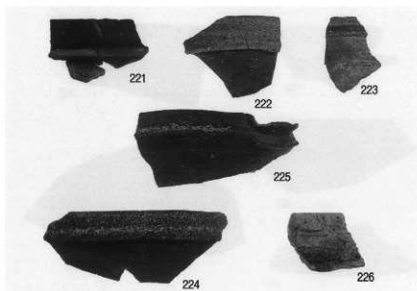
Ⅲ区堀出土土師質土器



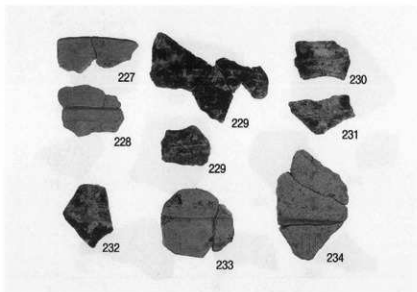
Ⅲ区堀出土土師質小皿



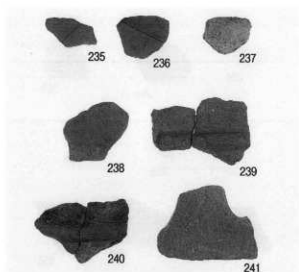
Ⅲ区堀出土土師質土鍋



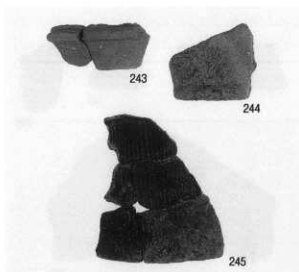
Ⅲ区堀出土瓦質土器・陶器・瓦



Ⅲ区周濠3出土円筒埴輪



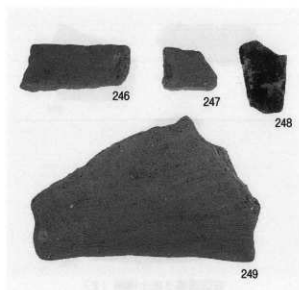
Ⅲ区周濠3出土埴輪 (1)



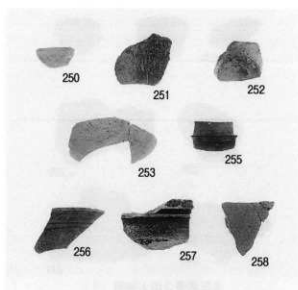
Ⅲ区周濠3出土埴輪 (2)



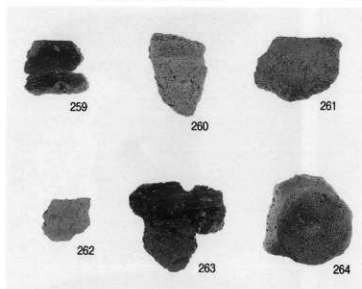
Ⅲ区周濠3出土朝顔形埴輪



Ⅲ区周濠3出土形象埴輪

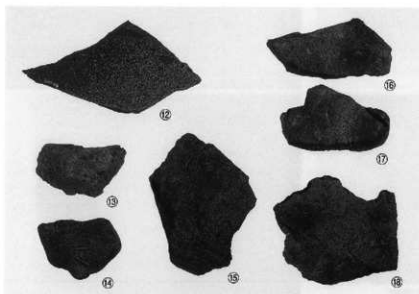


Ⅲ区・Ⅳ区出土弥生土器・土師器・須恵器



Ⅲ区周濠3出土イダコ壺

Ⅲ区 SK08出土弥生土器



Ⅳ区堀出土陶器・Ⅳ区土橋出土石材

(写真左列上から)

I 区調査風景

II 区付近（上段）から見下ろしたI 区（下段）。その南方には、芦屋の海岸部に広がる埋め立て地の高層建物群が一望できる。

文化財保護審議会村川行弘委員（故人）の視察

2008年5月22日、三条岡山遺跡において古墳の周濠が初めて確認されたという報告を受けて、村川委員が現地を視察された。村川委員は、2009年4月6日に永眠された（享年84才）ため、これが、最後の芦屋市の遺跡視察になった。

III 区調査風景

三条岡山遺跡の発掘調査には、「トライやるウィーク」活動で、芦屋市内の中学2年生も十名参加した。彼らは、遺構の測量と図面作成、遺物の簡易鑑別など、多くの作業に携わり、汗を流しながら一生の思い出となる経験を多数積んだ。

(写真右列上から)

報告書作成のための遺物実測作業

現地における発掘調査が終了した後は、記録保存のための報告書作成作業が待っている。遺物の記録のため、実測図作成は重要かつ手間の掛かる作業である。

遺物復元作業

遺跡から出土した遺物は、大抵多くが破片になっている。それを一つ一つ繋ぎ合わせ、部品の足りないところはモルタルで埋めていく。芦屋市では、遺物復元に長年の熟練技術を生かされた市民ボランティアの協力で、この作業を乗り越えている。感謝の気持ちでいっぱいである。

芦屋市文化財調査報告 第82集

三条岡山遺跡発掘調査報告書(第19地点)

－片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群－

2009年(平成21年)9月30日 印刷発行

発 行 芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL.0797-38-2115 FAX.0797-38-2089

編 集 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課文化財担当

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL.0797-38-2115 FAX.0797-38-2089

印 刷 ウニス印刷株式会社

〒677-0054 兵庫県西脇市野村町大坪471

TEL.0795-22-3226

